常磐自動車道遺跡調査報告57

仲禅寺遺跡（1・2次調査）
朴迫A遺跡
原　B遺跡（2次調査）
沢東B遺跡（3次調査）
古堤遺跡

序　　文

福島県浜通り地方を縦貫する常磐自動車道は，昭和63年に埼玉県三郷～いわき中央間，平成11年にいわき中央～いわき四倉間，平成14年にはいわき四倉～広野間，平成16年には広野～常磐富岡間が開通し，現在は富岡～宮城県山元間で工事が進められています。

この常磐自動車道建設用地内には，先人が残した貴重な文化遺産が所在しており，周知の埋蔵文化財包蔵地を含め，数多くの遺跡等を確認しております。

埋蔵文化財は，それぞれの地域の歴史と文化に根ざした歴史的遺産であると同時に，我が国の歴史・文化等の正しい理解と，将来の文化の向上発展の基礎をなすものです。

福島県教育委員会では，常磐自動車道建設予定地内で確認されたこれらの埋蔵文化財の保護・保存について，開発関係機関と協議を重ね，平成５年度以降，埋蔵文化財包蔵地の範囲や性格を確かめるための試掘調査を行い，その結果をもとに，平成６年度から，現状保存が困難な遺跡については記録として保存することとし，発掘調査を実施してきました。

本報告書は，平成19年度と平成20年度に行った浪江町の仲禅寺遺跡と，平成20年度に行った浪江町の沢東Ｂ遺跡・原Ｂ遺跡・朴廼Ａ遺跡・古堤遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。この報告書が，文化財に対する御理解を深め，地域の歴史を解明するための基礎資料となり，さらには生涯学習等の資料として広く県民の皆様に御活用していただければ幸いに存じます。

最後に，発掘調査から報告書の作成にあたり，御協力いただいた東日本高速道路株式会社，浪江町教育委員会，財団法人福島県文化振興事業団をはじめとする関係機関及び関係各位に対し，感謝の意を表するものであります。

平成21年11月

福島県教育委員会
教育長　遠藤俊博

あいさつ

財団法人福島県文化振興事業団では，福島県教育委員会からの委託により，県内の大規模開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査業務を行っております。

常磐自動車道建設にかかる埋蔵文化財の調査は，平成６年度にいわき市四倉町に所在する遺跡の調査を開始し，富岡ＩＣまでの間については，楢葉パーキングエリアの一部を除き，平成13年度までに発掘調査を終了しております。また，平成14年度からは富岡ＩＣから相馬ＩＣ予定地までの区間にかかる遺跡の調査を本格的に開始し，現在も調査を実施しております。

本報告書は，平成19・20年度に発掘調査を実施した仲禅寺遺跡，平成20年度に発掘調査を実施した朴迫Ａ遺跡，原Ｂ遺跡，沢東Ｂ遺跡，古堤遺跡の成果をまとめたものです。

仲禅寺遺跡では近代の大堀相馬焼の灰原を調査し，近代の大堀相馬焼の歴史を解明する上で，貴重な資料を得ることができました。

朴迫Ａ遺跡・原Ｂ遺跡・古堤遺跡では，縄文時代の土坑や土器片が確認されています。

沢東Ｂ遺跡では中・近世の溝跡や井戸，建物跡が見つかりました。

今後，これらの調査成果を歴史研究の基礎資料として，さらには地域社会を理解する資料として，生涯学習の場等で幅広く活用していただければ幸いに存じます。

終わりに，この調査に御協力いただきました東日本高速道路株式会社，浪江町ならびに地域住民の皆様に，深く感謝を申し上げますとともに，当事業団の事業の推進につきまして，今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成21年11月

財団法人　福島県文化振興事業団
理事長　　富　田　孝　志

緒　　言

1　本書は，平成19・20年度に実施した常磐自動車道（いわき工区）遺跡調査の発掘調査報告書である。

2　本書には以下に記す遺跡調査成果を収録した。

仲禅寺遺跡	福島県双葉郡浪江町大字小野田字仲禅寺	埋蔵文化財番号　54700134
朴迫Ａ遺跡	福島県双葉郡浪江町大字室原字朴迫	埋蔵文化財番号　54700127
原　Ｂ遺跡	福島県双葉郡浪江町大字室原字原	埋蔵文化財番号　54700123
沢東Ｂ遺跡	福島県双葉郡浪江町大字立野字沢東	埋蔵文化財番号　54700137
古　堤遺跡	福島県双葉郡浪江町大字立野字古堤	埋蔵文化財番号　54700140

3　本事業は，福島県教育委員会が東日本高速道路株式会社の委託を受けて実施し，調査に係る費用は東日本高速道路株式会社が負担した。

4　福島県教育委員会は，発掘調査を財団法人福島県文化振興事業団に委託して実施した。

5　財団法人福島県文化振興事業団では，遺跡調査部遺跡調査グループ（現，遺跡調査課）の下記の職員を配して調査および報告書作成にあたった。

副　主　幹　山岸　英夫　　文化財主査　吉野　滋夫　　文化財主査　佐藤　啓
文化財副主査　三浦　武司　　嘱　　託　中野　幸大（平成21年３月まで現職）
嘱　　託　水野　一夫

6　本書の執筆にあたっては，調査を担当した調査員が分担して行い，三浦武司が一部加筆修正を行った。執筆分担は章・節末または文末に示した。

7　本書に掲載した自然科学分析は，次の機関に委託し，付章にその結果と考察を掲載している。
古堤遺跡出土資料の放射性炭素年代測定：パリノ・サーヴェイ株式会社
古堤遺跡炭化物樹種同定：株式会社　加速器分析研究所

8　引用・参考文献は執筆者の敬称を略し，編ごとにまとめて掲載した。

9　本書に収録した遺跡の調査記録および出土資料は，福島県教育委員会が保管している。

10　発掘調査および報告書作成にあたり，次の諸機関・諸氏からご協力いただいた。
浪江町教育委員会　　東日本高速道路株式会社東北支社いわき工事事務所
請戸川土地改良区　　陶　俊明

用　　例

1　本書における遺構図版の用例は，以下のとおりである。

(1) 方　　位　遺構図・地形図の方位は世界測地系で設定した座標北を示す。表記がない遺構図はすべて図の真上を座標北とした。

(2) 標　　高　水準点を基にした海抜標高で示した。

(3) 縮　　尺　各挿図中に縮小率を示した。

(4) 土　　層　基本土層はアルファベット大文字Lとローマ数字を組み合わせ，遺構内の堆積土はアルファベット小文字ℓと算用数字を組み合わせて表記した。
（例）基本層位－ＬⅠ・ＬⅡ…，遺構内堆積土－ℓ１・ℓ２…
なお，挿図の土層注記で使用した土色名は，『新版標準土色帖22版』（小山正忠・竹原秀雄編著　1999　日本色研究事業株式会社発行）に基づく。

(5) ケ　　バ　遺構内の傾斜面は「 〒 」で表現したが，相対的に緩傾斜の部分には「〒〒」で表している。また，「〒〒」は後世の撹乱が明らかである場合に使用した。

(6) 網　か　け　挿図中の網かけの用例は，同図中に表示した。

(8) 深　　さ　竪穴住居跡等でピット番号に付した（　）内の数字は，検出面からのピットの深さ（cm）を示している。

2　本書における遺物図版の用例は，以下のとおりである。

(1) 縮　　尺　各挿図中に縮小率を示した。

(2) 番　　号　遺物は挿図ごとに通し番号を付した。文中における遺物番号は，例えば図１の１番の遺物を「図１－１」とし，写真図版中では「１図１」と示した。

(3) 注　　記　出土グリッド，出土層位等は遺物番号の右脇に示した。

(4) 土器断面　須恵器の断面は黒塗りとした。粘土積み上げ痕を一点鎖線で表記し，胎土中に繊維が混和されたものには▲を付した。

(5) 遺物計測値　（　）内の数値は推定値，［　］内の数値は遺存値を示す。

(6) 網　　点　挿図中の網点の用例は，図中に示した。

3　本書で使用した略号は，次のとおりである。

浪江町：ＮＥ　仲禅寺遺跡：ＣＺＺ　朴迫Ａ遺跡：ＨＳ・Ａ　原Ｂ遺跡：Ｈ・Ｂ
沢東Ｂ遺跡：ＳＨ・Ｂ　古堤遺跡：ＨＴ　陶器窯跡：ＳＲ　掘立柱建物跡：ＳＢ
溝跡：ＳＤ　土　坑：ＳＫ　井戸跡：ＳＥ　柱列：ＳＡ　屋外焼土遺構：ＳＧ
小穴・ピット：Ｐ　グリッド：Ｇ

目　　次

序　章

第１節　調査に至る経緯……1

第２節　地理的環境……4

第３節　歴史的環境……6

第１編　仲禅寺遺跡（１・２次調査）

第１章　周辺地形と調査経過

第１節　遺跡の位置と周辺地形……11

第２節　調査経過……11

第３節　調査の方法……13

第２章　遺構と遺物

第１節　遺構の分布と基本土層……14

第２節　陶器窯跡……14

第３節　土　坑・小　穴……25

１号土坑（25）　　１・２号小穴（26）

第４節　遺構外出土遺物……26

第３章　ま　と　め……34

第２編　朴廹Ａ遺跡

第１章　周辺地形と調査経過

第１節　遺跡の位置と周辺地形……39

第２節　調査経過……40

第３節　調査の方法……40

第２章　遺構と遺物

第１節　遺構の分布と基本土層……42

第２節　土　　坑……42

１号土坑（42）　　２号土坑（44）　　３号土坑（44）　　４号土坑（44）

５号土坑（46）　　６号土坑（46）

第３節　焼土遺構……47
１号焼土遺構（47）　２号焼土遺構（47）　３号焼土遺構（47）　４号焼土遺構（48）
５号焼土遺構（48）　６号焼土遺構（48）
第４節　遺構外出土遺物……50
第３章　ま　と　め……53

第３編　原Ｂ遺跡（２次調査）
第１章　周辺地形と調査経過
第１節　遺跡の位置と周辺地形……57
第２節　調査経過……57
第３節　調査の方法……58
第２章　遺構と遺物
第１節　遺構の分布と基本土層……59
第２節　土　坑……59
22号土坑（61）　23号土坑（61）　24号土坑（61）
第３節　溝　跡……62
３号溝跡（63）　４号溝跡（63）
第４節　遺構外出土遺物……65
第３章　ま　と　め……68

第４編　沢東Ｂ遺跡（３次調査）
第１章　周辺地形と調査経過
第１節　遺跡の位置と周辺地形……71
第２節　調査経過……71
第３節　調査の方法……73
第２章　遺構と遺物
第１節　遺構の分布と基本土層……75
第２節　掘立柱建物跡・柵列跡……78
11号建物跡（78）　18号建物跡（80）　29号建物跡（80）　30号建物跡（82）
12号柵列跡（83）
第３節　土　坑・井戸跡……83
25号土坑（83）　27号土坑（84）　32号土坑（84）　33号土坑（86）

8号井戸跡（86）
第4節　溝　　跡……87
10号溝跡（87）　16号溝跡（87）　17号溝跡（87）　19号溝跡（88）
27号溝跡（88）　31号溝跡（88）
第5節　小　　穴……89
第3章　ま　と　め……90

第5編　古堤遺跡
第1章　周辺地形と調査経過
第1節　遺跡の位置と周辺地形……93
第2節　調査経過……93
第3節　調査の方法……95
第2章　遺構と遺物
第1節　遺構の分布と基本土層……96
第2節　土　　坑……96
1号土坑（97）　2号土坑（98）　3号土坑（98）　4号土坑（99）
5号土坑（99）　6号土坑（99）　7号土坑（101）　8号土坑（101）
9号土坑（102）　10号土坑（102）　11号土坑（102）　12号土坑（104）
第3節　遺構外出土遺物……105
第3章　ま　と　め……106
付　章　自然科学分析
第1節　古堤遺跡の放射性炭素年代……107
第2節　古堤遺跡出土炭化材の樹種同定……111

挿図・表・写真目次

序　章

［挿図］

図1　常磐自動車道位置図……1
図2　遺跡周辺の環境……5
図3　周辺の遺跡……7

［表］

表1　周辺の遺跡一覧……8

第１編　仲禅寺遺跡（１・２次調査）

［挿図］

図１　調査区位置図……12
図２　遺構配置図・基本土層……15
図３　１号陶器窯跡灰原……16
図４　１号陶器窯跡灰原出土遺物（１）……17
図５　１号陶器窯跡灰原出土遺物（２）……19
図６　１号陶器窯跡灰原出土遺物（３）……20
図７　１号陶器窯跡灰原出土遺物（４）……21
図８　１号陶器窯跡灰原出土遺物（５）……22
図９　１号陶器窯跡灰原出土遺物（６）……24
図10　１号土坑，１・２号小穴……26
図11　遺構外出土遺物（１）……28
図12　遺構外出土遺物（２）……29
図13　遺構外出土遺物（３）……30
図14　遺構外出土遺物（４）……31

［表］

表１　１号陶器窯跡灰原
　　出土陶器一覧……33
表２　遺構外出土陶器一覧……33

［写真］

１　Ⅰ区全景（北から）……117
２　Ⅲ区全景（東から）……117
３　基本土層，１号土坑，１号陶器窯跡灰原，
　　遺物出土状況……118
４　１号陶器窯灰原出土陶器（１）……119
５　１号陶器窯灰原出土陶器・窯道具……120
６　１号陶器窯灰原出土陶器（２）……120
７　１号陶器窯灰原出土窯道具……121
８　遺構内外出土窯道具……121
９　遺構外出土陶器……122
10　遺構外出土縄文土器……123
11　遺物細部……124

第２編　朴廹Ａ遺跡

［挿図］

図１　調査区位置図……39
図２　遺構配置図・基本土層……43
図３　１～５号土坑……45
図４　６号土坑……47
図５　１～６号焼土遺構……48
図６　遺構内出土遺物……49
図７　遺構外出土遺物（１）……51
図８　遺構外出土遺物（２）……52

［写真］

１　調査区北側全景（南東から）……127
２　調査区南側全景（西から）……127
３　基本土層，１～４号土坑……128
４　５・６号土坑，
　　１・２・５・６号焼土遺構……129
５　遺構内出土遺物……130
６　遺構外出土遺物……130

第３編　原Ｂ遺跡（２次調査）

［挿図］

図１　調査区位置図……57
図２　遺構配置図・基本土層……60
図３　22～24号土坑……62
図４　３・４号溝跡……63

図5　遺構内出土遺物……64
図6　遺構外出土遺物（1）……66
図7　遺構外出土遺物（2）……67
[写真]
1　調査区全景（南から）……133
2　調査区南側全景（南東から）……133
3　基本土層，22～24号土坑，1・3号溝跡……134
4　2・4号溝跡……135
5　遺構内出土縄文土器……135
6　遺構内出土陶器……136
7　遺構外出土縄文土器……136

第4編　沢東B遺跡（3次調査）

[挿図]
図1　調査区位置図……72
図2　調査範囲とグリッド配置図……74
図3　遺構配置図（1）・基本土層……76
図4　遺構配置図（2）……77
図5　11・18号建物跡……79
図6　29・30号建物跡……81
図7　12号柵列跡……83
図8　25・27・32・33号土坑，8号井戸跡……85
図9　10・16・17・19・27・31号溝跡……89
[写真]
1　調査区南側全景（北から）……139
2　調査区北側全景（北から）……139
3　調査区全景，基本土層，作業風景……140
4　29・30号建物跡（北から）……140
5　25・32・33号土坑，8号井戸跡，31号溝跡……141
6　10・16・17・19号溝跡……142

第5編　古堤遺跡

[挿図]
図1　調査区位置図……94
図2　遺構配置図・基本土層……97
図3　1～5号土坑……100
図4　6～10・12号土坑……103
図5　11号土坑……104
図6　遺構外出土遺物……105
図7　暦年較正年代グラフ……110
図8　炭化材の木材組織　顕微鏡写真……114
[表]
表1　放射性炭素年代測定結果……109
表2　暦年較正年代……109
表3　樹種同定結果……112
[写真]
1　遺跡遠景（北から）……145
2　調査区全景（南東から）……145
3　基本土層，1～3号土坑……146
4　4～8・11号土坑……147
5　9・10・12号土坑，遺構外出土遺物……148

序　　章

第１節　調査に至る経緯

平成19年度までの調査経過

常磐自動車道は，埼玉県三郷市を起点として，千葉県・茨城県・福島県浜通り地方を北進し，宮城県仙台市に至る高速道路として計画された路線である。この内，昭和63年度末には三郷インターチェンジ（以下ＩＣと略す）～福島県いわき市のいわき中央ＩＣ間の供用が開始され，さらに，平成11年にはいわき四倉ＩＣ，平成14年には広野ＩＣ，平成16年４月には常磐富岡ＩＣまでの供用を開始している。

これら供用が開始された福島県内区間のいわき四倉ＩＣまでに所在する埋蔵文化財の内，いわき市四倉町大野地区に所在する10遺跡については，福島県教育委員会が財団法人福島県文化センター（現，財団法人福島県文化振興事業団）に発掘調査を委託して，平成６～８年に実施した。また，福島県教育委員会では，いわき四倉ＩＣ以北の福島県内区間に所在する埋蔵文化財に関して，平成６年度より表面調査を実施し，平成10年度までに終了した。さらに，この表面調査の成果に基づき，平成７年度よりいわき四倉ＩＣ～富岡ＩＣ間の試掘調査を実施し，平成９年度から同区間に所在する遺跡の発掘調査も開始した。

平成９年度は，いわき市内の５遺跡と広野町内の１遺跡の計６遺跡について発掘調査を実施した。平成10年度は，いわき市内の４遺跡，広野町内の３遺跡のほか，新たに楢葉町内の３遺跡，富岡町内の２遺跡の計12遺跡について発掘調査を実施した。この平成10年度の調査により，路線予定地内

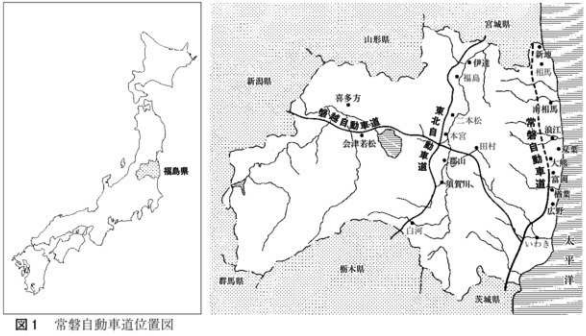


図１　常磐自動車道位置図

に所在する遺跡の内，いわき市に関る遺跡の発掘調査を全て終了した。

平成11年度は広野町内の４遺跡，楢葉町内の５遺跡の計９遺跡について，平成12年度は広野町内の１遺跡，楢葉町内の７遺跡，富岡町内の５遺跡の計13遺跡について発掘調査を実施した。平成13年度は楢葉町内の１遺跡，富岡町内の５遺跡の計６遺跡について発掘調査を実施し，楢葉パーキングエリアに関わる大谷上ノ原遺跡の一部の調査を残して，楢葉町以南の発掘調査を終了した。

平成14年度は，富岡町の１遺跡，大熊町の２遺跡の計３遺跡について発掘調査を実施した。なお，富岡ＩＣまでの区間については当初，日本道路公団東北支社(現，東日本高速道路株式会社東北支社)いわき工事事務所，富岡ＩＣ以北については相馬工事事務所がそれぞれ管轄していたが，７月から富岡ＩＣ～浪江町内までの区間についても，いわき工事事務所が管轄することとなった。

平成15年度は，いわき工事事務所管轄区域(以下，いわき工区)の浪江町内で２遺跡，相馬工事事務所管轄区域(以下，相馬工区)の相馬市内で２遺跡の計４遺跡について発掘調査を実施した。平成16年度は，いわき工区で大熊町内の３遺跡，相馬工区で相馬市内の１遺跡，鹿島町内(現，南相馬市鹿島区)の２遺跡の計６遺跡について発掘調査を実施した。平成17年度は，いわき工区で大熊町内の３遺跡，双葉町内の２遺跡，浪江町内の２遺跡，相馬工区で相馬市内の１遺跡，南相馬市内の５遺跡の計13遺跡について発掘調査を実施した。

平成18年度は，いわき工区と相馬工区で計18遺跡の発掘調査を実施した。このうち，いわき工区では大熊町内に所在する上平Ａ遺跡(４次調査)と浪江町内に所在する沢東Ｂ遺跡(２次調査)・原Ｂ遺跡・朴廻Ｂ遺跡・朴廻Ｃ遺跡・後田Ａ遺跡・東畑遺跡の計７遺跡で発掘調査を実施した。

平成19年度のいわき工区に関る遺跡発掘調査は，浪江町に所在する仲禅寺遺跡・小廻遺跡・朴廻Ｄ遺跡・田子平遺跡の計４遺跡で発掘調査を実施した。このうち，小廻遺跡・朴廻Ｄ遺跡については保存範囲すべて，仲禅寺遺跡は町道・電柱部分を除き，田子平遺跡は保存範囲の南側部分について発掘調査を終了した。

平成20年度の調査経過

平成20年度の常磐自動車道いわき工区に関る遺跡発掘調査は，当初，楢葉町内に所在する大谷上ノ原遺跡と浪江町内に所在する仲禅寺遺跡・沢東Ｂ遺跡・田子平遺跡・古堤遺跡の５遺跡を対象に，５名の調査員を配置して開始した。その後，工事計画・設計の変更などがあり，新たに浪江町内に所在する原Ｂ遺跡・後田Ａ遺跡・朴廻Ａ遺跡の３遺跡が追加され計８遺跡について調査を実施した。調査面積は総計15,900㎡である。

発掘調査は，工事の優先度が高い仲禅寺遺跡・沢東Ｂ遺跡と保存範囲の広い大谷上ノ原遺跡の３遺跡について４月から開始した。

仲禅寺遺跡の調査は，平成19年度に引き続く２次調査で，町道・電柱等の移設部分の100㎡を対象に４月14日から開始し，１次調査と同様に近世大堀相馬焼の陶器窯跡に伴う窯道具類と縄文時代の遺物を検出した。４月22日に現地調査を終了し，引渡しを行った。

沢東Ｂ遺跡の調査は，平成15・18年度に引き続く３次調査で，道路部分の800㎡を対象とし，４

月9日から開始した。2次調査の続きとなる溝跡や掘立柱建物跡等の中・近世の遺構を確認し，5月23日に調査を終了した。その後，連絡所等の撤去を行い5月27日に現地引渡しを行った。

大谷上ノ原遺跡の調査は，平成11・12年度に引き続く3次調査で，楢葉パーキングエリアに関る7,000㎡を対象とし，4月14日から開始した。調査の進展に伴い，古代の遺構・遺物と縄文時代の遺物が検出されたが，1・2次調査で確認された旧石器時代の遺物は検出できなかった。調査は順調に進み，10月7日に現地調査を終了した。調査区の一部埋め戻し作業や連絡所等を撤去し，10月23日に現地引渡しをおこなった。

原B遺跡の調査は，平成18年度に引き続く2次調査で，200㎡を対象に5月26日から開始した。数量的には少ないものの縄文時代・弥生時代・平安時代・近世の遺構・遺物が検出され，6月6日に調査を終了し，6月24日に現地引渡しを行った。

後田A遺跡の調査も平成18年度に引き続く2次調査で，400㎡を対象に6月16日から調査を開始した。後田A遺跡は近世大堀相馬焼の陶器窯跡で，今回の調査区からは土坑や掘立柱建物跡が検出され，陶器生産に関る作業場の一部と考えられる。調査は6月30日に終了し，7月3日に現地引渡しを行った。

朴廻A遺跡は，福島県教育委員会が7月に実施した試掘調査によって，新たに保存範囲が示された縄文時代の遺跡で，400㎡を対象に9月2日から調査を開始した。縄文時代早・中期の遺構・遺物が検出され，9月26日に調査を終了し，9月30日に現地引渡しを行った。

古堤遺跡は常磐自動車道いわき工区の中で，最北端に所在する。遺跡までの進入路の関係から調査は10月6日から開始した。縄文時代の落し穴と平安時代の簡易な木炭窯が検出され，遺跡の性格が縄文時代の狩猟場と平安時代の製鉄関連遺跡と判明した。調査は11月14日に終了し，11月21日に現地引渡しを行った。

田子平遺跡の調査は，平成19年度に引き続く2次調査で，6,000㎡を対象に5月12日から開始した。5月16日には工事用道路取付部分，8月19日には北側部分，10月7日には中央部分，10月23日には南側町道部分と工事計画上，優先部分からの調査・引渡しとなったが，新たな成果を得ることができた。

平成19年度の調査では，縄文時代後期後葉を主体とする集落跡と判明し，多数の竪穴住居跡・埋甕群や祭祀関連と考えられる稀少で多彩な遺物が出土した。今回の調査では，新たに掘立柱建物跡群や埋甕群の遺構，耳飾や土笛等の遺物が検出され，集落跡範囲の北東端を確認した。これらの成果を受け，8月23日には福島県教育委員会から委託されている「遺跡の案内人(ボランティア)」事業による現地公開が行われ，雨天にもかかわらず多数の見学者が訪れた。

また，今回の調査では，平安時代の竪穴住居跡も検出され，田子平遺跡が縄文時代・平安時代の複合遺跡と判明した。遺構の多くは重なりながら建て替えられており，順次精査を行いながら記録作業を進め12月10日にすべての現地調査を終了し，現地引渡しを行った。　（山　岸）

第２節　地理的環境

位　置

福島県は，本州の北東部，東北地方の南端に位置する。面積の約８割を山地が占め，南北に走る阿武隈高地・奥羽山脈・越後山脈に隔てられた「浜通り地方」・「中通り地方」・「会津地方」の３区域に区分される。本書に掲載した５遺跡は，浜通り地方中央部の双葉郡浪江町に所在する。北は南相馬市・相馬郡飯館村，東は太平洋に面し，南は双葉郡双葉町・大熊町，西は双葉郡葛尾村・伊達郡川俣町・田村郡都路村に接している。町の東部をＪＲ常磐線と一般国道６号が南北に走り，町の中央部には阿武隈高地東縁を沿うように主要地方道相馬浪江線・いわき浪江線が通っている。また，請戸川に沿って一般国道114号が町の東西を貫いている。

仲禅寺遺跡は浪江町大字小野田字仲禅寺に所在し，北緯37°28′40″，東経140°57′29″に位置する。朴迫Ａ遺跡は浪江町大字室原字朴迫に所在し，北緯37°29′45″，東経140°56′39″に位置する。原Ｂ遺跡は浪江町大字室原字原に所在し，北緯37°30′12″，東経140°56′35″に位置する。沢東Ｂ遺跡は浪江町大字立野字沢東に所在し，北緯37°31′00″，東経140°56′40″に位置する。古堤遺跡は浪江町大字立野字古堤に所在し，北緯37°31′24″，東経140°56′35″に位置している。

地　質

浪江町の地質構造は，ほぼ南北に走る双葉断層を挟んだ東方の低地帯と，西方の阿武隈高地とで大きく異なる。断層の西側にあたる阿武隈高地の山間部には，中生代白亜紀の花崗岩類が広く分布し，新生代第三紀に形成された向山層・水野谷層・五安層・椚平層が発達している。断層の東側は新生代第三紀に形成された大年寺層などが堆積し，丘陵部を構成している。

浪江町を流れる主な河川は，北から請戸川・高瀬川がある。両河川とも阿武隈高地に源を発し，山間部において急峻な樹枝状の渓谷を形成しながら東流している。双葉断層の東では，河床の勾配は緩やかとなり，河岸段丘を形成している。河岸段丘は標高の高い順から，高位段丘，中位Ⅰ，中位Ⅱ，中位Ⅲ，中位Ⅳ，低位Ⅰ，低位Ⅱ面と呼称されている。浪江町内においては中位段丘面が最も発達し，多くの遺跡も中位段面上に立地している。更新世後期の最終間氷期の海進・海退によって形成されたと考えられている。仲禅寺遺跡は高瀬川が形成した沖積地に立地し，標高19.5～20mである。朴迫Ａ遺跡は第四紀に形成された段丘面の基盤層を形成している仙台層群上に立地し，標高59～60.4mである。原Ｂ遺跡は請戸川南岸の低位段丘面上に立地し，標高38～38.4mを測る。沢東Ｂ遺跡は請戸川北岸の中位Ⅰ段丘面上に立地し，標高53.2～53.8mである。古堤遺跡は仙台層群上に立地し，標高66.5～70mを測る。　（三　浦）

参考文献

鈴木敬治ほか　1991『浪江・磐城富岡』福島県国土調査・土地分類基本調査　福島県農地林務部農地計画課

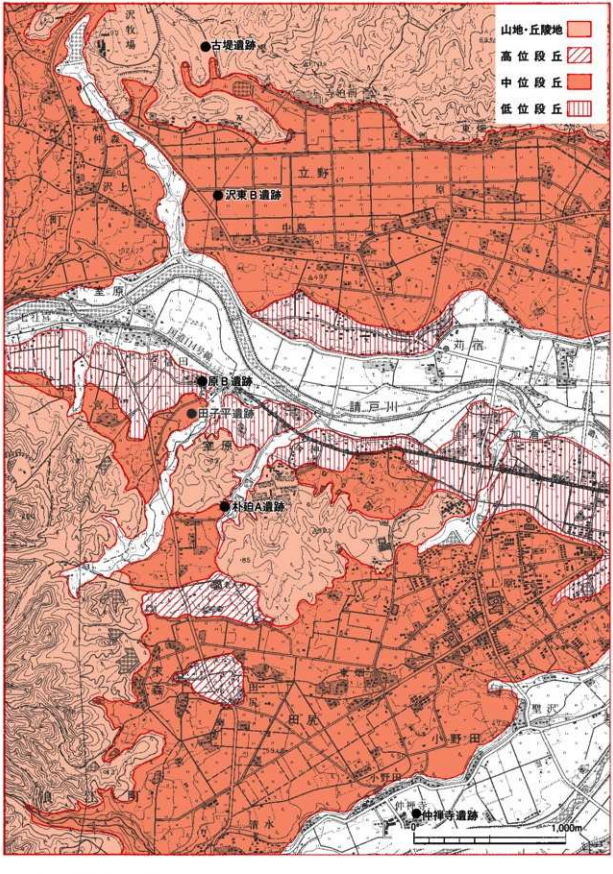

山地・丘陵地
高位段丘
中位段丘
低位段丘
古堤遺跡
沢東B遺跡
原B遺跡
田子平遺跡
朴柏A遺跡
仲禅寺遺跡
請戸川
立野
室原
田尻
小野田
0
1,000m

図2　遺跡周辺の環境

第３節　歴史的環境

浪江町の旧石器時代の遺跡は北上ノ原遺跡(28)・手子塚Ａ遺跡や西田原遺跡・酒田原遺跡の諸遺跡が挙げられるのみであったが，平成19年に調査された朴廻Ｄ遺跡(10)においてナイフ形石器や局部磨製石斧などが出土している。

最も古い縄文時代の遺跡として，縄文時代早期初頭の薄手無文土器が出土した乱塔前遺跡や，押型文土器が出土した本書所収の原Ｂ遺跡(３)などがある。縄文時代中期から後期にかけては，請戸川・高瀬川の両中位段丘面上に多く認められる傾向がある。順礼堂遺跡(19)・沢東Ｂ遺跡(４)・中平遺跡・百間沢遺跡などでは，竪穴住居跡が検出され，土器・石器が出土している。後期から晩期にかけては平成19・20年度に調査を行った田子平遺跡(12)や七社宮遺跡(21)の大規模な集落跡が位置している。竪穴住居跡や掘立柱建物跡，埋甕が検出されている。また，石棒や独鈷石など宗教的な様相をもつ遺物も出土していることも特徴である。

弥生時代の遺跡は少なく，散布地として上原遺跡ほか数遺跡を数えるのみである。原Ｂ遺跡(３)の２次調査においては，弥生時代後期の天王山式土器が出土している。

古墳時代になると請戸川・高瀬川流域の中・低位段丘面上に多くの古墳が造られるようになる。特に請戸川北岸の海岸線近くには，４世紀後半頃と考えられる前方後方墳がある本屋敷古墳群や全長60m規模の前方後円墳がある堂の森古墳，狐塚古墳などがある。５世紀後半には各地に群集墳が築造されるようになる。南大坂古墳群からは舟形の刳抜石棺が出土し，加倉古墳群(23)からは金銅製鍔や鉄刀・鉄斧・鉄鏃などが出土している。

奈良・平安時代の遺跡は，集落跡として小廻遺跡(11)や鹿屋敷遺跡がある。平安時代の製鉄関連遺跡として朴廻Ｂ遺跡(９)・朴廻Ｃ遺跡(８)・朴廻Ｄ遺跡(10)や太刀洗遺跡などがある。阿武隈高地と東縁の丘陵を利用して木炭窯を構築している状況が看取できる。

中世の浪江町は標葉氏の所領であった。北朝期には近隣の相馬氏や岩城氏，楢葉氏との抗争や同盟を繰り返しながら，大勢力を保っていたようである。14世紀前葉頃の立野古舘跡(15)が概期の遺跡として上げられる。1492(明応元)年標葉清隆・隆成は相馬盛胤によって権現堂城において滅ぼされている。以後この地は相馬氏の勢力化におかれ，岡田義胤が権現堂城に移っている。これ以後相馬氏はこの地を標葉郷とし，館を設けて領内の統治を整えていく。相馬領南辺の要城で泉田氏の居城である泉田城が有名である。当該期の遺跡として沢東Ｂ遺跡(４)があげられる。沢東Ｂ遺跡で調査した館跡は岡田氏の諸派として立野氏が本拠地とした館跡である可能性も考慮できる。

近世では標葉郷として相馬藩領として存続することとなる。この時代の遺跡としては立野経塚(16)，出口一里塚，北原御殿跡がある。そして，近世の浪江町において最も特徴的な遺跡としては大堀相馬焼の窯跡が上げられる。在郷給人である半谷休閑が地元で陶土を発見し，下男の左馬に命じて日用雑器を焼き始めたのが始まりとされる。1690(元禄３)年には，相馬領大堀村(現，浪江町

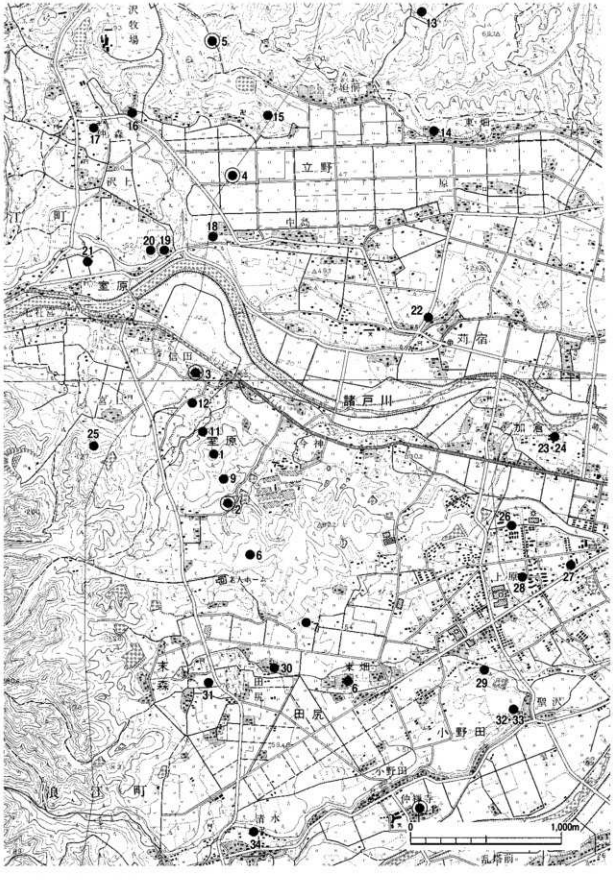


図３　周辺の遺跡

表1　周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	遺跡番号	所在地	遺跡の概要
1	仲禅寺遺跡	54700137	浪江町大字小野田字仲禅寺	縄文時代の散布地，近世の陶器窯跡
2	朴追A遺跡	54700127	浪江町大字室原字朴追	縄文時代の集落跡
3	原B遺跡	54700123	浪江町大字室原字原	縄文時代の集落跡
4	沢東B遺跡	54700137	浪江町大字立野字沢東	縄文時代の集落跡，中・近世の屋敷跡
5	古堤遺跡	54700140	浪江町大字立野字古堤	縄文・平安時代の散布地
6	東畑遺跡	54700115	浪江町大字田尻字東畑	近世の区画溝跡
7	後田A遺跡	54700131	浪江町大字田尻字後田	近世の陶器窯跡
8	朴追C遺跡	54700138	浪江町大字室原字朴追	平安時代の木炭窯
9	朴追B遺跡	54700126	浪江町大字室原字朴追	縄文時代の集落跡，平安時代の木炭窯
10	朴追D遺跡	54700139	浪江町大字室原字朴追	縄文時代の集落跡，平安時代の木炭窯
11	小追遺跡	54700142	浪江町大字室原字小追	縄文・平安時代の集落跡
12	田子平遺跡	54700125	浪江町大字室原字田子平	縄文・平安時代の集落跡
13	藤衛門屋敷遺跡	56300029	南相馬市小高区神山字藤衛門屋敷	縄文時代の散布地
14	林崎遺跡	54700110	浪江町大字立野字林崎	古墳～平安時代の散布地
15	立野古館跡	54700109	浪江町大字立野字寺追前	中世の城館跡
16	立野経塚	54700089	浪江町大字立野字関ノ倉	近世の塚
17	立野館跡	54700066	浪江町大字立野字仲ノ森	中世の城館跡
18	沢海戸遺跡	54700088	浪江町大字立野字沢海戸	縄文時代の散布地
19	順礼堂遺跡	54700011	浪江町大字立野字順礼堂	縄文・奈良・平安時代の散布地
20	立野古墳群	54700012	浪江町大字立野字順礼堂	古墳
21	七社宮遺跡	54700010	浪江町大字室原字七社宮	縄文時代の集落跡
22	鹿畑古墳	54700017	浪江町大字苅宿字鹿畑	古墳
23	加倉古墳群	54700027	浪江町大字加倉字下加倉	古墳
24	下加倉遺跡	54700119	浪江町大字加倉字下加倉	縄文時代の散布地
25	室原館跡	54700090	浪江町大字室原字室原	中世の城館跡
26	上ノ原遺跡	54700030	浪江町大字川添字北上ノ原	縄文～平安時代の散布地
27	南大坂遺跡	54700092	浪江町大字川添字南大坂	縄文～平安時代の散布地
28	北上ノ原遺跡	54700093	浪江町大字川添字北上ノ原	旧石器時代の散布地
29	聖沢遺跡	54700116	浪江町大字田尻字聖沢	弥生～平安時代の散布地
30	神内遺跡	54700114	浪江町大字田尻字神内	近世の散布地
31	東前畑遺跡	54700113	浪江町大字末森字東前田	縄文・古墳～平安時代の散布地
32	下原遺跡	54700034	浪江町大字小野田字下原	縄文～平安時代の散布地
33	下原古墳群	54700035	浪江町大字小野田字下原	古墳
34	清水遺跡	54700042	浪江町大字小野田字清水	縄文時代の散布地

大字大堀）を中心に陶器窯業が，相馬藩の庇護のもとで大いに発展し，18世紀後半には100戸を越える窯元が存在していた。窯跡が確認された遺跡として後田A遺跡（7）・大堀長井屋窯跡，厩原が検出された中平遺跡，本書所収の仲禅寺遺跡（1）などがある。大堀相馬焼は江戸時代から残る歴史的遺産で，現代においても浪江町の名産品として全国に名を轟かせている。

近代においては，1871（明治4）年7月廃藩置県により相馬中村藩は中村県となり，同11月には平県と合併し磐前県と改称された。1889（明治22）年に標葉郡浪江村となっている。1896（明治29）年には標葉郡と楢葉郡が合併して双葉郡となり，1900（明治33）年には浪江村から浪江町となっている。その後昭和には，請戸村・幾世橋村，大堀村・津島村などを編入し，一部双葉町へ編入するなどして現在の浪江町へ至っている。　（三　浦）

第１編　仲禅寺遺跡（１・２次調査）

遺跡記号	ＮＥ－ＣＺＺ
所在地	浪江町大字小野田字仲禅寺
時代・種類	縄文時代－散布地，近世・近代－窯跡
調査期間	１次調査　平成19年４月９日～５月30日
	２次調査　平成20年４月14日～４月22日
調査員	１次調査　吉野滋夫・中野幸大
	２次調査　山岸英夫・三浦武司
	中野幸大・水野一夫

第１章　周辺地形と調査経過

第１節　遺跡の位置と周辺地形

仲禅寺遺跡は，浜通り地方中央部の双葉郡浪江町大字小野田字仲禅寺に所在する。北緯37°28′40″，東経140°57′29″に位置する。遺跡は海岸線から約８km，ＪＲ常磐線浪江駅から南西約３kmの高瀬川北岸の河岸段丘上に位置する。本遺跡の約1.2km西には，阿武隈高地の東縁を走る県道いわき・浪江線が南北に通り，約200m北には町道1063号線が東西に走っている。西側には大堀小学校が隣接する。

浪江町の西半は，阿武隈山地東縁部の山地によって占められる。北の請戸川と南の高瀬川に挟まれた，阿武隈高地東縁から続く東西方向にのびる段丘にある。本遺跡は高瀬川の沖積地の平坦面に位置し，標高約20mである。仲禅寺遺跡の南約600mには平成17年度に発掘調査を実施した乱塔前遺跡，北900mには平成18年度に発掘調査を実施した東畑遺跡，北1.3kmには平成19・20年度に発掘調査を実施し，大堀相馬焼の窯跡が確認できた後田Ａ遺跡が位置する。

調査前の現況は宅地や田畑であり，陶器窯跡の高まりが確認できる。　（三　浦）

第２節　調 査 経 過

仲禅寺遺跡は，平成15・16年度に実施された試掘調査で2,500㎡が保存面積となった。平成18年度には側道部390㎡を対象にして，浪江町教育委員会が発掘調査を実施している。

平成19年度

平成19年度の発掘調査は，当初福島県教育委員会から800㎡の指示面積があったが，指示範囲には条件整備未了箇所があるため，500㎡について調査に着手した。調査区は３カ所に分かれているため，調査区の名称を窯跡からみて北西側をⅠ区，北東側をⅡ区，南側をⅢ区とした。なお，Ⅲ区には電柱が撤去されずに残っていたので，その周囲は調査から除外した。

財団法人福島県文化振興事業団は福島県教育委員会からの委託を受けて，調査員２名を配置して発掘調査を開始した。４月９日には重機を用いてプレハブ・駐車場用地の造成の着手をした。その後，重機による表土剥ぎを開始し，あわせてプレハブ・トイレを設置し発掘器材を搬入した。同月17日には作業員登録・安全衛生講習を実施し，遺構検出作業に着手した。各調査区ともにＬⅡ・Ⅲの人力による掘り下げを行った。ＬⅢからは縄文時代後期中葉の遺物が出土した。Ⅲ区から陶器窯跡に伴う灰原を検出した。Ⅱ区からは縄文時代の土坑を検出した。各遺構は５月中旬には精査を終了した。遺構の調査終了後，縄文土器を包含するＬⅢの掘り下げに着手した。ＬⅢは深いところで80cmの層厚があり，人力による掘り下げに苦慮したが，５月下旬にはＬⅢの掘り下げが終了した。

同月30日に東日本高速道路株式会に500㎡について引渡した。調査日数は延べ25日である。

なお，残りの300㎡については連絡調整会議の協議により，平成20年度に調査を繰り延べた。平成20年３月11日には，調査できなかった電柱設置箇所については電柱移設後，福島県教育委員会が立会を実施している。（吉　野）

平成20年度

平成20年度の発掘調査は，橋脚の工法等の変更により，橋脚基礎部Ⅰ区の南西隅，Ⅲ区の西側の計100㎡が調査範囲となった。福島県教育委員会から４月７日に指示を受け，発掘器材の搬入，条件整備を行い，発掘調査は４月14日から実施した。15日には，工事側の協力で重機による表土剥ぎを実施した。Ⅰ・Ⅲ以下は人力で掘り下げ，窯道具や陶磁器類，縄文時代晩期の土器片が出土した。記録作成を行い４月22日に調査が終了し，現地引渡しを行った。（三　浦）

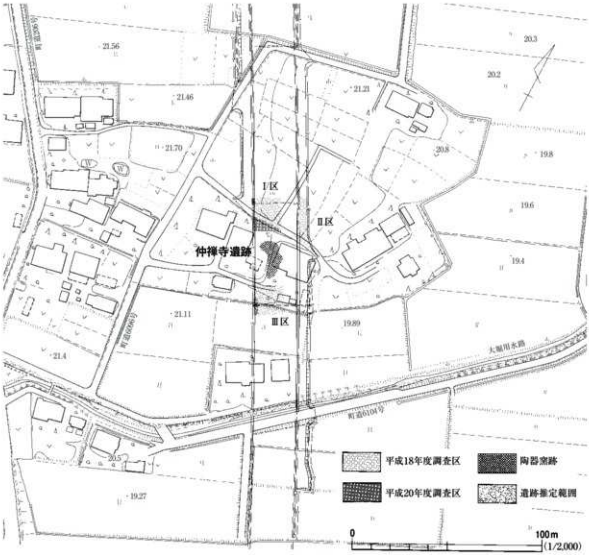


図１　調査区位置図

第３節　調査の方法

本調査では調査区の位置を国土座標の中で正確に記録するために，世界測地系を基本とした測量用基準点を用いて，５ｍ方眼のグリッドを設定した。グリッドの表記方法は，アルファベットと算用数字を組み合わせたもので，西から東にアルファベット順，北から南へ算用数字順に移行する。これらのグリッドは遺構の位置表示や遺物の取り上げに使用し，必要に応じてグリッド内に１ｍ方眼を設定して遺構の平面図を作成した。調査区の標高は東日本高速道路株式会社が設置した標高基準点を原点とした。

各種遺構の掘り込みは，表土を重機で除去し，それ以下の土層については，人力により堆積層ごとに掘り下げた。遺構の番号は，各遺構において通し番号を付与した。写真撮影および実測用に土層観察帯を設定して行った。出土遺物は各遺構，層位ごとに取り上げている。土坑については，原則として２分割法を用いた。

調査区内の土層については，基本土層はアルファベット大文字「Ｌ」とローマ数字を用いた。遺構内堆積土については，アルファベット小文字筆記体「ℓ」とアラビア数字を用いて表記した。遺構内から出土した遺物については，土層観察用帯で観察した遺構内堆積土を基準に取り上げた。遺構外出土遺物については，出土位置であるグリッドと出土層位を基準に取り上げた。土色に関しては，日本色研事業株式会社の新版標準土色帖に準拠した。

遺構の記録は縮尺10分の１および20分の１を基本とした。地形図は縮尺300分の１，遺物の実測は等倍で作図した。写真は35㎜判のモノクロームフィルム・カラーリバーサルフィルムの両方を用いて撮影した。また，編集・仮割付およびメモ写真として，デジタルカメラの撮影も行った。

出土した全ての遺物は水洗いし，出土地点・出土層位の注記を行っている。出土遺物と調査記録は，福島県文化財センター白河館にて保管する。　（三　浦）

第２章　遺構と遺物

第１節　遺跡の分布と基本土層

遺構の分布（図１・２）

仲禅寺遺跡で検出された遺構は陶器窯の灰原１基，土坑１基，小穴２個と遺物包含層である。遺跡は高瀬川の沖積地の平坦面に立地している。調査区はおおむね平坦であり，標高19.5m～20.0mである。１次調査ではⅠ～Ⅲ区の500㎡について調査を実施した。２次調査は，立木等があり１次調査において発掘調査が行えなかった100㎡について実施している。陶器窯はⅠ～Ⅲ区の中間に位置し，Ⅲ区の北側に灰原の一部を検出した。土坑はⅡ区の南端に認められた。小穴はⅠ区の北西寄りで検出した。試掘調査においてもⅠ区の北側より柱跡と考えられる小穴を検出している。

本遺跡から出土した遺物は，縄文土器，石器，陶磁器類，窯道具，鉄製品があり，１次調査では，縄文土器片340点，陶磁器片8,620点，窯道具635点，石器６点が出土した。２次調査では，縄文土器片26点，陶磁器片138点，窯道具51点，石器４点が出土した。縄文時代の遺物は後期・晩期の時期に該当する。陶磁器片は，近世・近代の大堀相馬焼が主である。

基本土層（図２，写真３）

仲禅寺遺跡は，調査前の現況は宅地や田畑であった。立地する地形は沖積地で平坦である。Ⅲ区ではＬⅠとＬⅡの間に灰原層が認められ，灰原層より上層が近・現代の層で，灰原層よりも下層が本遺跡において陶器窯操業以前の層位となる。

ＬⅠは表土および耕作土で，層中からは陶磁器片が多量に出土している。陶器窯や灰原の遺物が，造成により混入した層である。ＬⅡはにぶい黄褐色土で，Ⅲ区では灰原層の下位に認められた。ＬⅢはＬⅢａとＬⅢｂの２つに細分した。ＬⅢａは黒褐色土で，縄文時代の包含層である。ＬⅢｂは黒色土で，縄文時代の包含層であり，１号土坑の掘り込み面である。ＬⅣは褐色土で，本遺跡の基盤層で，無遺物層である。

第２節　陶器窯跡

仲禅寺遺跡では１基の陶器窯跡と１カ所の灰原を確認した。陶器窯跡に関しては未調査であるため言及できないが，Ⅲ区の北側に灰原の一部が検出でき，おおよその陶器窯跡の操業期間や製品なども推測できる。灰原の出土遺物の特徴から，近代に想定される遺物が多く，本陶器窯の操業年代は19世紀中～末にかけてと考えている。

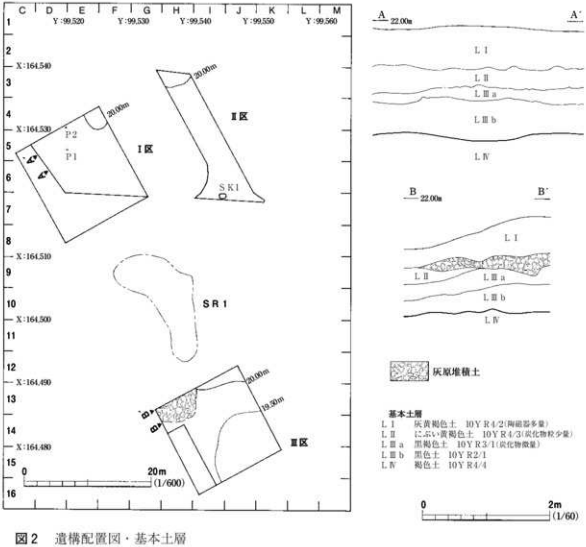


図２　遺構配置図・基本土層

１号陶器窯跡　ＳＲ１

遺　　構（図３，写真３）

本遺構は調査区のほぼ中央部Ｆ９・10，Ｇ９・10，Ｈ９～12，Ｉ10～12グリッドに位置する。未調査であるため詳細は不明である。遺存している陶器窯跡は，周囲よりわずかに高いものの，登窯の大部分は破壊されている可能性が高い。本遺構は南北を主軸に構築されていると想定でき，陶器窯跡の南に灰原があることから，焚口は南側と推定できる。

灰原はⅢ区北西端のＧ・Ｈ・Ｉ13，Ｈ・Ｉ14グリッドに位置する。ＬⅠ除去後に灰原が認められた。ＬⅡ・Ⅲａ上に形成されている。検出した灰原は南端部分の一部で，調査区外である北や西に広がる様相が確認できる。灰原の堆積土は，陶器片や黄褐色粘土が多量に混入する黒褐色土である。確認できた部分は，灰原の末端であり層厚も薄い。

遺　　物（図４～９，写真４～７・11）

出土遺物は陶器が主で，次いで窯道具，磁器片は数点のみが混入している状況である。出土点数

は，陶器5,312点，窯道具41点である。灰原という性格上，小破片が多く接合作業も困難であった。陶器の報告書掲載遺物の選択には，できるだけ器種・器形の大きさがわかる資料，図柄・印・文字等が認められている資料を中心に選び出した。窯道具に関しては，完形もしくは完形に近い資料，種々大きさがわかる資料，窯印の明瞭な資料を選出している。

出土陶器のほとんどが本灰原の北に位置する陶器窯跡にて焼成された遺物と推定される。灰原内出土遺物は，素焼き（１次焼成）の資料が多く，欠損品や窯変し歪んだ資料も看取できる。このため焼き損じ品などを主に投棄した遺構であることが分かる。また，本灰原出土の窯道具には様々な窯印が刻印された焼台が，多数認められた。

出土陶器の器種別の内訳は日用雑器としての食卓用品である碗・皿・鉢，調理・煮沸用品として土瓶・行平・土鍋・すり鉢・卸陶板・瓢徳利，神仏具として仏飯器・ミニチュア品，燈火具としてひょうそく・有脚受皿・灯明皿が認められた。数量は碗・小碗・鉢・行平・ひょうそく・有脚受皿が多く，食卓用品，調理・煮沸用品，燈火具を多く焼成していたことがわかる。胎土は緻密であり，非常に薄手の資料が多い。良質の粘土，陶工の卓越した技術がうかがえる資料である。釉薬は灰釉・鉄釉・飴釉・銅緑釉が多く用いられている。釉薬は器種により使い分けられており，碗・皿などは灰釉，土鍋・ひょうそく・有脚受皿・瓢徳利などは鉄釉・飴釉が多く施釉される。時期を明確にする資料として，砂鉄入りの粘土による手練り雅物や勿来手と呼ばれる鮫肌釉が施された資料，貫入の入った資料なども出土している。これらの製作技法は，創始年代が明らかであり，ここから灰原出土陶器類は，明治中期以降の所産であると考えられる。

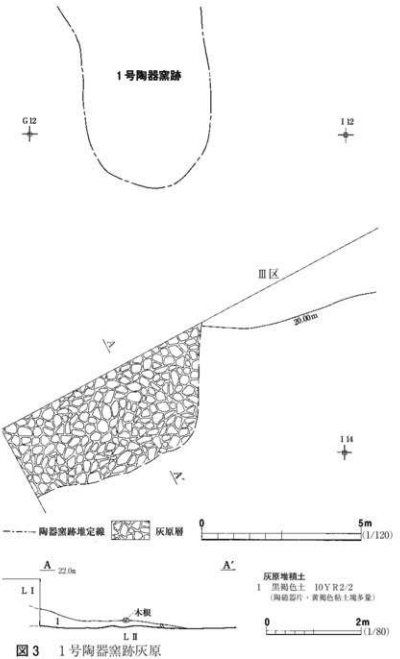


図３　１号陶器窯跡灰原

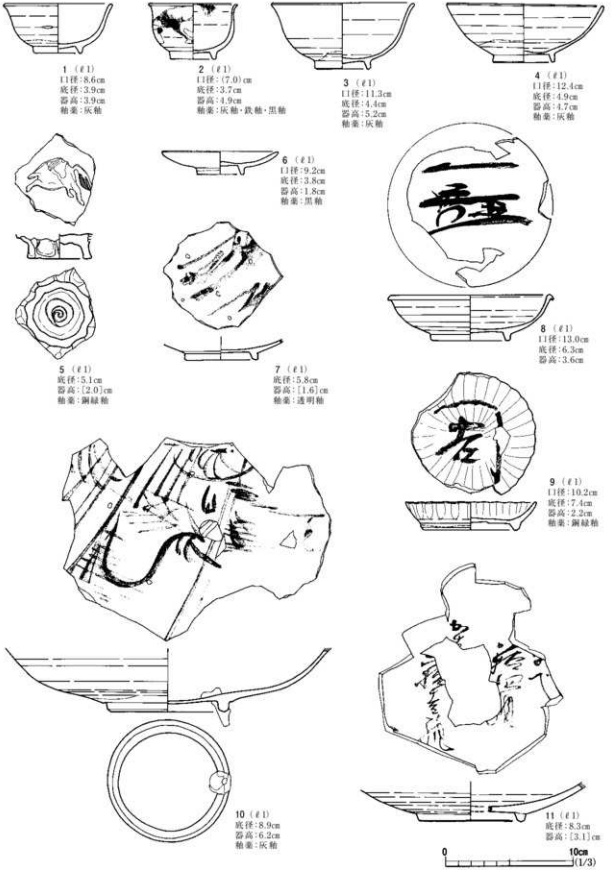


図４　１号陶器窯跡灰原出土遺物（１）

図4－1～5は碗である。1～3は端反碗である。1は灰釉地上に異なる発色の灰釉を施して，色彩の変化を表現している。2は灰釉地に鉄・黒釉を掛け流している。3は体部まで貫入の入った灰釉が施されている。4は平形の碗で，透明釉が施されている。内面と外面の一部には，釉が剥げている部分が認められる。見込内に重ね焼きをした痕跡である目跡が4カ所認められる。5は胎土に砂鉄を混入して焼成する手練り雅物といわれる資料である。見込には型抜きによる駒絵が貼付され，高台は釘彫高台である。

図4－6～11には皿を掲載した。6は手塩皿で黒釉が施され，光沢のある黒色の風合いを出している。7は小型の皿である。鉄釉により笹絵文が描かれ，透明釉が施されている。見込には4カ所の目跡が認められる。8は皿としたが，小鉢であろうか。未施釉で素焼きの資料である。口唇部が大きく外側に反れた器形である。波間に浮かぶ帆掛け舟を鉄絵で描いている。9は型押し成形の小皿である。呉須を用いて「吉」の字を筆書きし，貫入の入った銅緑釉を施している。高台は蛇の目高台である。10は鉄絵が描かれた大皿である。モチーフは竹絵であろうか。わずかであるが，焼き歪みが認められる。見込みには4カ所の目跡，1カ所はツメが付着したまま残ってしまっている。高台にもツメが1カ所残ったままである。上下に重ねられ，焼成された資料であることが分かる。釉薬は灰釉である。11は見込に墨書で文字が書かれた中型の皿である。未施釉である。体部は他の皿と比べると全体的に厚い。皿の中心が破損していて，文字は判読できなかった。

図5－1～3は小型の容器をまとめた。1は素焼きの小碗である。体部が直立し口唇部に至ってわずかに外反する器形である。口縁部の器壁は非常に薄い。2は灯明皿の器形で，芯立がない資料である。素焼きで，明瞭にロクロ目が残る。3は小型の甕型容器である。素焼きで，明瞭にロクロ目が残る。2・3は調味料の容器として製作されたものであろうか。4はひょうそくである。脚部の中程から上半に鉄釉を施している。5は仏飯器で，未施釉である。

図5－6～10は土瓶の蓋である。6の落とし蓋は，胎土に砂鉄を含み，雅物風に製作されている。7の摘みは，型抜きされた菊花文である。銅緑釉が施される。8は小型の蓋で，素焼きのままである。9は黄色の箔を含んだ銅緑釉が施されている。10は鮫肌釉土瓶の蓋である。

同図11は筒型容器状の脚台をもつ受皿である。外面中程から上半および内面すべてに飴釉が施されている。器壁は非常に薄い。12はすず徳利の頸部資料である。頸部と胴部を個々に作成した後，肩部で接合されている製作過程がわかる資料である。外面には透明釉，内面には鉄釉が部分的に掛け流されている。13は丸型の土瓶である。耳は型抜きで作られている。器壁は薄く，細身の注口をもつ精緻なつくりである。底部外面にはボタン状の貼り付けが3カ所確認できる。底部から体部下端にかけて煤が付着していることから，火にかけて使用していたと考えられる。灰釉地に鉄釉を掛け流している。14は口縁部から底部までが比較的浅い鍋である。底部から体部にかけて緩やかに立ち上がり，体部中程から口縁部にかけて内傾しながら立ち上がる器形である。器壁は非常に薄く，精緻につくられている。2カ所に手捏ねの耳が取り付く。体部上半の外面には器を巡るように，とびかんなが施される。意匠としてとびかんなの上端と下端には，帯状に鉄釉を施している。内面に

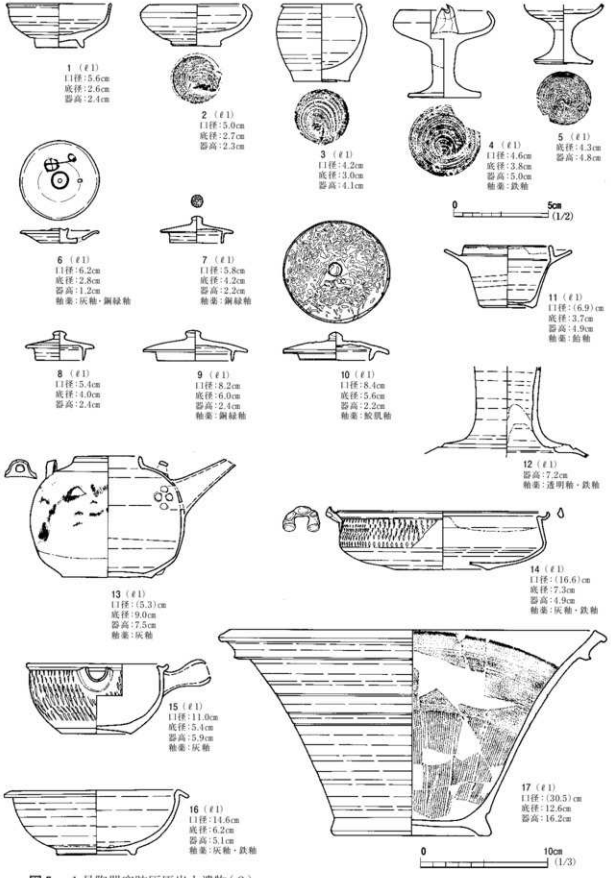


図５　１号陶器窯跡灰原出土遺物（２）

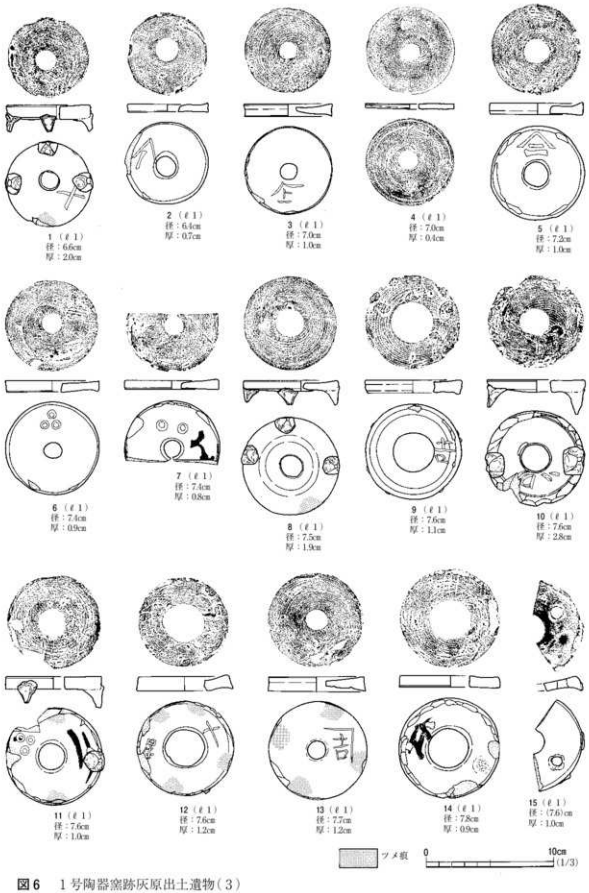


図6　1号陶器窯跡灰原出土遺物（3）

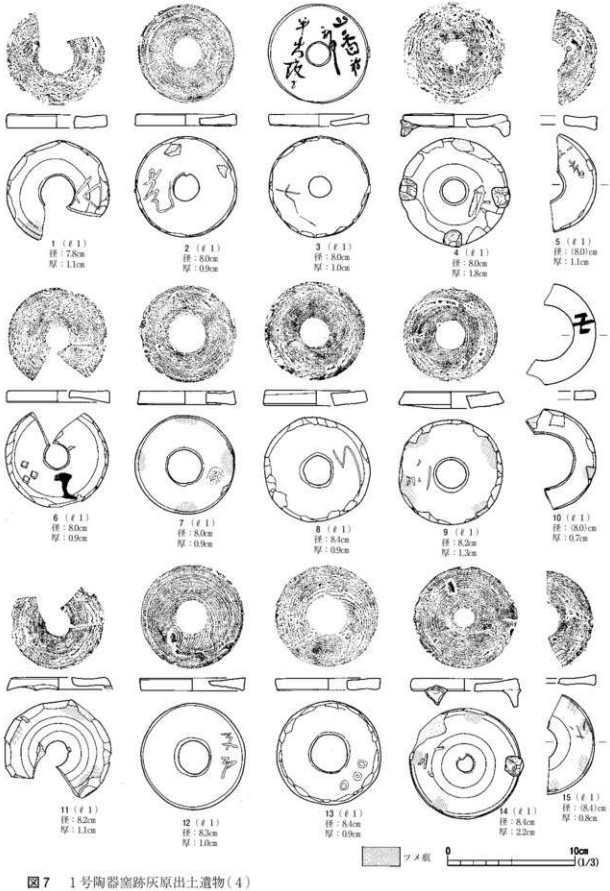


図７　１号陶器窯跡灰原出土遺物（４）

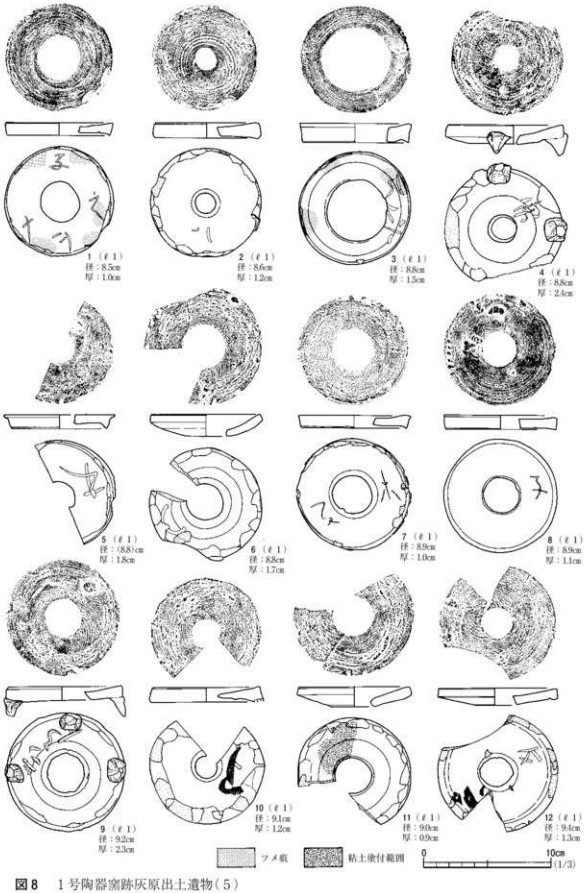


図8　1号陶器窯跡灰原出土遺物（5）

は灰釉が施されている。15は小型の行平である。体部外面にはとびかんなを施している。内面と外面の取手・注口には灰釉が施されている。体部外面には煤が付着していることから，火にかけて使用していたことが分かる。16は小型の鉢である。体部は丸みを帯びて立ち上がり，口唇部は大きく外側に反れる器形である。見込には目跡が３カ所認められる。外面は鉄釉，内面には灰釉が施される。17は小型のすり鉢である。本灰原ではすり鉢の出土は多くはない。薄い器壁である。14条単位以上の細かい条線が引かれている。未施釉である。

図６～９には窯道具を掲載した。出土した窯道具は，焼台・ツメが最も多く本窯跡では頻繁に利用されていた道具であることが分かる。次いでトチンが多い。大型のトチンは少なく，小型・中型のトチンが大半を占める。ハマは数点しか出土していない。

図６～８，９－１～５は焼台を掲載した。基本的には平らな円形で，中央に孔が空いた形である。すべてロクロを用いて作成している。焼台にはツメと呼ばれる小さな脚のようなものが付いている資料もあり，また，ツメが付いていたと考えられる痕跡も認められることから，焼台の下に４カ所のツメを付け使用していたことが推定できる。焼台にはペン先状の工具や釉薬により，屋号などの窯印が書き込まれている。基本的には窯印が書かれている面が下面として，使用されていたようであるが，下面にも高台の痕跡が認められる資料があることから，あまり上下の区別無く使用されていたようである。

図６－１・２は直径が７cm未満の焼台である。１はツメが３カ所付着したままである。「十」の字の刻印が認められる。２は厚みが非常に薄い焼台で，屋号が書かれている。３～８は７cm以上7.5cm以内の焼台である。４は厚みが４㎜と非常に薄く作られ，堅緻である。３・５は屋号が書かれた焼台，６・７は小さな竹に近い工具で刺突された焼台である。

図６－９～図７－１は7.6cm以上８cm未満の焼台である。９は「吉」の字を描く。本灰原では「吉」の字が書かれた陶器や窯道具が多く認められる。10は文字か印か不明である。11は３つの円形の刺突と鉄釉により「二」に近似する文字を書いている。12は「星十」と読める。14は判読できないが印を押している焼台である。15は穿孔している焼台である。図７－１は屋号であろうか，「ヤマ(カサ)」と「△」が組み合わされた記号である。

図７－２～15は８cm以上8.5cm未満の焼台を集めた。多くの焼台がこの大きさに含まれる。３は上面に墨書により文字が書かれた焼台である。「山番□□」，「半谷政□」と判読できる。６は角頭状の工具で，13は円形工具でともに３つの刺突痕がある焼台，７は押印が認められる焼台である。２・４・５・８・９・12・15は判読不明である。14は「六」の文字が書かれている。

図８－１～８は8.5cm以上９cm未満の焼台を集めた。１は「ネ・ノ・ナ・ヲ」と書かれているのであろうか。２は「八」，４は「常」，５は「木」，８は「子」であろうか。７は判読不明である。

図８－９～12，図９－１～５は９cm以上の焼台である。９は「六□」，10は鉄釉により文字または記号を書いている。11は下面に粘土が付着した焼台である。図９－１は直径11cmを超える。鉄釉により「○」が描かれている。３～５はヤマ(カサ)に「キ」・「ニ」・「十」が組み合わされた記号を

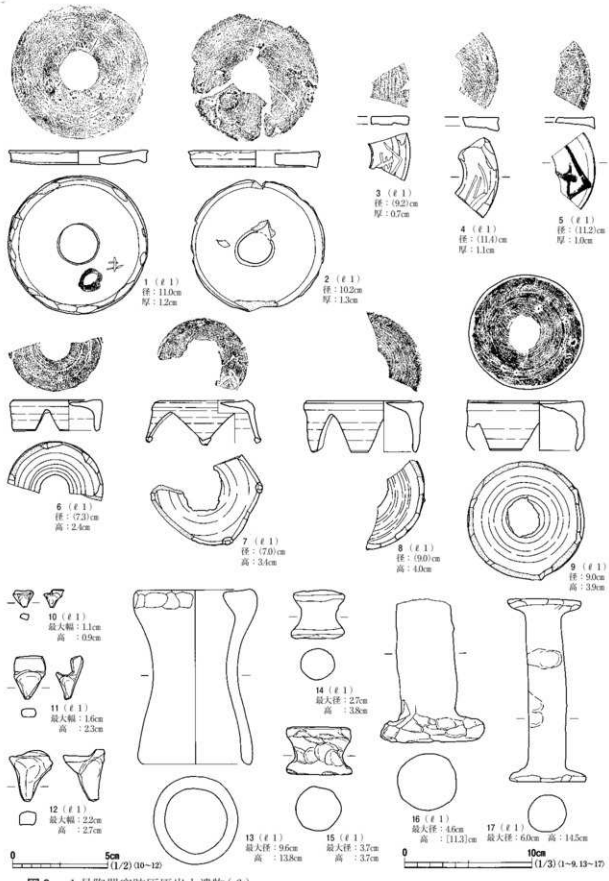


図９　１号陶器窯跡灰原出土遺物（６）

記している。

図９－６～９は脚付き焼台である。６・７が直径７㎝台，８・９が直径９㎝を測る。大きな三角の切れ込みを有する７と小さな切れ込みが施された６・８・９の２種がある。ロクロで成形した後，中央に孔をあけて焼成している。７の上面には屋号が印されているが，判読できない。

10～12はツメと呼ばれる焼台や高台に付けて焼成する，窯道具の一種である。最も小さいツメで10の0.9㎝，最も大きいツメで12の2.7㎝である。上面は焼台や高台に取り付けるために平らに作られ，下部に下がるにつれて逆三角錐状の形態になる。指紋の残っている資料もあり，指先で摘んで作られている。重ね焼き時に用いられる。

図９－13～17はトチンと呼ばれる窯道具である。トチンの多くは高温での焼成に耐えられるように白色粘土が塗付された資料もある。13は中が空洞になる中空トチン，14～17は通常のトチンである。13は中央部が括れる形である。手捏ねにより成形され，指頭圧痕が認められる。２㎜程度白色粘土を表面に塗付している。14が本遺跡出土の最も小さいトチンである。15は指頭圧痕が明確に認められる。16は２～３㎜程度の厚さに白色粘土が表面に塗付されている。

第３節　土坑・小穴

本調査区からは陶器窯の灰原の他に土坑と小穴が認められた。遺構数が少ないため，各遺構ごとに節立てせず，本節において述べることとする。土坑はⅡ区より，小穴はⅠ区より検出した。

１号土坑　ＳＫ１（図10，写真３）

本遺構はⅡ区のＪ・Ｋ７グリッドに位置する。ＬⅢｂ掘り下げ時に褐色土の落ち込みを確認した。本遺構の北壁上半は包含層の掘り下げ時に掘削してしまい遺存していない。掘り込みの確認面はＬⅢ面である。

平面形は円形を基調とする。遺存する開口部から推測すると，開口部の規模は150㎝を測る規模であったと考えられる。遺存規模は東西長129㎝，南北長120㎝である。検出面から底面までの深さは，81㎝を測る。底面はＬⅣ下の砂礫層を掘り込んでおおむね平坦に造られている。壁面は底面から丸みを帯びて立ち上がり，壁面中程では内側に向けてすぼまる。壁面中程から開口部にかけて大きく開く。断面形はフラスコ状の形態となる。

堆積土は５層確認した。いずれもレンズ状堆積や三角堆積が認められることから自然堆積と判断した。ℓ１～４は小石を含んだ砂質の層で，壁面崩落土および流入土である。ℓ５は灰黄褐色土で，壁面崩落土と判断した。炭化物を多量に含んだ褐色土１層のみである。均質な土質であることから，自然堆積の可能性が高い。遺物は出土しなかった。

本遺構は形態から，貯蔵穴の可能性が考えられる。出土遺物がなく時期の特定は困難であるが，周囲より縄文時代後期中葉の土器が出土していることから，縄文時代後期中葉の可能性が高い。

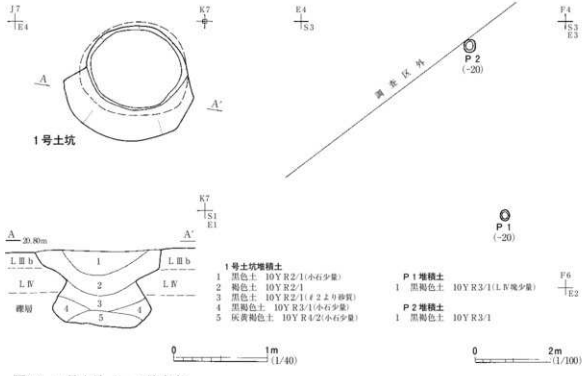


図10　１号土坑，１・２号小穴

１・２号小穴　Ｐ１・２（図10）

本遺構はⅠ区北西端に位置する。１号小穴はＦ５グリッド，２号小穴はＥ４グリッドに位置する。検出面はいずれもＬⅡ上面で，黒褐色土の円形として認識した。平面は円形で１号小穴は直径28cm，２号小穴は直径35cmである。検出面から底面までの深さは，１・２号小穴ともに20cmを測る。底面は平坦に造られ，周壁は急な角度で立ち上がる。堆積土はいずれも黒褐色土１層である。遺物は出土しなかった。

小穴は２個のみの確認であったが，平成15年度に実施した試掘調査においてⅠ区の北側に設定したトレンチより，４個の小穴を検出している。柱間の距離が一定であることから，掘立柱建物跡の可能性が高いとの所見が得られている。今回の調査により検出した小穴も建物跡を構成する柱跡である可能性も考えられる。検出面がＬⅡ上面であることから，近世～近代の時期に相当すると考えられる。

第４節　遺構外出土遺物

本遺跡の遺構外からは，縄文土器片，陶磁器類，窯道具が出土している。縄文土器片366点，陶磁器片3,446点，窯道具274点，石器４点，鉄製品１点である。遺構外からも多くの陶磁器類が出土したが，耕作や宅地整備により撹乱されている現況であった。１号陶器窯跡の時期よりも，新しい時期の陶磁器類も混入しているようである。

陶　　器（図11・12，写真９）

図11，12－１～４に陶器を掲載した。図11－１～４は碗である。１は小型の広東碗である。外面に透明釉，内面に糠白釉が施されている。２は小碗である。鉛釉と鉄釉の掛け分けが内外面に半分ずつ施されている。見込には墨書で「木□」と書かれている。３は灰釉が施された小碗である。見込には鉄釉により疾走する２頭の駒絵が描かれている。体部外面下端には「相馬」と読むことができる印が押されている。４は内外面ともに灰釉が施された中型の碗である。見込には焼台の痕跡がリング状に認められる。

図11－５～８は皿を掲載した。５は素焼きの手塩皿である。口唇部にわずかに欠けた箇所が認められるのみの完形品である。焼成状況も良く，焼き歪みもない。６は灰釉が施された小皿である。見込には鉄釉による駒絵が描かれている。７は中型の皿である。内面にはロクロ目が明瞭に残る。内面には灰釉，外面には貫入が入った銅緑釉が施されている。高台内には本遺跡内の窯道具に見られた屋号と同じ窯印が墨書にて書かれている。８は素焼きの大皿である。見込中央から放射状に墨書で，文章が書かれているようであるが，口縁部が欠損しているため，全文は不明である。一部「小ノ田」の文字が読み取れる。

図11－９～13は土瓶の蓋である。９～11は落とし蓋である。９は素焼き，10は灰釉地にコバルトで蝶を描いている。11は糠白釉地に鉄釉・銅緑釉による山水のモチーフを施している。おそらく色絵山水文土瓶の蓋であろう。12は蓋の下にトチンが付着し，焼成の状況が分かる資料である。銅緑釉が施されている。13は貫入の入った銅緑釉が施されている。摘みは撚り紐をモチーフとし，凝った作りである。

図11－14～18は小型容器を集めた。14は小型甕型容器と蓋が付着した状況で出土している。空気孔が認められる。甕型容器は体部上半に鉛釉が施されている。蓋の重みによるものだろうか，口縁部に若干の歪みが見受けられる。15は完形品の小型瓢徳利である。頸部から下には鮫肌釉，上には黒釉が施された優品である。16・17は括れ部から上部が欠損しているが，小型の瓢徳利であろう。16は素焼きのまま，17は鉛釉が施されている。18は小型の油壺とした。体部には鮫肌釉が施されているが，状態が悪く廃棄された資料であろう。

図12－１は，すず徳利の頸部である。頸部と胴部の接合状況がよくわかる資料である。外面には黒釉が施されている。２は筒型容器状の脚台をもつ受皿である。外面中程から上半および内面すべてに鉛釉が施されているが，発色が悪く部分的には釉が消えてしまっている。３はひょうそくである。脚部上半から上には鉛釉が施されている。芯立には煤が付着し，火を灯して使用していた痕跡が認められる。４は卸陶板である。卸部分は鋸歯状のきざみが設けられ，鉄釉が施されている。裏面は未施釉で布目痕が認められる。５は欠損した砥石である。表裏・側面と擦痕や条線が認められ，よく使用された痕跡がうかがえる。

窯 道 具（図12，写真８・11）

図12－６～14は窯道具を掲載した。６～９は焼台で，いずれも窯印が描かれている。10～14はト

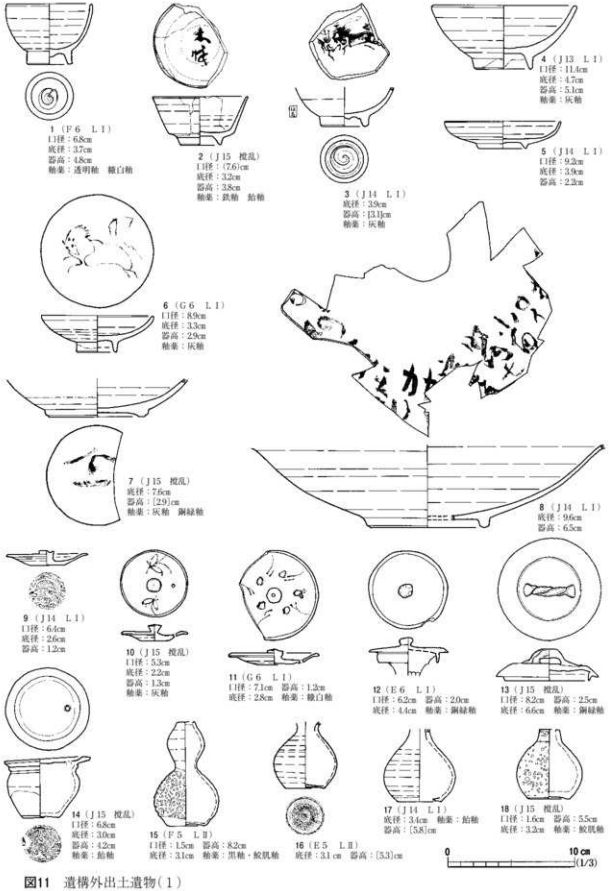


図11　遺構外出土遺物（1）

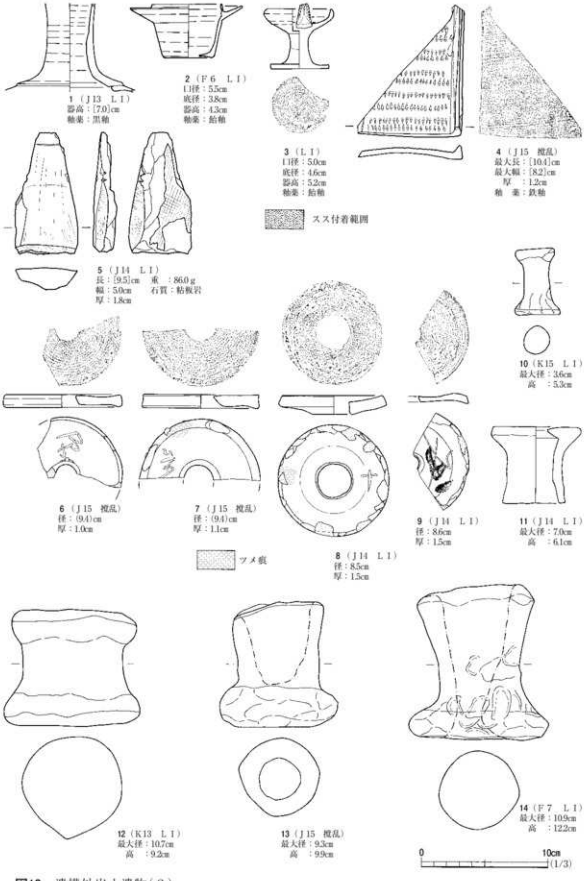


図12　遺構外出土遺物（２）

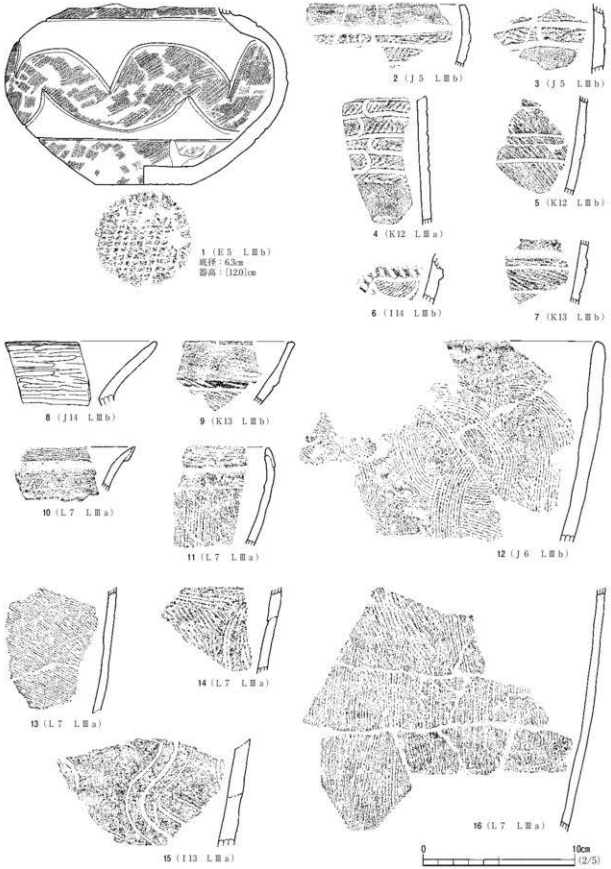


図13　遺構外出土遺物(3)

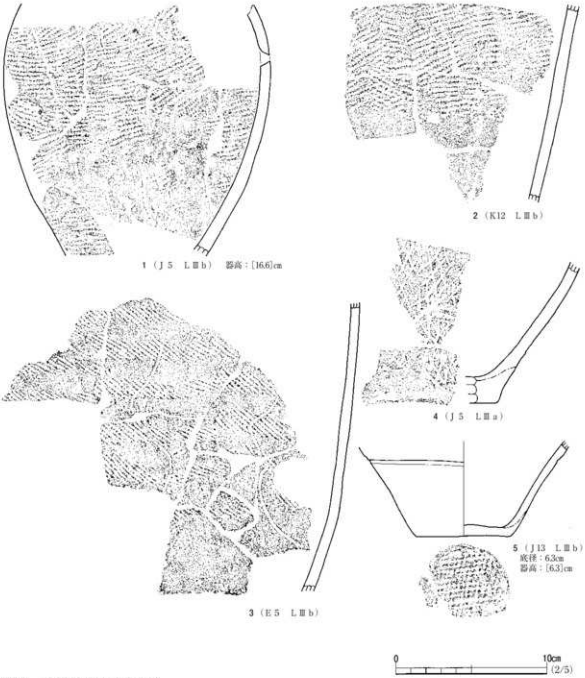


図14　遺構外出土遺物（４）

チンである。10は小型のトチンで，高さが5.3cmである。11は中空トチンである。13は上が大きく開口するトチンである。大型のトチンである12～14には白色粘土の塗付が認められる。

縄文土器（図13・14，写真３・10）

図13・14には縄文土器を掲載した。１・２次調査合わせて366点出土した。図13－１～７は沈線文を主要文様とする資料である。１は口縁部が欠損した壺型土器である。底部から内湾して立ち上がり，胴部は横長の球形となる。文様は胴部中央に沈線で帯状に連なる入組文を描き，沈線間に縄文が施文されている。底部と頸部の境に沈線を設け，入組文との間の縄文を磨り消している。底部に

は網代痕が認められる。２は口縁部資料である。横位の沈線間に縄文が施文されている。３・４は横位の沈線を蛇行する沈線によって連絡する土器である。５・７は細かな条線地文上に沈線を描く資料である。２・３，５・７は胎土や色調からそれぞれ同一個体と考えられる。６は区画された沈線間に刺突を施す資料である。８・９は浅鉢の口縁部資料である。内外面ともに良く磨かれている。９は口縁部と胴部を分かつ，屈曲部を有する。

図13－10～16，図14－１～３は主に地文のみの土器を集めた。10～12は口縁部資料である。10・11は折り返し口縁である。15は地文上に蛇行する沈線が描かれている。図14－１・２は縄文のみが施文された土器である。１は胴部上半部に焼成後に穿孔された孔が認められる。３は縄文施文帯と無文帯が交互に認められる資料である。磨り消し手法によって，無文部が形成されている。４・５は底部資料を掲載した。４は胴部に網目状撚糸文が施されている。５は胴部下半に１条の横位沈線が巡る。（三　浦）

表１　１号陶器窯跡灰原出土陶器一覧

図	No.	分類		釉薬観察		製作・焼成観察			残存率	その他
		種類	器形	施釉	特徴	窯道具痕	成形	胎土		
4	1	陶器	碗	内外：灰	発色の異なる２種の掛け分け		ロクロ	灰白色	95%	
4	2	陶器	碗	内：灰 外：鉄・黒	貫入が入る鉄釉褐釉　鉄釉・黒釉は流し		ロクロ	灰青色	60%	
4	3	陶器	碗	内外：灰	細かい貫入		ロクロ	灰白色	85%	
4	4	陶器	碗	内外：灰	外面は体部上半のみ施釉内面は釉が消しとんでいる	見込に４カ所の目跡	ロクロ	灰白色	70%	
4	5	陶器	碗	内外：鉄緑	貫入	高台に４カ所の目跡	手練り	灰白色砂鉄混入	40%	釘彫高台 型押胴
4	6	陶器	皿	内外：黒			ロクロ	灰白色	90%	
4	7	陶器	皿	内外：灰	鉄釉による掛縁	見込に４カ所の目跡	ロクロ	灰白色	30%	見込にヒビ
4	8	陶器	皿	素焼き	鉄釉による山水文		ロクロ	灰白色	70%	
4	9	陶器	皿	内外：鉄緑	呉須で屋号		型押	灰白色	70%	蛇目高台
4	10	陶器	皿	内外：灰	鉄釉による竹絵？	見込に４カ所の目跡 高台に１カ所	ロクロ	灰白色	40%	
4	11	陶器	皿	素焼き			ロクロ	灰白色	30%	見込に墨書
5	1	陶器	小碗	素焼き			ロクロ	灰白色	75%	
5	2	陶器	小型鉢型容器	素焼き			ロクロ	灰白色	100%	
5	3	陶器	小型壺型容器	素焼き			ロクロ	灰白色	98%	
5	4	陶器	ひょうそく	内外：鉄			ロクロ	灰褐色	95%	
5	5	陶器	仏飯器	素焼き			ロクロ	灰白色	80%	
5	6	陶器	壺	外：灰・鋼緑	鉄釉による蕨綾		ロクロ	灰褐色砂鉄混入	100%	空気孔
5	7	陶器	壺	外：鋼緑			ロクロ	灰褐色	100%	摘み型押
5	8	陶器	壺	素焼き			ロクロ	灰白色	100%	
5	9	陶器	壺	外：鋼緑			ロクロ	灰褐色	100%	摘み型押
5	10	陶器	壺	外：鮫肌		４カ所のツメの痕跡	ロクロ	灰褐色	100%	
5	11	陶器	有脚付受皿	内外：飴			ロクロ	灰褐色	70%	
5	12	陶器	すず徳利	内：飴 外：透明			ロクロ	灰褐色	20%	
5	13	陶器	土瓶	内外：灰	発色の異なる３種の掛け分けと鉄釉の掛け流し		ロクロ	灰褐色	30%	底部に煤付着
5	14	陶器	鍋	内外：灰	外面に鉄釉の２本の帯状施釉		ロクロ	灰褐色	40%	とびかんな
5	15	陶器	行平	内外：灰			ロクロ	灰褐色	50%	とびかんな
5	16	陶器	鉢	内：灰 外：鉄		見込に３カ所の目跡	ロクロ	灰褐色	95%	
5	17	陶器	すり鉢	素焼き			ロクロ	灰白色	40%	

表２　遺構外出土陶器一覧

図	No.	分類		釉薬観察		製作・焼成観察			残存率	その他
		種類	器形	施釉	特徴	窯道具痕	成形	胎土		
11	1	陶器	碗	内：鉄白 外：透明				灰白色	70%	
11	2	陶器	碗	内：鉄 外：鉄・飴			ロクロ	灰白色	60%	見込に墨書
11	3	陶器	碗	内外：灰			ロクロ	灰褐色	40%	見込に胸絵
11	4	陶器	碗	内外：灰		見込に輪状の痕	ロクロ	灰褐色	80%	
11	5	陶器	皿	素焼き			ロクロ	灰褐色	100%	
11	6	陶器	皿	内外：灰			ロクロ	灰褐色	100%	見込に胸絵
11	7	陶器	皿	内：灰 外：鋼緑			ロクロ	灰褐色	40%	見込に屋号？
11	8	陶器	皿	素焼き			ロクロ	灰白色	40%	見込に墨書
11	9	陶器	壺	素焼き			ロクロ	灰白色	100%	摘み型押
11	10	陶器	壺	外：灰	呉須で蝶		ロクロ	灰褐色	100%	空気孔
11	11	陶器	壺	外：雛白	鋼緑釉や鉄釉で施文		ロクロ	灰白色	80%	空気孔
11	12	陶器	壺	外：鋼緑		トチンが付着	ロクロ	灰白色	100%	摘み型押
11	13	陶器	壺	外：鋼緑	貫入		ロクロ	灰白色	100%	紐状摘み
11	14	陶器	壺	外：飴			ロクロ	灰褐色	100%	小皿または壺が付着
11	15	陶器	瓢徳利	外：黒・鮫肌			ロクロ	灰白色	100%	
11	16	陶器	瓢徳利	素焼き			ロクロ	灰白色	95%	
11	17	陶器	瓢徳利	外：飴			ロクロ	灰白色	90%	
11	18	陶器	油壺	素焼き	鮫肌釉が施釉		ロクロ	灰白色	100%	
12	1	陶器	すず徳利	外：黒			ロクロ	灰白色	20%	
12	2	陶器	有脚付受皿	内外：飴	発色不良		ロクロ	灰白色	75%	
12	3	陶器	ひょうそく	内外：飴			ロクロ	灰白色	95%	芯立に煤付着
12	4	陶器	卸陶板	鉄			ロクロ	灰褐色	40%	装画に布目痕

第3章　ま　と　め

遺構について

仲禅寺遺跡では陶器窯跡1基，土坑1基，小穴2個が確認できた。陶器窯跡は灰原の出土遺物から近代の大堀相馬焼の窯跡と判断できる。土坑は形態や周囲からの出土遺物より，縄文時代後期中葉の貯蔵穴である可能性が考えられる。小穴はⅬⅡ面より掘り込まれていることから近世～近代の遺構であることが推測できる。試掘調査において調査区外にも小穴が確認できたことから，建物跡として構成される小穴である可能性が高い。陶器窯跡に関連する作業小屋的な建物跡であったと考えられる。

仲禅寺と言う地名であるが，この地区には仲禅寺という寺は存在していない。『奥相誌』の仲禅寺縁起によると「大同2(807)年に寺沢に移す」とある。また，仲禅寺鐘銘には，「竜燈山仲禅寺は大同年間の創建で，昔は伽藍僧坊が並び建った寺院であった。同慶寺四代天巌禅師を第一祖として禅寺となる」とあり，また「延暦中に仲禅寺を営建，徳一大師開基の寺」との伝えもあり，開祖・創建年代が不明である。伽藍僧坊が存在したとの記述があることから，調査区近辺には寺院の痕跡が存在する可能性があり，創建年代が明らかとなる資料が出土する可能性がある。なお仲禅寺は，昭和23(1948)年に檀家の希望により高瀬地区へ移され，現在に至っている。

遺物について

仲禅寺遺跡1・2次調査を通じて出土した遺物は，陶磁器8,758点，窯道具686点，縄文土器片366点，石器片4点，鉄製品1点である。内7割は1号陶器窯跡灰原出土遺物が占める。

灰原から出土した遺物に関しては，灰原層が1層のみであり陶器窯尻や灰原全景が確認できていない現状では一括資料として認識している。少なくても陶器窯跡の1時期が反映された資料である。

陶器類　出土陶器の器種は食卓用品である碗・小碗・皿・鉢・徳利類が最も多く，灰釉を施した資料が大半である。皿には見込に鉄釉により笹文や竹文を描く資料が見受けられる。中には呉須により文様が描かれている資料も確認できる。高台の径から推測すると，大型の資料は少なく，中型や小型の器種が多い。碗では見込に駒絵が描かれた資料も散見できる。胎土に砂鉄を混入した手捏ねの碗も見られるが，銅緑釉が施される資料と灰釉が施される資料がある。徳利はほとんどがすず徳利である。体部にはとびかんなを施し，飴釉や黒釉が施釉される。しかし，個体数としてはあまり多くは無い。食卓用品では碗・皿の頻度が高い。

次に多い遺物は調理・煮沸用品としては，土瓶の注口や蓋から概算すると，土瓶の個体数が圧倒的に多い。銅緑釉が施されたいわゆる青土瓶が最も多い。次に鉄釉が施された土瓶と勿来手と言われる鮫肌釉の土瓶が続く。土瓶の形は丸型の土瓶が多い。青土瓶や鉄釉土瓶は型抜きの耳が認められるが，勿来手の土瓶はすべて粘土紐によるリング状の耳である。注口の孔は3～6個空いていて，

5・6個空いている注口が多い。行平・土鍋などは個体数として少ない。特にすり鉢の遺物数が少なく，出土するすり鉢も高台の大きさから推測して，比較的小型であったことが考えられる。

神仏具・燈火具は1次焼成段階の遺物が多く見受けられる。仏飯器は灰釉や透明釉が施釉されるようである。脚部は段を有しない資料が大半であるが，脚部が若干長く，脚部の中ほどに段を持つ資料もある。ひょうそくや灯明皿の多くは飴釉が施される。個体数はかなり多い。

窯道具 本遺跡では焼台・ツメ・トチン・ハマが認められた。中でも焼台とツメの出土量がかなり多い。焼台には窯印が書かれている資料が多数認められ，図6～9・12に図示した。人物名と推測できる文字，屋号，押印が印されている。径8～9cmの焼台が多く，この範囲内に収まる高台をもつ資料を多く焼成していたことが類推できる。焼台の利用法であるが，中央に孔がある点，ツメを用いて焼台を窯の底面から離して使用する点などは，高台内にまで窯室内の火熱を取り込む趣旨があったと推測できる。

トチンは5cm以内の小型のトチンが最も多く，10cm前後の中型のトチンが次いで多い。大型の中空トチンや大型ハマはわずかである。ハマは大型のハマしか出土していない。

トチンには大型小型を問わず白色粘土が塗付されている。この白色粘土は平成18・20年度に大堀相馬焼の陶器窯跡を調査した浪江町田尻地区の後田A遺跡において，耐火度測定を実施している。後田A遺跡では，窯壁に塗付された白色粘土について分析を実施している。この結果，窯壁本体の耐火度は1,400℃，白色粘土塗布層は1,620℃との結果が得られ，非常に優れた耐火材料が使用されていたことが分かった。実見したが，見た目には類似する粘土のように思えた。

上記でも述べたが，すり鉢は少ないため，すり鉢を焼成する時に使用するダンゴは認められなかった。焼台・ツメが多い点，中型・小型の陶器製品が多い点は，本陶器窯ではあまり大きい資料は焼成していなかったことが推測される。

1号陶器窯灰原の形成時期と窯元

本陶器窯跡の灰原出土遺物には，1868(明治元)年に小野田村の天野董重により創始されたと言われる胎土に砂鉄を混入して製作する手練り雅物と呼ばれる碗や，1873(明治5)年に井出村の松永政太により創始された鮫肌釉が施された土瓶や瓢徳利が出土することから，本陶器窯の灰原の形成時期は1873(明治5)年以降と考えている。

明治時代に入ると廃藩が行われ，藩の援助も中止され，廃業者が続出したとの記載が認められる。江戸時代末期には120戸の窯家が存在する東北随一の窯業地帯であったが，明治元年には42戸まで激減した。窯家の数は明治20年で62戸，大正4年で50戸，大正末期で30戸と推移している。時代とともに1916(大正5)年頃から登窯が廃止され，1926(昭和元)年頃には全ての窯家では，棚窯に移行している。上記のことから考慮すると，本陶器窯跡の灰原の形成時期は明治時代中頃から大正末頃と推定できる。明治期の地籍図・丈量帳は遺存せず，陶器窯跡が位置する土地の当時の所有者は不明である。多くの窯印を有する陶器窯跡であることから，周囲の家々の共同窯であった可能性も提起しておきたい。 (三 浦)

引用・参考文献

福島県　1966 『福島県史12　近代資料２』
相馬市史編纂会　1969 『相馬市史４　資料編１（奥相誌）』
高橋良一郎　1977 「相馬のやきもの」『福島文庫40』福島中央テレビ
浪江町史編集委員会　1979 『浪江町史』
飯村　均　1987 「福島県新地町十二所Ａ遺跡の近世陶磁器」『福島考古　第28号』福島県考古学会
東北陶磁文化館　1987 『東北の近世陶磁』
大堀相馬焼創業三百年記念誌　1988　大堀相馬焼協同組合
福島県文化センター編　1989 『国営請戸川農業水利事業遺跡調査報告　中平遺跡』福島県教育委員会
浪江町教育委員会　1989 『大堀長井屋窯跡』
東北大学埋蔵文化財調査委員会　1993 『東北大学埋蔵文化財調査年報６』
東北大学埋蔵文化財調査委員会　1994 『東北大学埋蔵文化財調査年報７』
汐留地区遺跡調査会　1996 『汐留遺跡』
東北大学埋蔵文化財調査委員会　1998 『東北大学埋蔵文化財調査年報９』
関根達人　1998 『東北大学埋蔵文化財調査年報10』東北大学埋蔵文化財調査研究センター
（財）福島市振興公社　1998 『岸窯跡』
野馬追の里原町市立博物館　1999 『相馬のやきもの－収蔵資料を中心として－』
東京都埋蔵文化財センター　2000 『汐留遺跡Ⅱ』
（財）郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団　2002 『後藤焼窯－第１・２次調査報告－』
東京都埋蔵文化財センター　2003 『汐留遺跡Ⅲ』
東京都埋蔵文化財センター　2006 『汐留遺跡Ⅳ』
（財）福島県文化振興事業団編　2009 『常磐自動車道遺跡調査報告54　後田Ａ遺跡』

第２編　朴迫（ほおのきさく）Ａ遺跡

遺跡記号　ＮＥ－ＨＳ・Ａ
所在地　浪江町大字室原字朴迫
時代・種類　縄文時代－集落跡
調査期間　平成20年９月２日～９月26日
調査員　三浦武司

第１章　周辺地形と調査経過

第１節　遺跡の位置と周辺地形

朴迫Ａ遺跡は，浜通り地方中央部の双葉郡浪江町大字室原字朴迫に所在する。北緯37°29′45″，東経140°56′40″に位置する。海岸線から約９km，ＪＲ常磐線浪江駅から西約３kmの段丘上に位置する。本遺跡の約250m西には阿武隈高地の東縁を走る県道いわき・浪江線が南北に通り，約500m北には一般国道114号が東西に走っている。

浪江町の西半は，阿武隈山地東縁部の山地によって占められる。本遺跡は北の請戸川と南の高瀬川に挟まれた，阿武隈高地東縁から続く東西方向にのびる段丘にある。本調査区は段丘の平坦面に位置し，標高約60mである。

朴迫Ａ遺跡の北約100mには平成18年度に発掘調査を実施した朴迫Ｂ遺跡，北250mには平成19年度に発掘調査を実施した朴迫Ｄ遺跡が位置する。さらに南300mには平成18年度に発掘調査を実施した朴迫Ｃ遺跡が位置する。朴迫Ｂ遺跡では，本遺跡出土遺物と同時期の縄文時代早期末葉から前期初頭の土器片が出土している。

本遺跡の調査開始前は畑であり，調査区北側は杉の人工林であった。周囲には田畑が見られ，宅地が点在している。

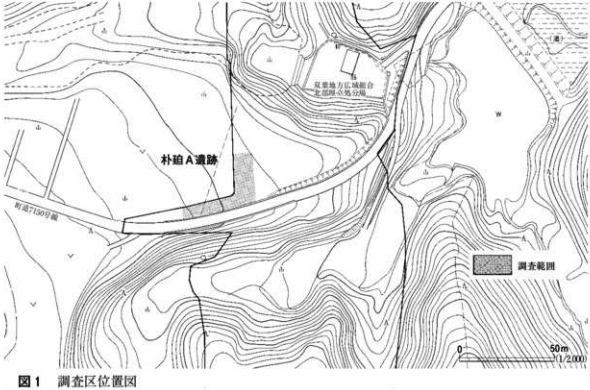


図１　調査区位置図

第２節　調査経過

朴迫Ａ遺跡は平成８年度に実施された常磐自動車道の建設予定地を対象とした表面調査によって確認された。平成15年には常磐自動車道建設予定地内の2,000㎡を対象に試掘調査を実施した。その結果，保存の必要はなしと判断された。平成20年６月には新たに追加買収となった760㎡について試掘調査が実施され，400㎡が保存を要する面積であるとされた。以下調査の概要を記す。

本発掘調査は福島県教育委員会より平成20年８月28日付けの指示により，財団法人福島県文化振興事業団が実施した。９月１日より調査員１名を配置して，重機による表土掘削作業，駐車場用地の整備，仮設トイレの設置，発掘器材の搬入を行った。同２日より，作業員を投入しての発掘作業を実施した。廃土処理の関係から，調査区西側より遺構検出作業を開始した。

調査１週目は，遺構検出作業を中心に作業を進めた。調査区西側より縄文時代早期と想定される円形のぼんやりした平面形をもつ土坑が点在するのを確認した。また，試掘調査において１基の土坑を確認した調査区北側において，試掘調査時に検出した土坑と重複する土坑を確認した。調査区南には焼土遺構が散在して分布する状況が確認でき，周囲より縄文土器が出土する状況が認められた。竪穴住居跡が存在する可能性を考慮し，調査を進めた。

調査２週目には，土坑の掘り込みおよび焼土遺構の精査を開始した。遺構の記録と併行して，遺構配置図・地形図等を作成した。全ての記録作業を終了した後，遺構の再確認と旧石器時代の調査を兼ねて，調査区内にトレンチを設定し掘り下げを行った。検出面以下の層には文化面がないことを確認し，遺跡全景写真を撮影した。

同月19日には遺跡の調査は終了し，補足調査および発掘器材の撤収を行った。同月26日には賃借物を撤去し，30日に東日本高速道路株式会社に遺跡の引渡しを行った。

第３節　調査の方法

本遺跡では調査区の位置を国土座標の中で正確に記録するために，世界測地系を基本とした測量用基準点を調査区内に２カ所打設した。基準杭の座標値を用いて，10m方眼のグリッドを調査区全域に設定した。グリッドの表記方法はアルファベットと算用数字を組み合わせたもので，西から東にアルファベット順，北から南へ算用数字順に移行する。これらのグリッドは遺構位置表示や遺物の取り上げに使用し，必要に応じてグリッド内に１ｍ方眼を設定して遺構の平面図を作成した。調査区の標高は東日本高速道路株式会社が設置した標高基準点を原点とした。

各種遺構の掘り込みは，表土を重機で除去し，それ以下の土層については人力により堆積層ごとに掘り下げた。遺構の番号は，各遺構において通し番号を付与した。写真撮影および実測用に土層観察帯を設定して行った。遺存状況の悪い遺構については，適宜，土層観察用のサブトレンチを設

定して把握に努めた。土坑については，原則として２分割法を用いた。

調査区内の土層については，基本土層はアルファベット大文字「Ｌ」とローマ数字を用いた。遺構内堆積土については，アルファベット小文字筆記体「ℓ」とアラビア数字を用いて表記した。遺構内から出土した遺物については，土層観察用帯で観察した遺構内堆積土を基準に取り上げた。遺構外出土遺物については，出土位置であるグリッドと出土層位を基準に取り上げた。土色に関しては，日本色研事業株式会社の新版標準土色帖に準拠した。

遺構の記録は縮尺10分の１および20分の１を基本として作図した。地形図は縮尺200分の１，遺物の実測は等倍で作図した。写真は35㎜判のモノクローム・カラーリバーサルフィルムの両方を用いて撮影した。また，編集・仮割付およびメモ写真として，デジタルカメラの撮影も行った。

出土した全ての遺物は水洗いし，出土地点・出土層位の注記を行っている。出土遺物と調査記録は，福島県文化財センター白河館にて保管する。　（三　浦）

第２章　遺構と遺物

第１節　遺跡の分布と基本土層

遺構の分布（図1・２）

朴迫Ａ遺跡で検出された遺構は土坑６基，焼土遺構６基と遺物包含層である。遺跡は樹枝状に開折された丘陵の上に位置し，本調査区は丘陵の東端に立地している。調査区はおおむね平坦であり，標高59.0m～60.4mである。土坑は調査区の北端と南西端に偏って認められた。北端で検出した１・６号土坑は重複している。南西端で検出した２～５号土坑は，狭小な区域に重複せずに掘り込まれていた。焼土遺構は，調査区の中央に散在して位置し，周囲からは縄文土器片が比較的集中して出土した。

出土遺物は縄文土器片641点，石器２点である。すべて縄文時代の遺物であり，縄文時代早期末葉から前期初頭の時期が主体となる。縄文時代中期中葉の土器もわずかに出土している。

基本土層（図２）

朴迫Ａ遺跡は，調査区全域おいて耕作による地形改変が大きい。調査区の大部分では，ＬⅠ直下にはＬⅣが認められる。調査区中央から北側ではＬⅣ漸移層の褐色土であるＬⅢが厚く認められる。

ＬⅠは耕作土で，層中からは摩滅した土器片がわずかに混入するのみである。

ＬⅡは暗褐色土で，調査区南西端の一部にのみ存在する。町道7150号線と調査区との境に認められる層厚10cm程度の薄層である。残存する層がわずかであるため，遺物が混入する層であるかは判断できない。

ＬⅢは本調査における遺構検出面である。ＬⅣの漸移層と考えられ，縄文土器片を包含する層である。粘性のある褐色土である。調査区全域に認められる。

ＬⅣは粘性のある黄褐色土で，本遺跡の基盤層である。無遺物層である。

第２節　土　　坑

朴迫Ａ遺跡では６基の土坑を確認した。出土遺物は少ないが，遺跡内出土遺物や堆積土の状況から１～５号土坑の５基が縄文時代早期末葉頃に機能していた土坑であると考えている。６号土坑は出土遺物から縄文時代中期中葉頃の土坑である。

１号土坑　ＳＫ１（図３，写真３）

本遺構は調査区北端のＤ１グリッドに位置する。試掘調査時に認められ，すでに堆積土の半分は掘り込まれている状況であった。検出面はＬⅢ上面で，ぼんやりとした褐色土の円形として認識し

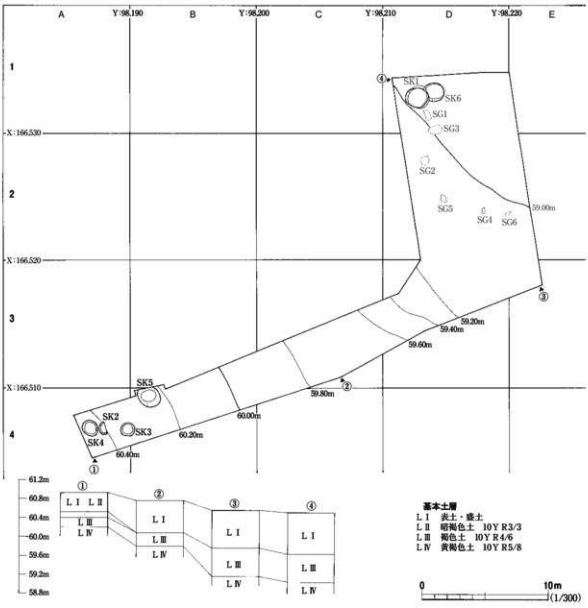


図２　遺構配置図・基本土層

た。６号土坑と重複している。本遺構が古いが，調査時には新旧関係を違えて，本遺構を先に掘り込んでしまった。

平面形は不整な楕円形である。規模は長軸182cm，短軸159cmである。検出面から底面までの深さは，78cmを測る。底面はおおむね平坦に造られており，壁面にかけて丸みを帯びる。周壁はオーバーハングして立ち上がり，検出面に向かって大きく広がる。

堆積土は５層に分層した。三角堆積，レンズ状堆積が認められることから自然堆積と判断した。ℓ１は褐色土で，微量の炭化物が混入する。ℓ２・３は炭化物を含んだ暗褐色土で，遺構の周囲から中央部に向かって堆積している状況を示している。ℓ４は黄褐色土で，壁面崩落土および流入土である。ℓ５は暗褐色土で底面の壁際に認められる層である。本遺構から胎土に繊維混和痕が認められる縄文土器片４点出土したが，小破片のため図示できなかった。

本遺構は出土土器片と形態・規模から，縄文時代早期末葉頃の貯蔵穴と考えられる。

２号土坑　ＳＫ２（図３・６，写真３）

本遺構は調査区南西端のＡ４グリッドに位置する。検出面はＬⅢ上面で，ぼんやりとした褐色土の円形として認識した。すぐ西に４号土坑，１ｍ東に３号土坑が位置する。半截時には壁面と底面を掘りすぎてしまい，遺構の半分を壊してしまっている。

遺存する平面形から，円形を基調としていたと推測できる。遺存規模は長軸94cm，短軸51cmである。検出面から底面までの深さは，37cmを測る。底面は凹凸がみられ，周壁は急な角度で立ち上がる。堆積土は炭化物を多量に含んだ褐色土１層のみである。均質な土質であり，粒径が小さいことから，自然堆積と考えている。

遺物はℓ１から縄文土器片１点が出土した。図６－１は深鉢型土器の胴部破片である。外面は斜縄文が施され，胎土には繊維混和痕が認められる。

本遺構は規模や形態から，貯蔵穴の可能性が考えられる。時期は出土遺物や堆積土の特徴より，縄文時代早期末葉頃である。

３号土坑　ＳＫ３（図３，写真３）

本遺構は調査区南西端のＡ・Ｂ４グリッドに位置する。検出面はＬⅢ上面で，ぼんやりとした暗褐色土の円形として認識した。１ｍ西に２号土坑，北東に５号土坑が位置する。

規模は直径110cmである。検出面から底面までの深さは，27cmを測る。底面は平坦に造られ，周壁は急な角度で立ち上がる。

堆積土は２層確認した。ℓ１は炭化物を多量に含んだ暗褐色土で，流入土である。ℓ２は黄褐色土で，壁面崩落土および流入土である。いずれの層も自然堆積と判断した。遺物は出土しなかった。

本遺構は形態や規模から，貯蔵穴であると考えられる。時期は明確にはできないが，堆積土の土質や土色から縄文時代早期末葉頃と考えられる。

４号土坑　ＳＫ４（図３，写真３）

本遺構は調査区南西端のＡ４グリッドに位置する。検出面はＬⅢ上面で，ぼんやりとした暗褐色土の楕円形として認識した。すぐ東に２号土坑が位置する。

規模は長軸135cm，短軸105cmである。検出面から底面までの深さは，29cmを測る。底面は平坦に造られている。東壁は垂直に近い角度で立ち上がる。西壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は暗褐色土１層のみ確認した。遺物は出土しなかった。

本遺構は形態・規模から，貯蔵穴であると考えられる。２・３号土坑と規模や形態，堆積土の土色や土質が類似することから，時期は縄文時代早期末葉頃と考えられる。

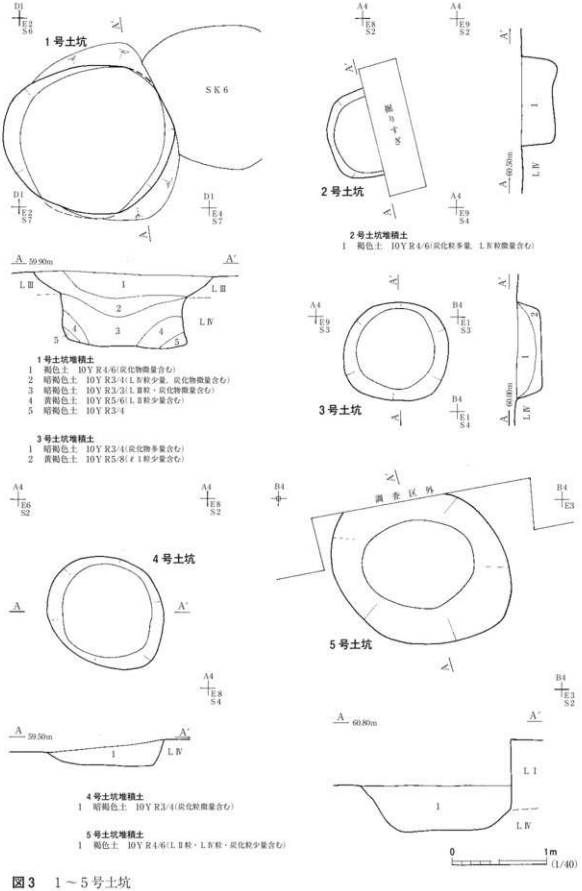

1号土坑
SK6
2号土坑
3号土坑
4号土坑
5号土坑
調査区外
1号土坑堆積土
1　褐色土　10YR4/6(炭化物微量含む)
2　暗褐色土　10YR3/4(LⅣ粒少量、炭化物微量含む)
3　暗褐色土　10YR3/3(LⅡ粒・炭化物微量含む)
4　黄褐色土　10YR5/6(LⅡ粒少量含む)
5　暗褐色土　10YR3/4
2号土坑堆積土
1　褐色土　10YR4/6(炭化粒多量、LⅣ粒微量含む)
3号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4(炭化物多量含む)
2　黄褐色土　10YR5/8(LⅠ粒少量含む)
4号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4(炭化粒微量含む)
5号土坑堆積土
1　褐色土　10YR4/6(LⅡ粒・LⅣ粒・炭化粒少量含む)
0　1m
(1/40)

図３　１～５号土坑

５号土坑　ＳＫ５（図３・６，写真４・５）

本遺構は調査区南西端のＢ４グリッドに位置する。検出面はＬⅢ上面で，ぼんやりとした褐色土の楕円形として認識した。検出時において遺構の平面形が，調査区の北側にのびることから，調査区北壁を用地際まで拡張して掘り下げを開始した。南西２ｍに３号土坑が位置する。

平面形は楕円形で，確認できた規模は長軸202cm，短軸170cmである。検出面から底面までの深さは，45cmを測る。底面はわずかに凹凸が認められる。底面形は楕円形で，規模は長軸117cm，短軸97cmを測る。壁面は約45°の角度で立ち上がる。堆積土は褐色土１層のみ確認した。

本遺構から縄文土器片７点出土し，そのうち３点を図示した。図６－２は，深鉢型土器の口縁部資料である。器表面が荒れて，文様等は不鮮明である。外面には炭化物が付着している。３は，深鉢型土器の胴部資料である。内外面には条痕が確認できる。４は，深鉢型土器の胴部資料である。外面には縄文が施文される。いずれの資料も胎土中には，繊維混和痕が認められる。

本遺構は出土土器片や形態・規模から，縄文時代早期末葉頃の貯蔵穴であると考えられる。

６号土坑　ＳＫ６（図４・６，写真４・５）

本遺構は調査区北端のＤ１グリッドに位置する。１号土坑を掘り下げ時に黒褐色土の堆積土を確認し，本遺構の存在を認識した。すでに掘り下げてしまっているが，１号土坑と重複しており，新旧関係は本遺構のほうが新しい。検出面はＬⅢ上面である。

平面形は不整な楕円形である。規模は長軸162cm，短軸152cmである。検出面から底面までの深さは，58cmを測る。底面は中央がわずかに窪み，丸みを帯びている。壁面はオーバーハングして立ち上がる。

堆積土は４層に分層した。三角堆積，レンズ状堆積が認められることから自然堆積と判断した。ℓ１は暗褐色土で，微量の炭化物が混入する。ℓ２は炭化物を多量に含んだ黒褐色土で，遺物が混入している層である。ℓ３は壁面に認められる褐色土で，壁面崩落土および流入土である。ℓ４は黄褐色土で，壁面崩落土である。

本遺構ℓ２から36点の縄文土器が出土した。図６－５～９までの５点を図示した。５・７は，深鉢型土器の胴部資料である。外面には縄文が施文され，内面には擦痕や条痕が確認できる。胎土中には繊維混和痕が認められる。６は，円筒形状の深鉢型土器である。口縁部から胴部中程まで残る資料である。推定口径32cmを測る。口縁部には突起が付き，口唇部には，波状の粘土紐を貼付している。口縁部直下の狭い文様帯内には，上下２段の刺突文が施される。胴部には地文に縄文が施され，横位を基本に沈線文が施文されるが，一部は渦巻文を描出している。８は，鉢型土器の口縁部資料である。外反しながら立ち上がり，口唇部で内湾する器形となる。口縁部直下には幅１cm程の隆帯を巡らす。９は，深鉢型土器の胴部資料である。口縁部文様帯と胴部文様帯を区画する屈曲部には，指頭による刺突が確認できる。

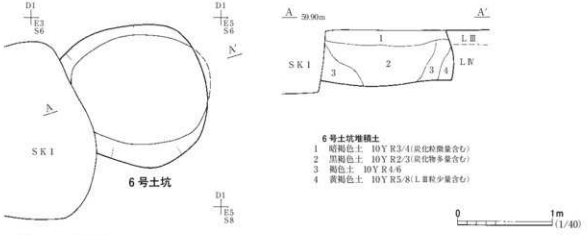


図４　６号土坑

本遺構は１号土坑と重複し，本遺構が新しい。規模や形態から，貯蔵穴と考えられる。時期は，出土遺物から縄文時代中期中葉と判断した。

第３節　焼土遺構

調査区の中央から散在して６基の焼土遺構を確認した。小穴など住居跡内に付随した関連遺構が認められないことから，屋外炉と判断できる焼土化範囲を焼土遺構としてまとめた。

１号焼土遺構　ＳＧ１（図５，写真４）

本遺構は調査区北端のＤ１グリッドに位置する。ＬⅢ上面で検出した。試掘調査時のトレンチによって壊されているが，遺存する形から平面形は円形を基調としていたと推測できる。すぐ北に１・６号土坑，南には３号焼土遺構が位置する。遺存規模は長径90cm，短径45cmを測る。焼土の厚さは12cmで，全体的に弱い赤褐色である。

本遺構の明確な時期は不明であるが，検出層位から縄文時代の屋外炉であると考えている。

２号焼土遺構　ＳＧ２（図５，写真４）

本遺構は調査区北端のＤ２グリッドに位置する。ＬⅢ上面で検出した。２ｍ北に３号焼土遺構，３ｍ南に５号焼土遺構が位置する。平面形は不整な方形である。規模は長軸68cm，短軸63cmを測る。焼土の厚さは最大で８cmで，全体的に弱い赤褐色である。

本遺構の明確な時期は不明であるが，検出層位から縄文時代の屋外炉であると考えている。

３号焼土遺構　ＳＧ３（図５）

本遺構は調査区北端のＤ１・２グリッドに位置する。ＬⅢ上面で検出した。すぐ北には１号焼土遺構，２ｍ南には２号焼土遺構が位置する。平面形は不整な楕円形である。規模は長軸110cm，短

軸68cmを測る。焼土の厚さは最大で10cmで，全体的に弱い赤褐色である。

本遺構の明確な時期は不明であるが，検出層位から縄文時代の屋外炉であると考えている。

４号焼土遺構　ＳＧ４（図５）

本遺構は調査区中央のＤ２グリッドに位置する。Ｌ Ⅲ上面で検出した。1.5m東に６号焼土遺構，2.5m北西に５号焼土遺構が位置する。平面形は不整な楕円形を基調とする。規模は長軸55cm，短軸28cmを測る。焼土の厚さは最大で４cmで，全体的に弱い赤褐色である。

本遺構の明確な時期は不明であるが，検出層位から縄文時代の屋外炉であると考えている。

５号焼土遺構　ＳＧ５（図５，写真４）

本遺構は調査区中央のＤ２グリッドに位置する。Ｌ Ⅲ上面で検出した。2.5m東に４号焼土遺構，３m北に２号焼土遺構が位置する。平面形は不整な方形を基調とする。規模は長軸65cm，短軸54cmを測る。焼土の厚さは最大で４cmで，全体的に弱い赤褐色である。

本遺構の明確な時期は不明であるが，検出層位から縄文時代の屋外炉であると考えている。

６号焼土遺構　ＳＧ６（図５・６，写真４・５）

本遺構は調査区北端のＤ・Ｅ２グリッドに位置する。Ｌ Ⅲ上面で検出した。1.5m西に４号焼土遺構が位置する。平面形は不整な楕円形である。規模は長軸52cm，短軸27cmを測る。焼土の厚さは

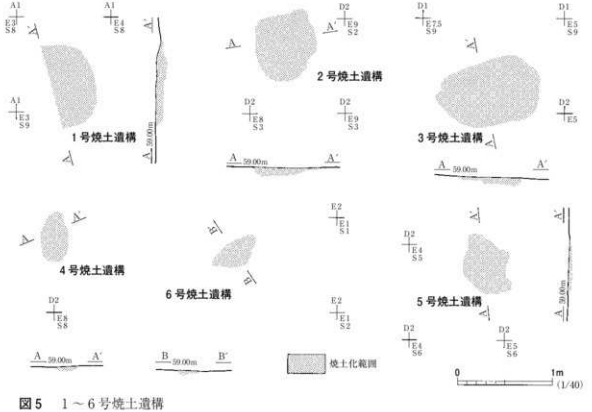


図５　１～６号焼土遺構

最大で５㎝で，全体的に弱い赤褐色である。

焼土化範囲の断ち割り時に数点の遺物が出土した。焼土化範囲またはその下層からの出土であり，本遺構に直接伴うものではないが，本遺構の時期を言及する資料として掲示する。

断ち割り時に出土した遺物は，図６－10～13である。いずれも縄文土器片で，器形は深鉢型土器である。胎土には繊維混和痕が認められる。10は直立する口縁部資料で，口唇部が丸みを帯びる。12・13は胴部資料である。10・12・13は外面に縄文を施文し，内面には条痕または擦痕を施文する。11は内外面ともに条痕を有する胴部資料である。

本遺構は屋外炉である。焼土化範囲の下層から縄文時代早期末葉頃の土器片が出土することから，本遺構が形成された時期は，縄文時代早期末葉以降であろうと考えられる。また，１～５号焼土遺構についても，検出層位が同じであることや焼土化範囲の厚さなどから，同様の時期と考えられる。

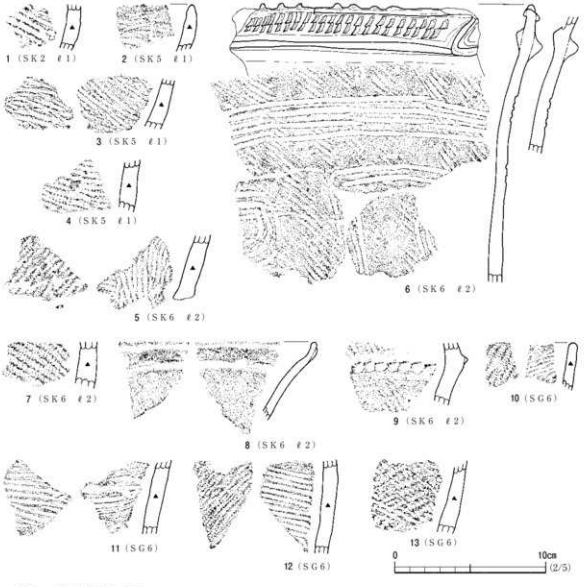


図６　遺構内出土遺物

第4節　遺構外出土遺物

本調査区からは，縄文土器片678点，石器2点が出土している。D2・3，C3グリッドの出土量が多いのが特徴的である。遺物はLⅢからの出土が大部分を占めている。

縄文土器（図7・8，写真6）

本遺跡からの出土遺物は縄文時代早期中葉の沈線文系土器群，早期後葉の条痕文系土器群，中期中葉の土器が出土している。

図7－1～6は早期中葉の沈線文系土器群の破片資料である。胎土は精緻で薄く硬い。平行沈線や波状する沈線が主文様となる。いずれも胴部破片である。1は縄圧痕が認められる資料である。2・3は横位の波状沈線を描く。沈線下位に刺突が認められる。4・5は貝殻文を刺突する資料である。4は縦位に貝殻で刺突し，下位に施文した平行沈線内に円形刺突を施している。5は縦位の貝殻刺突の下に，斜位の平行沈線を施文している。

図7－7～10は，早期中葉の常世式期の深鉢の胴部資料である。7・8は深鉢の口縁部資料である。7は平行沈線により斜位に直線を描いている。口唇部は平坦に作られている。8は条痕地文上に半截竹管により，連続刺突を施している。地文に条痕を施し，9は2段の縄圧痕，10は沈線を用いて格子状に描出している。8・9の胎土には繊維混和痕が認められる。

図7－11～17は，表裏条痕文系土器である。すべての資料に繊維混和痕が認められる。外反する深鉢になると推定できる。11・13～17は深鉢の口縁部，12・18は胴部資料である。11は口唇部が山形に成形され，内外面に刻みが施される。12は口縁部に近いと考えられる胴部資料である。外面に連続刺突が認められる。

図7－19～22は，条痕地文上に半截竹管による平行沈線により文様を描出する土器である。胎土には繊維混和痕が認められる。19・21は口縁部資料である。口縁部が外傾する深鉢である。口唇部から垂下する沈線や斜位に引かれた沈線により文様を描出している。20・22は口縁部に近い資料である。22の裏面には，縦位に施文された縄文が看取できる。23・24は口縁部文様帯と胴部文様帯との境の資料である。23は口縁部文様帯に条痕文，胴部文様帯には斜縄文が施文される。24は口縁部文様帯と胴部文様帯との境を半截竹管により分断している。

図7－25～36，図8－1～13は表縄文，裏条痕文・擦痕文土器である。本遺跡出土の大部分土器片は，本種の土器である。胎土には繊維混和痕が認められる。図7－25～28は口縁部資料である。口縁部が直立に近く立ち上がる深鉢である。図8－12は屈曲する胴部資料で，斜位の縄文を組み合わせて羽状に施文している。縄文時代前期に含まれる土器である。図8－14・15は底部資料である。平底で，底部にも縄文が認められる。

図8－16・17は縄文時代中期中葉に属する土器片である。16は口縁部が直立する浅鉢と考えられる。屈曲して立ち上がる口縁部には，角頭状の工具による刻みが施される。体部はよく磨かれてい

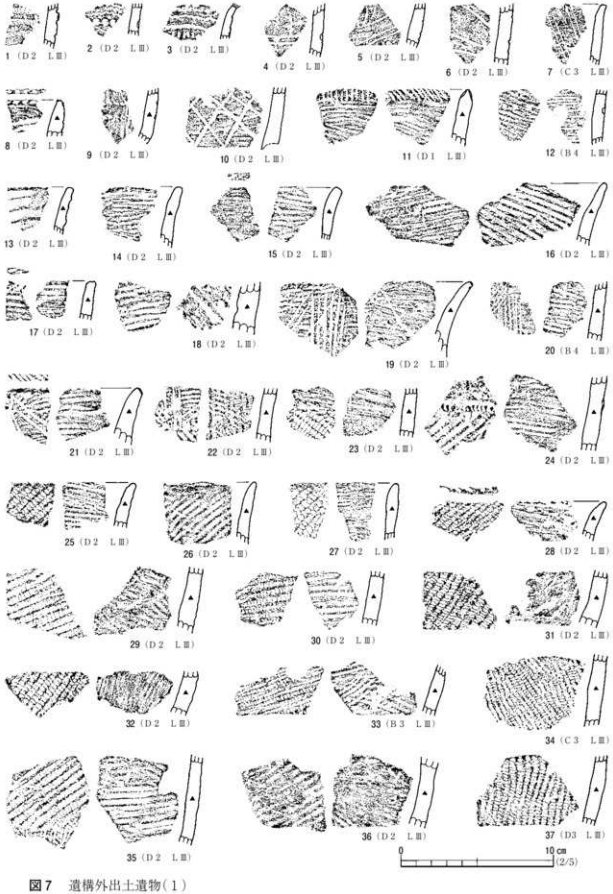

1（D2 LⅢ）
2（D2 LⅢ）
3（D2 LⅢ）
4（D2 LⅢ）
5（D2 LⅢ）
6（D2 LⅢ）
7（C3 LⅢ）
8（D2 LⅢ）
9（D2 LⅢ）
10（D2 LⅢ）
11（D1 LⅢ）
12（B4 LⅢ）
13（D2 LⅢ）
14（D2 LⅢ）
15（D2 LⅢ）
16（D2 LⅢ）
17（D2 LⅢ）
18（D2 LⅢ）
19（D2 LⅢ）
20（B4 LⅢ）
21（D2 LⅢ）
22（D2 LⅢ）
23（D2 LⅢ）
24（D2 LⅢ）
25（D2 LⅢ）
26（D2 LⅢ）
27（D2 LⅢ）
28（D2 LⅢ）
29（D2 LⅢ）
30（D2 LⅢ）
31（D2 LⅢ）
32（D2 LⅢ）
33（B3 LⅢ）
34（C3 LⅢ）
35（D2 LⅢ）
36（D2 LⅢ）
37（D3 LⅢ）
0
10cm
(2/5)

図7　遺構外出土遺物（1）

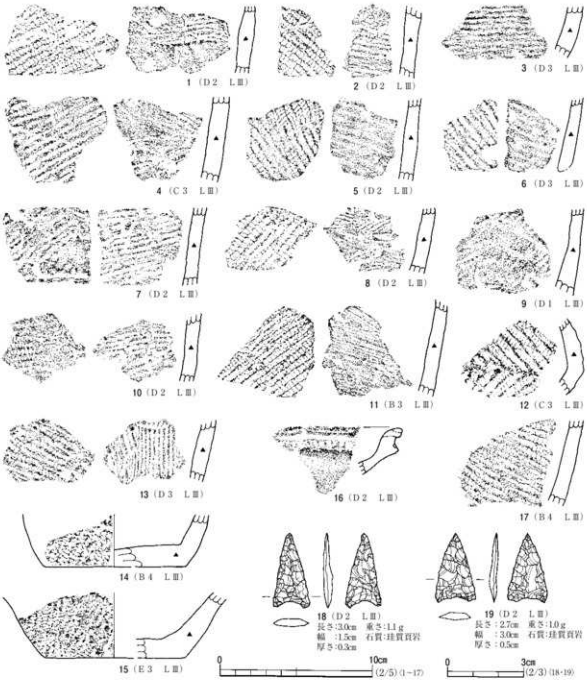


図8　遺構外出土遺物（2）

る。17は縄文が施文された深鉢の胴部下半の資料である。

石　器（図8）

図8－18・19は石鏃である。形状は基本的に側縁が二等辺三角形になる。無茎凹基鏃である。18は基部および側縁に細かい調整剥離を施している。19は基部に細かい剥離を施している。石質はいずれも珪質頁岩を用いて作られている。　（三　浦）

第3章　ま　と　め

今回の調査では朴迫A遺跡の南東端の一部にあたる400㎡の調査を行い，縄文時代早期末葉・中期中葉の遺跡であることが確認された。遺構は土坑6基，焼土遺構6基と遺物包含層が検出された。遺物は縄文土器，石器が出土した。遺跡は縄文時代早期末葉が主体となる。

縄文時代早期末葉の遺構・遺物

遺構は1～5号土坑の5基が当該期に属する。また，1～6号焼土遺構もおそらく本時期に含まれると考えられる。表裏条痕文土器，縄文条痕文土器といずれも文様が施文される資料が少ない。表裏条痕文土器では口唇部内外面に刻みを入れる図7－11や胴部に角頭状の工具により刺突される図7－12がある。図7－19～22は半截竹管による2本同時施文によって文様を描くことから，北前式に比定できる資料である。近接する朴迫B遺跡や朴迫D遺跡から少量であるが当該期の土器が出土している。明確な住居跡はなく，土坑がわずかに認められるのみである。本遺跡で認められた土坑の多くは貯蔵穴と考えられ，小型の土坑（2～4号土坑）や大型の土坑（1・5号土坑）がある。本調査において住居跡は確認できなかったが，焼土遺構は6基検出した。屋外炉として使用され，集落を営んでいたと考えられる。本遺跡は西に広がるため，住居跡が存在する可能性も否定できない。

縄文時代中期中葉の遺構・遺物

遺構は6号土坑が当該期に属する。堆積土中から大木8a式期の土器が出土している。また，包含層中からも中期中葉頃の土器片がわずかながら出土することから，縄文時代中期中葉にも小規模ながら生活の痕跡が認められる。深鉢のみならず浅鉢となる可能性が認められる土器片も出土していることから，西に広がる遺跡内に当時期の遺構が認められる可能性が考えられる。

縄文時代の土坑について

土坑の分布は調査区の南西端と北端に偏在する。南西端に位置する2～5号土坑は，半径4mの狭小な範囲内に重複することなく造られている。土坑の平面形はわずかに歪むものの，円形を基調としている。断面形は逆台形状に近い。平面規模は140cm以下である。堆積土は1層（2・4・5号土坑）または2層（3号土坑）である。検出面から底面まで浅い土坑（2～4号土坑）は27～37cmを測る。検出面から底面まで深い土坑（5号土坑）は45cmを測る。性格は規模や形状から判断して，いずれも貯蔵穴と考えている。

北端に重複して認められた1・6号土坑は2～5号土坑に比べて規模が大きく，短軸でも150cmを超える。平面形は円形を基調とするが，断面形は袋状のいわゆるフラスコ状土坑に近い形状である。検出面から底面までは50cmを測る。堆積土は多層であることなど，規模や形は2～5号土坑とは異なる。しかし，性格は規模や形状から判断して，貯蔵穴であると考えている。　（三　浦）

第３編　原（はら）Ｂ遺跡（２次調査）

遺跡記号　ＮＥ－Ｈ・Ｂ
所在地　浪江町大字室原字原
時代・種類　縄文時代－集落
調査期間　平成20年５月26日～６月６日
調査員　山岸英夫・中野幸大

第１章　周辺地形と調査経過

第１節　遺跡の位置と周辺地形

原Ｂ遺跡は，双葉郡浪江町大字室原字原に所在し，北緯37°30′12″，東経140°56′35″に位置する。原Ｂ遺跡は，海岸線から11km，ＪＲ浪江駅から西北西に約５kmに位置する。請戸川南岸の低位面とされる段丘面上に位置し，遺跡の標高は38mである。

浪江町の西半部は，阿武隈山地東縁部の山地によって占められる。原Ｂ遺跡から約１km西側には，標高100mの等高線に沿うように双葉断層が南北に縦走し，山地と河岸段丘地帯との境界をなす。

第２節　調査経過

原Ｂ遺跡は，平成８年に実施された，常磐自動車道の建設予定地を対象とする表面調査により確認された遺跡である。遺跡の範囲は，段丘北側縁辺部を中心に42,700㎡と提示された。平成17年11月には，常磐自動車道建設用地内の2,900㎡を対象とした試掘調査が実施され，1,100㎡が保存を要する面積とされた。平成18年５月からは，１次調査としてⅠ期線分の工事範囲とされた調査対象の900㎡の発掘調査を行った。

２次調査となる平成20年度の調査は，Ⅱ期線の工事範囲とされた200㎡を対象として実施した。５月26日より表土剥ぎを開始した。試掘調査の結果や平成18年度に行った１次調査において，表土直下から遺物が出土する知見が得られていたため，調査区北側に関しては盛土の除去のみとした。

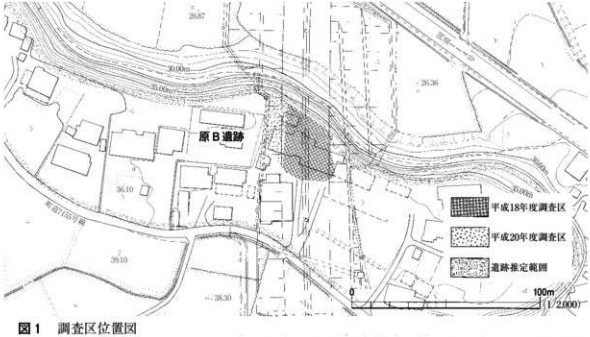


図１　調査区位置図

調査区の南側は，大半が撹乱によって破壊されていたため，基盤層直上まで掘削を行った。

遺構検出は調査区南側半分から開始した。近代の宅地造成などによって撹乱が著しく，褐色土のＬⅢが僅かに残存するのみで，遺構がないことが判明した。続いて北側半分の遺構検出を行った。盛土の下にＬⅠｂ・ＬⅡ・ＬⅢが良好に遺存しているのが確認でき，ＬⅠｂ直下からＬⅡにかけて遺物が出土したため，グリッドごとに堆積層を掘り込み，遺構検出を行った。ＬⅡ掘削時においては，１次調査の溝跡の続きを確認し，さらに南側に新たな溝跡２条と土坑２基を検出した。23日には，溝跡の精査を開始した。また同時に遺構が検出されていないグリッドに関して，ＬⅢを掘り下げ，縄文時代の遺構の検出を行った。その結果ＬⅣ上面において土坑１基が検出された。28日には遺構の精査を終了し，さらにＬⅣ上面において再度遺構検出を行い，遺構がないことを確認し，６月６日に２次調査の全作業を終了した。６月24日には福島県教育委員会・財団法人福島県文化振興事業団と東日本高速道路株式会社の現地終了確認を実施し，引渡しを行った。

平成20年度の原Ｂ遺跡の発掘調査で検出した遺構は，土坑３基，溝跡２条，遺物包含層である。発掘調査に要した日数は，延べ10日間である。

第３節　調査の方法

平成20年度の原Ｂ遺跡の調査にあたっては，基本的に１次調査の方法を継続している。グリッド設定は平成18年度の調査を踏襲し，世界測地系の座標にあわせて測量用基準杭を打設した。この基準杭をもとに調査区域全域に５ｍ四方の方眼を設定し，これをグリッドと呼んだ。

表土は重機によって除去し，表土以下の土層については，人力で層位ごとに掘削し，出土遺物は各グリッド内で層位ごとに取り上げた。

遺構は，溝跡はＬⅡ上面で，木炭焼成土坑はＬⅢ上面，縄文時代早期の土坑はＬⅣ上面で検出された。遺構の精査にあたっては，各遺構の形状や大きさを考慮して，土層観察用のベルトを設定した。そして，遺構内の検出面から底面までの堆積土が基本土層とどのように関係するかを留意しながら掘り込みを行った。また，必要に応じて遺構の壁の断ち割りを行って平面形や重複遺構などを確認した。

遺構の記録については，実測図作成および写真撮影を行った。平面図はグリッドを１ｍ四方に細分した方眼の交点を基点に測量を行った。平面図・断面図は，土坑を１/10，溝跡を１/20で作成した。遺構配置図および地形測量図は１/400で作成した。

写真撮影は，35㎜小型一眼レフカメラとデジタルカメラを併用して行った。35㎜カメラはモノクロームフィルムとカラーリバーサルフィルムを使用し，両者同一カットを３枚１単位で撮影した。

調査記録および出土遺物については当事業団が定める基準に従って整理し，当報告書刊行後，作成した台帳類と共に福島県文化財センター白河館に保管する予定である。　（中　野）

第2章　遺構と遺物

第1節　遺構の分布と基本土層

遺構の分布（図1・2）

原B遺跡2次調査では，新たに土坑3基，溝跡2条，遺物包含層を検出した。平成18年度の1次調査で検出された遺構数を合わせると，土坑24基，焼土遺構1基，溝跡4条となる。図2の遺構配置図には平成18年度調査区と平成20年度調査区を合わせて示した。

1次調査では，土坑が21基検出され、内14基が縄文時代早期の土坑とされ，調査区中央部および南東側に集中していた。2次調査においても，縄文時代早期の土坑を1基検出した。また，新たに2条の溝跡が検出された。

基本土層（図2，写真3）

2次調査における基本土層は，1次調査で示された基本土層と一致し，ＬⅠ～ＬⅣに4区分して調査を進めた。土層の観察と記録は，最も残りの良い北西隅と南西隅において土層観察用のトレンチを設定して土層柱状図を作成した。

ＬⅠはａ・ｂに分類した。ＬⅠａは，現表土で盛土である。層厚は20～22cmである。ＬⅠｂは，砂質の黒褐色土である。旧表土と考えられ，縄文時代早期，晩期，弥生時代後期，近世等の遺物が出土している。Ｄ・Ｅ4・5グリッドに堆積している。層厚は12～15cmである。

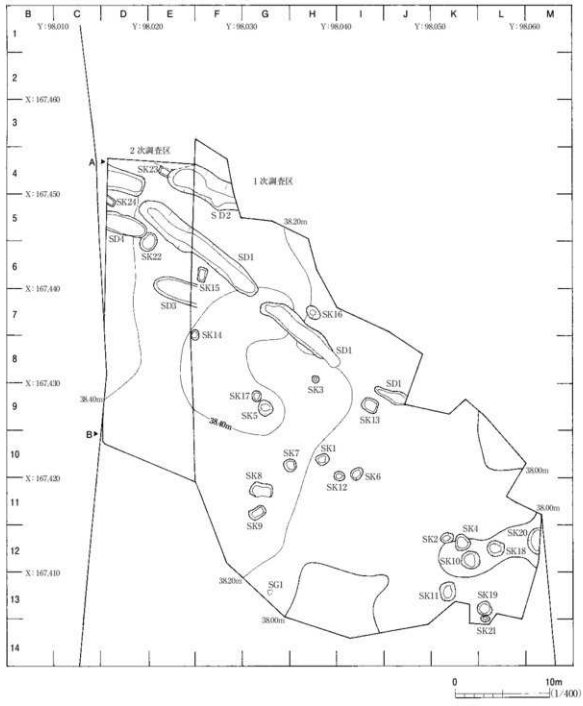
ＬⅡは，砂質の暗褐色土である。Ｄ・Ｅ4・5グリッドに堆積している。縄文時代早期・晩期の遺物を含んでいる。層厚は15～20cmである。

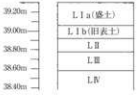
ＬⅢは，砂質の褐色土である。直下にはＬⅣと礫層が堆積する。Ｄ・Ｅ4～6・9・10グリッドに堆積している。縄文時代早期の遺物が出土する。層厚は，13～24cmを測る。

ＬⅣは，砂質の黄橙色土の無遺物層である。本遺跡の基盤層で，縄文時代早期の土坑の検出面である。部分的にはＬⅣ下部の礫層が露出している箇所もみられた。

第2節　土　　坑

原B遺跡2次調査では，新たに3基の土坑が検出された。1次調査の土坑数と合わせると24基となる。本調査では，縄文時代早期の土坑1基，古代以降と考えられる木炭焼成土坑2基が検出された。いずれも調査区北側から認められた。





基本土層

ＬＩａ　盛土
ＬＩｂ　黒褐色土　10ＹＲ3/2（旧表土）
ＬⅡ　暗褐色土　10ＹＲ3/4
ＬⅢ　褐色土　10ＹＲ4/6
ＬⅣ　明黄褐色土　10ＹＲ6/8

図２　遺構配置図・基本土層

22号土坑　ＳＫ22（図３，写真３・５）

本遺構は，調査区北側のＤ・Ｅ５・６グリッドに位置する。検出面はＬⅣ上面である。遺存状態は比較的良好である。平面形は南北を長軸とする楕円形である。規模は東西157cm，南北196cm，深さは最大49cmである。周壁は垂直に近い角度で立ち上がる。底面は丸みを帯びる。堆積土は２層に分けられた。各層がレンズ状に堆積していることから自然堆積土と考えられる。

遺物は，縄文土器がℓ１から12点出土しており，７点図示した。図５－１～３は，深鉢形土器の胴部破片である。胎土の特徴などから同一個体と考えられる。０段多条の縄文原体を施文している。胎土に繊維混和痕が見られる１は，横位方向に並行沈線を施す。４は貝殻腹縁圧痕を施文後に，並行沈線を施文している。５・６は沈線間に角状やペン先状の工具によって連続刺突を施している。７は斜交の沈線を施している。

本遺跡の時期は出土遺物や堆積土の状況から，縄文時代早期中葉頃と考えられる。用途は，貯蔵穴の可能性を考えている。

23号土坑　ＳＫ23（図３・５，写真３）

本遺構は調査区北側のＥ４グリッドに位置する。検出面はＬⅢ上面である。遺存状態は良好である。平面形は東西方向を長軸とする長方形である。規模は東西139cm，南北96cm，深さは最大42cmである。周壁は垂直気味に立ち上がる。壁面は西壁を除き焼土化範囲が認められる。焼土化範囲の厚さは５～10㎜である。堆積土は３層に分けられた。ℓ１・２は炭化物を含む流入土，ℓ３は使用時の堆積土と考えられる。

遺物は，ℓ１から縄文土器８点，石器３点が出土しており，縄文土器５点を図示した。いずれも縄文時代早期の土器で，すべて流れ込みの遺物である。図５－８は，口縁部破片である。ペン先状の工具によって連続刺突で施文する。９～12は胴部破片である。条痕地文に沈線で文様を施文している。胎土の特徴は細かい砂粒を混入している。焼き締まりが良好で赤褐色を呈する。調整方法や胎土の特徴から９～12は同一個体と考えられる。

本遺構の用途は，炭化物の堆積状況や周壁が焼土化していることから，木炭焼成土坑と考えている。遺構の時期はＬⅡ堆積以前に掘り込んでいる点から，縄文時代以降で近世よりは古い。

24号土坑　ＳＫ24（図３，写真３）

本遺構は調査区北側のＤ４・５グリッドに位置し，西側は調査区外へのびる。検出面はＬⅢである。平面形は東西方向が長い長方形である。遺存規模は南北87cm，深さは最大22cmである。周壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は２層の流入土である。遺物は出土していない。

本遺構の用途は，堆積土内の炭化物の状況などから木炭焼成土坑と考えている。遺構の所属時期は，掘り込み面がＬⅡ堆積以前である点から，古代以降と考えられる。

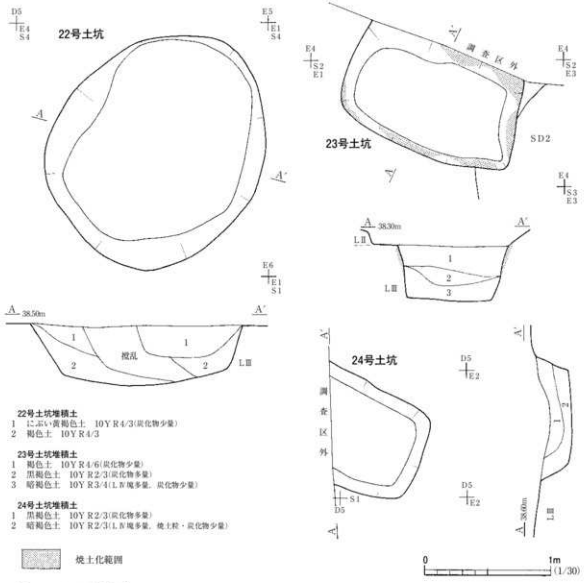


図３　22～24号土坑

第３節　溝　　跡

１次調査では段丘北縁部に沿って２条の溝跡が検出されていたが，２次調査においてもＤ・Ｅ４～６グリッドにおいて１・２号溝跡の続きが検出された（図２）。１号溝跡は，Ｅ５グリッドで途切れる。２号溝跡もＥ４グリッドで途切れ，さらにＤ４グリッドから調査区外へと続いていく。１・２号溝跡は段丘の縁を途切れながら，続いていくと考えられる。また，２次調査において新たに２条の溝跡が検出された。３号溝跡は１号溝跡の南側を東西に走り，４号溝跡は２号溝跡の南側に位置する。１～４号溝跡は，何度か造り替えられ，現在の状況になったと思われる。２号溝跡が造られ，続いて１号溝跡，そして３・４号溝跡が造られたものと考えられる。溝跡は重複関係が認められない点から，各溝跡の位置を意識して造り替えられている可能性がある。１次調査において，溝

跡について道跡の可能性を指摘しているが，３・４号溝跡が発見されたことで，さらに地境溝や根切り溝などの様々な用途も推測できよう。以下では，新たに検出された３・４号溝跡について記述する。

３号溝跡　ＳＤ３（図４，写真３）

本遺構は，調査区北側のＥ６・７グリッドに位置する。１号溝跡の南側に位置する。東側の１次調査区へと続いているが，大きく撹乱が入っていて検出できなかったと考えている。検出面は，ＬⅣであるが，上面を宅地造成時に削られているため，ＬＩｂ～ＬⅡを掘り込んでいたと推測される。断面形は，緩やかなＵ字状を呈する。幅は上面で最大112cm，底面は89cmを測る。堆積土は１層であり，自然堆積土と考えられる。遺物は出土していない。

遺構の所属時期は，遺物が出土しておらず不明である。

４号溝跡　ＳＤ４（図４・５，写真４～６）

本遺構は調査区北側のＤ５グリッドに位置する。22号土坑に近接する。西側の調査区外へと続いている。ＬⅡ上面から掘り込んでいる。断面形は，逆台形となる。幅は上面で最大109cm，底面は，最大で87cmを測る。堆積土は１層であり，上面には礫や割れた陶磁器片が散乱していた。自然堆積土と考えているが，溝跡が埋没最終過程において礫や陶磁器が廃棄されたものと考えられる。

遺物は縄文土器11点，石器６点，陶磁器片29点出土している。縄文土器３点と陶磁器５点を図示した。図５－13～15は縄文土器である。13は口縁部片である。折り返し状となった口縁部に撚糸を施している。14は内外面に貝殻腹縁による条痕が施されている。15は尖底土器の尖底部片である。

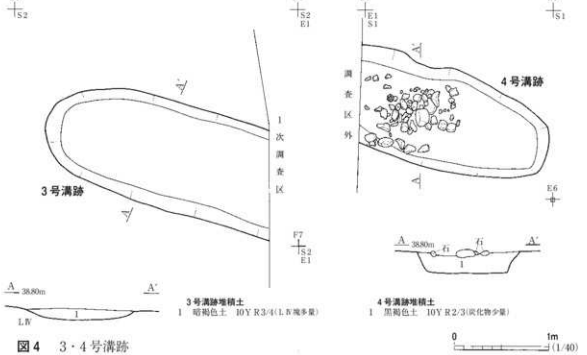


図４　３・４号溝跡

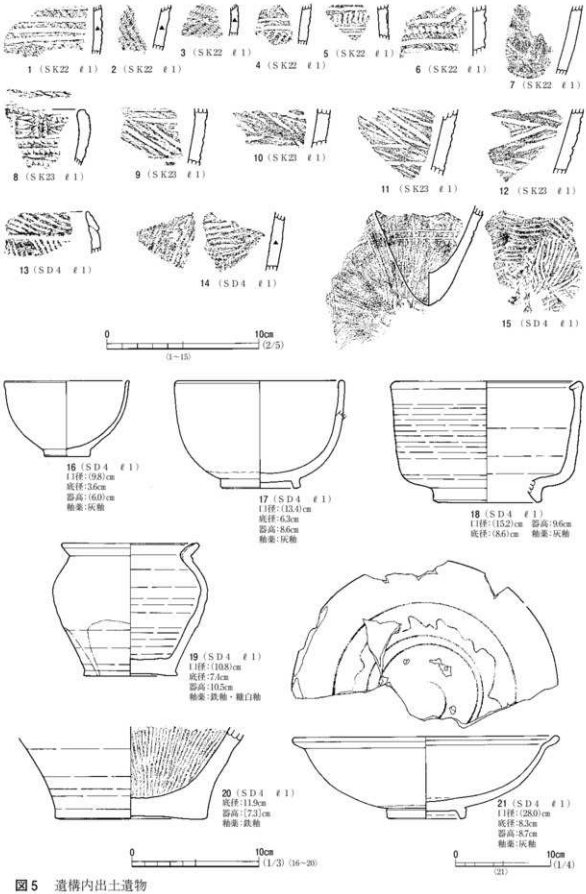

1（SK22　ℓ1）
2（SK22　ℓ1）
3（SK22　ℓ1）
4（SK22　ℓ1）
5（SK22　ℓ1）
6（SK22　ℓ1）
7（SK22　ℓ1）
8（SK23　ℓ1）
9（SK23　ℓ1）
10（SK23　ℓ1）
11（SK23　ℓ1）
12（SK23　ℓ1）
13（SD4　ℓ1）
14（SD4　ℓ1）
15（SD4　ℓ1）
0　10cm　(2/5)
(1～15)
16（SD4　ℓ1）
口径:(9.8)cm
底径:3.6cm
器高:(6.0)cm
釉薬:灰釉
17（SD4　ℓ1）
口径:(13.4)cm
底径:6.3cm
器高:8.6cm
釉薬:灰釉
18（SD4　ℓ1）
口径:(15.2)cm　器高:9.6cm
底径:(8.6)cm　釉薬:灰釉
19（SD4　ℓ1）
口径:(10.8)cm
底径:7.4cm
器高:10.5cm
釉薬:鉄釉・銅白釉
20（SD4　ℓ1）
底径:11.9cm
器高:(7.3)cm
釉薬:鉄釉
0　10cm　(1/3)　(16～20)
21（SD4　ℓ1）
口径:(28.0)cm
底径:8.3cm
器高:8.7cm
釉薬:灰釉
0　10cm　(1/4)
(21)

図5　遺構内出土遺物

丁寧なナデ調整後に平行沈線を施している。内面には貝殻復縁による条痕がみられる。

図５－16～21は陶器を図示した。16は中型の丸椀である。内外面に灰釉が施されている。17は片口椀である。注口部がわずかに認められる。18は外面に灰釉を施した火入れである。19は小型甕である。鉄釉地に鰊白釉を施している。20は擂鉢の底部破片である。21は大形の皿である。見込にはペン先状の工具により，波状の模様や円を描き出している。出土した陶器は大堀相馬焼きである。

遺構の時期は不明であるが，堆積土上面に近代の陶器が遺棄されていることなどから，近代以前には溝の機能を終え，ほとんど埋没していたものと考えられる。

第４節　遺構外出土遺物

本調査区で遺構外から出土した遺物は，縄文土器247点，弥生土器44点，石器18点，陶磁器３点である。遺物の分布状況はⅬⅡ～Ⅲが良好に堆積していたＤ・Ｅ４～６グリッドから比較的まとまって出土している。

Ⅰ群土器　縄文時代の遺物

１類（図６－１）　薄手無文土器に相当する土器群である。１点図示した。縦位方向に丁寧なナデ調整を行っている。内面調整は，横位方向にナデ調整を加えている。胎土は均質で，焼成が良好で硬く締まっている。色調は赤褐色である。混和材には細かい砂粒を用いている。

２類（図６－２・３）　日計式土器に相当する土器群で，２点図示した。２は縄文地文を施した後に横位方向に並行沈線を施す。３は０段多条の原体を施している。２類の内面調整は，横位方向にナデ調整を加えている。胎土は焼成が比較的良好で締まっている。色調は鈍い赤褐色～黒褐色などの暗めの色調である。胎土には少量の繊維混和材の混入痕が見られ，細かい砂粒も混入している。

３類（図６－４，写真７）　三戸式土器に相当する土器群である。１点図示した。４は口縁部破片であり，口端部は内削ぎ状になっている。文様は連続的に横位方向に並行沈線を施文し，さらに縦方向へ沈線を施して格子目文を描いている。細かい砂粒を多く混入し，黒褐色の胎土である。

４類（図６－６～36，写真７）　田戸下層～上層式土器に相当する土器群である。最も多く出土している。６～14は口縁部片，15～36は胴部破片である。６～11・13・15・16・18～20は，沈線と連続刺突・押引きで文様を描く。６・８・15・20は，連続刺突による区画内に矢羽根状に刺突を施す。12・17・21・23～36は，条痕地文に刺突文や連続的に沈線を施文する土器群である。12・17は，条痕地文にペン先状工具による横位方向の連続刺突と平行沈線を施文している。29・35は縦位方向に半截竹管状工具による連続刺突文を施す。胎土には１～３㎜の砂粒が混入している。焼成は良好で，色調は赤褐色のものが多い。

５類（図６－37～40）　条痕文系土器群に相当する土器群である。37は半截竹管状工具を斜角から連続的に刺突を加えている。38は条痕地に連続的な横位方向への沈線を施す。39・40は内外面に貝殻復縁による条痕を施す。胎土は１～３㎜の砂粒を多く混入しており，繊維混和痕が見られる。焼

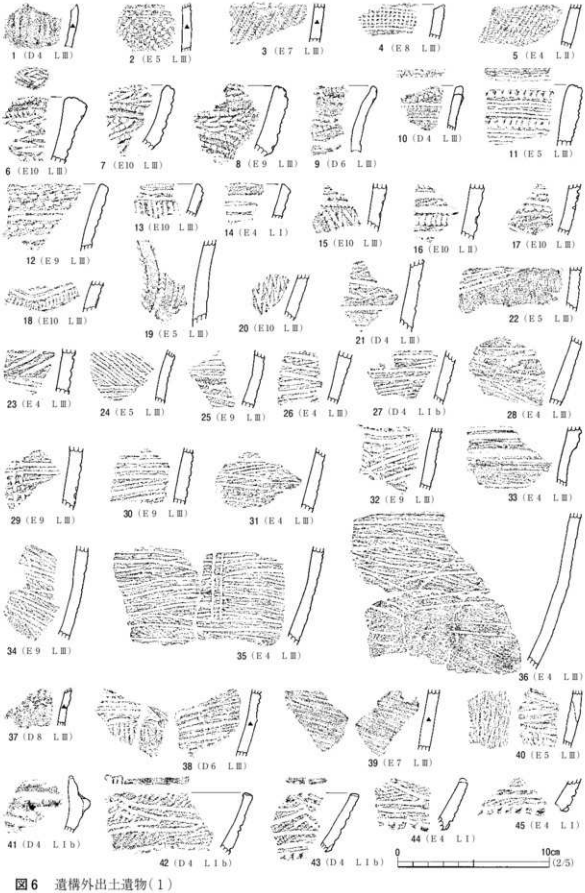

1（D 4　L Ⅲ）
2（E 5　L Ⅲ）
3（E 7　L Ⅲ）
4（E 8　L Ⅲ）
5（E 4　L Ⅲ）
6（E10　L Ⅲ）
7（E10　L Ⅲ）
8（E 9　L Ⅲ）
9（D 6　L Ⅲ）
10（D 4　L Ⅲ）
11（E 5　L Ⅲ）
12（E 9　L Ⅲ）
13（E10　L Ⅲ）
14（E 4　L Ⅰ）
15（E10　L Ⅲ）
16（E10　L Ⅲ）
17（E10　L Ⅲ）
18（E10　L Ⅲ）
19（E 5　L Ⅲ）
20（E10　L Ⅲ）
21（D 4　L Ⅲ）
22（E 5　L Ⅲ）
23（E 4　L Ⅲ）
24（E 5　L Ⅲ）
25（E 9　L Ⅲ）
26（E 4　L Ⅲ）
27（D 4　L Ⅰb）
28（E 4　L Ⅲ）
29（E 9　L Ⅲ）
30（E 9　L Ⅲ）
31（E 4　L Ⅲ）
32（E 9　L Ⅲ）
33（E 4　L Ⅲ）
34（E 9　L Ⅲ）
35（E 4　L Ⅲ）
36（E 4　L Ⅲ）
37（D 8　L Ⅲ）
38（D 6　L Ⅲ）
39（E 7　L Ⅲ）
40（E 5　L Ⅲ）
41（D 4　L Ⅰb）
42（D 4　L Ⅰb）
43（D 4　L Ⅰb）
44（E 4　L Ⅰ）
45（E 4　L Ⅰ）
0
10cm
(2/5)

図６　遺構外出土遺物（１）

成は比較的良好で，色調は暗赤褐色や黄褐色である。

６類　縄文時代晩期（図６－41）　大洞Ｃ２～Ａ式に相当する土器群である。１点出土している。わずかに赤色顔料の痕跡が見られる。貼り瘤状の突起に沈線を沿わせている。胎土は２～３㎜の砂粒を多く混入している。焼成は比較的良好であり，色調は黄褐色である。

Ⅱ群土器　弥生時代の土器（図６－42～45，図７－１～４）

天王山式に相当する土器群である。Ｄ・Ｅ４グリッドのＬＩｂからまとまって出土している。図６－42～45は口縁部から頸部にかけての破片である。非常に緩い波状口縁をなし，波頂部口端には刺突を加えている。文様は縄文地文上に波頂部を中心に，三角状文と弧線文を交互に配置している。頸部には平行沈線間に交互に刺突を加えている。図７－１～５は胴部破片であり，同一個体である。横方向に条が施文される。２は縄文原体の回転方向を交互に変えて羽状縄文を施文する。胎土は２～３㎜の砂粒を多く混入している。焼成は良好で硬く締まっている。色調は黄褐色である。

石　器（図７）

石器は13点出土している。礫石器３点を図示した。剥片石器は，製品は見られず，図示していない。５・６は磨石である。７は敲石である。　（中　野）

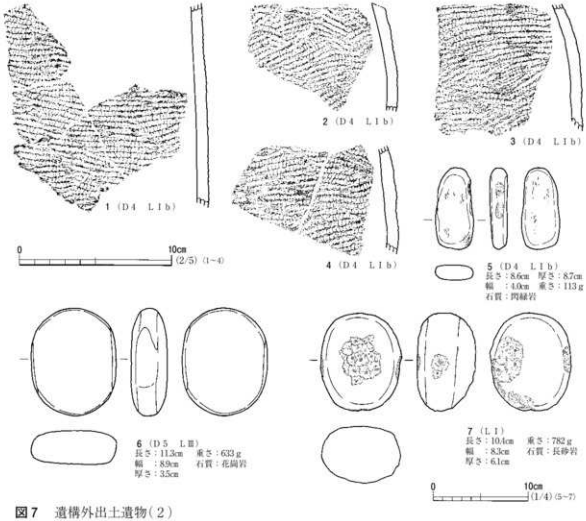


図７　遺構外出土遺物（２）

第３章　ま　と　め

土坑について

原Ｂ遺跡では，１・２次調査を合わせて24基の土坑が確認できた。出土遺物から縄文時代早期中葉頃の土坑は15基（１・２・４～６・８・10・11・13・16・18～22号土坑），近世の土坑２基（７・９号土坑），時期不明の土坑７基（３・12・14・15・17・23・24号土坑）である。

縄文時代早期中葉の土坑　縄文時代早期中葉に属する土坑は，調査区のほぼ中央と南東部に重複することなく位置している。土坑としての機能は平面形や断面形状から，８号土坑を除く14基の土坑が貯蔵穴と考えられる。原Ｂ遺跡検出の土坑の規模は直径170㎝以上を測る土坑が多く，比較的大きい。また，隣接する田子平遺跡においても，縄文時代早期中葉の土坑群が見つかっている。

田子平遺跡においても当該期の住居跡は認められていない。両遺跡とも調査区外に住居跡が存在する可能性は否定できない。ただ，本遺跡で直径が２ｍ近い規模で，平面形が円形または楕円形を基調とする土坑（４・10・11・20号土坑）に関しては，住居跡としての可能性も推測できる。

木炭焼成土坑　時期不明の土坑の内，３・12・15・23・24号土坑の５基は，炭化物層が認められた土坑や焼土化範囲が確認できた土坑である。これら５基の土坑の機能として，木炭焼成土坑と考えられる。調査区の北西端と中央に散在する。火熱を受けたと考えられる壁面は硬化した状況が認められず，弱い被熱であったと想定できる。また，炭化物層も明確でない土坑も存在することから，１度程度の使用で廃棄された土坑であると考えられる。

土器について

Ⅰ群土器　２次にわたる発掘調査で出土した土器の点数は709点である。出土した大半は縄文時代早期中葉に比定されるⅠ群土器である。破片資料のみで，全体の器形が分かる資料は少ない。おそらく深鉢形土器であると想定される。

１類土器は薄手無文土器である。１次調査では外傾する口縁部をもつ資料が出土している。丁寧なナデ調整後，ミガキが加えられている資料もある。２類土器は日計式土器に相当する土器群である。胎土には繊維混和痕が認められる。多重山形文や横位沈線による区画が出土している。２次調査においては図６－３の０段多条原体の資料が出土している。

３・４類とした沈線文系土器群がある。三戸式・田戸下層～上層式土器が出土している。本時期の資料が最も多い。検出した土坑の多くも本時期に想定している。５類とした条痕文系土器群，６類とした縄文時代晩期の土器片もわずかに出土している。

Ⅱ群土器　２次調査では弥生土器が出土している。天王山式に比定される。縄文地文上に沈線により三角文や弧線文を描く。調査区の北西から出土している。調査区外に弥生時代の遺構・遺物が存在する可能性が考慮できる。　（三　浦）

第４編　沢東（さわひがし）Ｂ遺跡（３次調査）

遺跡記号	ＮＥ－ＳＨ・Ｂ
所在地	浪江町大字立野字沢東
時代・種類	縄文時代－集落，中世－館跡 近世－屋敷跡
調査期間	平成20年４月９日～５月23日
調査員	三浦武司・中野幸大

第１章　周辺地形と調査経過

第１節　遺跡の位置と周辺地形

沢東Ｂ遺跡は，浜通り地方中央部の双葉郡浪江町大字立野字沢東に所在する。北緯37°31′00″，東経140°56′40″に位置する。海岸線から約９km，ＪＲ常磐線浪江駅から北西約３kmの地点に位置する。遺跡の西を県道仲ノ森・加倉線が通り，約１km西には県道いわき・浪江線が南北に走る。

浪江町の地形は南北に走る双葉断層を境に西半分が阿武隈高地，東半分が丘陵地帯や河岸段丘，沖積地となっている。町の北部には請戸川，南部には高瀬川が流れ，太平洋に注ぐ。本遺跡が立地する立野地区は，阿武隈高地から続く丘陵地帯の東端部にあたり，請戸川水系の河川等によって複雑に開析されている。

本遺跡は浪江町の北部を東流する請戸川左岸の河岸段丘上に立地する。調査区内の標高は53.2～53.8mで，請戸川の河床との標高差は約30mである。遺跡の北側には南相馬市小高区との境になる丘陵地帯がある。遺跡の範囲は，河岸段丘の平坦面を中心とする21,000㎡である。今回の３次調査面積は800㎡である。平成15年度に実施した１次調査は遺跡範囲の北側にあたる2,100㎡，平成18年度に実施した２次調査は13,280㎡の範囲を調査した。現況は町道・農道である。調査区内は道路敷設時および請戸農水給水管埋設時による削平を受けており，遺構の遺存状態は悪い。

第２節　調 査 経 過

沢東Ｂ遺跡は平成８年度に実施された常磐自動車道の建設予定地を対象とした表面調査によって，遺跡推定地として登録された。平成14年には試掘調査が実施され，縄文時代や中世から近世にかけての遺構や遺物が確認されたことから，18,400㎡が保存を要する範囲とされた。新発見の遺跡として沢東Ｂ遺跡と登録された。平成15年度に１次調査，平成18年度に２次調査を実施している。平成20年度は，３次調査となる。以下調査の概要を記す。

本発掘調査は福島県教育委員会から平成20年４月７日付けの指示により，財団法人福島県文化振興事業団が実施した。４月９日より，調査員２名を配置してプレハブと仮設トイレの設置および発掘器材の搬入を行った。調査区は農道部分と町道部分の２カ所である。工事側および農作業時期との関係から，先行して農道部分の調査を行い，５月19日以降，町道部分の調査を行うこととなった。

同月16日より重機による表土剥ぎを開始した。今年度の調査区は請戸農水給水管が埋設してある区域であり，重機業者と綿密な打ち合わせと図面での確認をした後に作業を開始した。しかし，十分注意はしていたが，すでに止水され埋没していた請戸農水給水管から耕作地へ送水する配管を破損し，復旧作業に１日を要してしまった。請戸農水給水管を残して，周囲の表土掘削を行った。

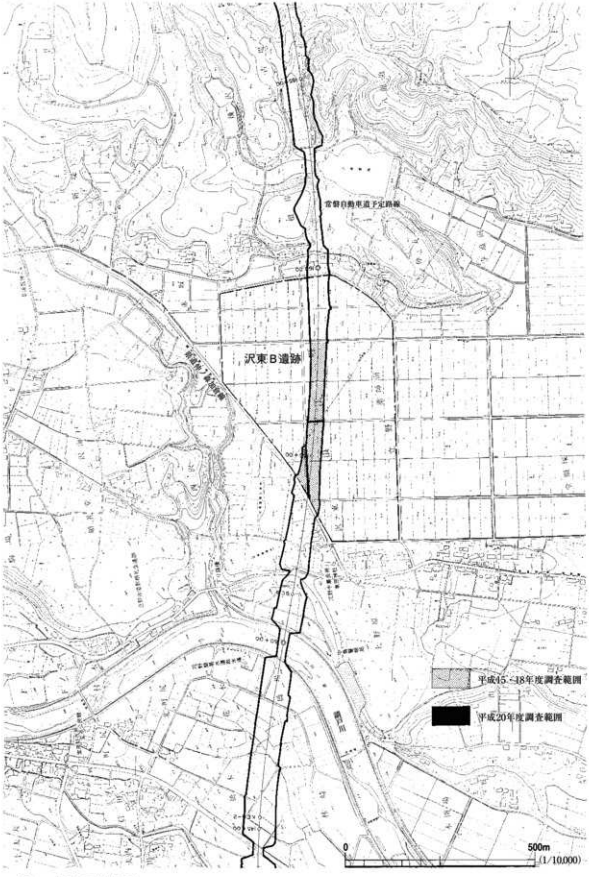


図１　調査区位置図

同月17日より作業員を投入して発掘作業を実施した。農道北側より検出作業を開始し，２次調査において確認した溝跡や土坑の続きを検出した。また数多くの小穴も検出した。

５月初頭には農道北側の調査は終了し，農道南側へ移行した。また，一部の作業員は段階的に田子平遺跡や原Ｂ遺跡に移動した。農道南側は北側よりも多くの小穴が確認できた。同月15日には農道部分600㎡の調査を終了させ，東日本高速道路株式会社へ引き渡した。

当初の予定通り，19日より町道の農作業者以外の車両通行止めを開始した。協議により町道部分200㎡の内，迂回路の接続部分を除いた150㎡について調査を行うことになった。接続部分50㎡は後日立会対応ということになった。重機によりアスファルトを除去し，耕作土等の掘削を開始した。その後，２次調査において確認した遺構の続きを検出した。同月23日には町道部分150㎡の調査を終了させ，現地を東日本高速道路株式会社へ引渡した。

迂回路の接続部分である50㎡は，12月11日に福島県教育委員会文化財課立会いの下で調査を行った。小穴数個を検出し，当日中に調査は終了した。以上により沢東Ｂ遺跡要保存面積である18,400㎡全ての発掘調査を終了した。

第３節　調査の方法

平成20年度の調査は平成15年度，18年度に次ぐ３次調査で，道路部分800㎡を対象としている。調査の継続性から主な遺構・グリッド番号は１次・２次調査を踏襲している。

本遺跡では調査区の位置を国土座標の中で正確に記録するために，世界測地系に一致させ，一辺10mの方眼を単位として，グリッドを設定した。グリッドの表記方法はアルファベットと算用数字を組み合わせたもので，西から東にアルファベット順，北から南へ算用数字順に移行している。

表土は重機で除去し，それ以下の土層については人力により堆積層ごとに掘り下げた。遺構の番号は，各遺構において通し番号を付与した。各種遺構の掘り込みは，写真撮影及び実測用に土層観察帯を設定して行った。ただ土坑については，原則として２分割法を用いた。

調査区内の土層については，基本土層はアルファベット大文字「Ｌ」とローマ数字を用いた。遺構内堆積土については，アルファベット小文字筆記体「ℓ」とアラビア数字を用いて表記した。遺構内から出土した遺物については，土層観察用帯で観察した遺構内堆積土を基準に取り上げた。遺構外出土遺物については，出土位置であるグリッドと出土層位を基準に取り上げた。土色に関しては，日本色研事業株式会社の新版標準土色帖に準拠した。

遺構の記録は縮尺10分の１および20分の１を基本として作図した。地形図は縮尺200分の１で作図した。写真は35㎜判のモノクローム・カラーリバーサルフィルムの両方を用いて撮影した。また，メモ写真として，デジタルカメラの撮影も行った。出土した遺物は水洗いし，出土地点・出土層位の注記を行っている。出土遺物と調査記録は，福島県文化財センター白河館にて保管する。（三　浦）

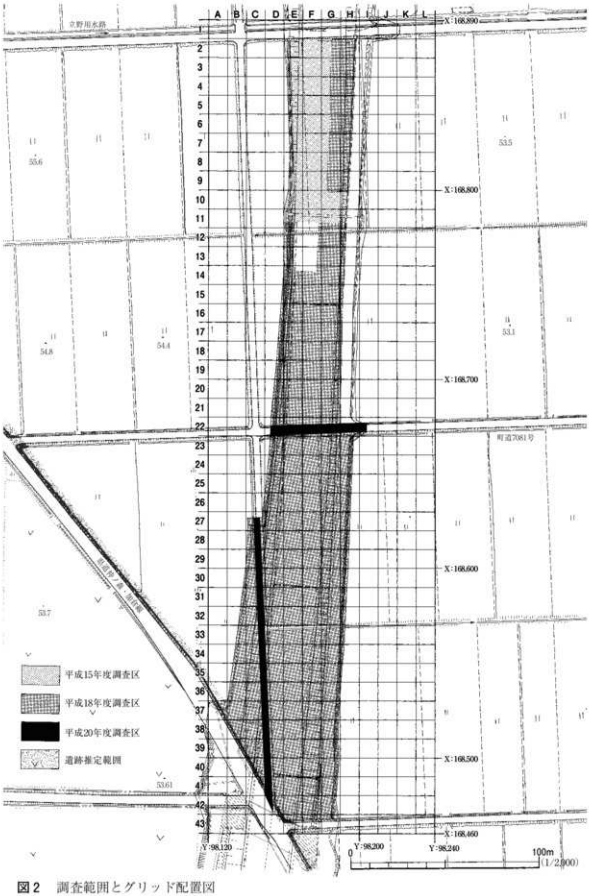


図２　調査範囲とグリッド配置図

第2章　遺構と遺物

第1節　遺跡の分布と基本土層

遺構の分布（図3・4）

沢東B遺跡の3次調査において新たに検出された遺構は掘立柱建物跡2棟，土坑3基，井戸跡1基，柵列跡1列，小穴98個である。平成15・18年度の調査時に検出された遺構との合計数は，竪穴住居跡2軒，掘立柱建物30棟，特殊遺構4基，土坑33基，井戸跡8基，溝跡33条，柵列跡12列，焼土遺構2基，小穴1,102個である。図3・4には平成18年度調査区との遺構全体の調査成果を合わせて図示したが，2次調査において検出した掘立柱建物跡・溝跡・土坑と連続する同一遺構については，2次調査で付した遺構番号を踏襲している。

沢東B遺跡全体の検出された遺構の分布状況を概観すると，遺跡の北端と南端において建物跡・土坑などが集中するようである。遺構の時期は縄文時代および中・近世に大別される。中・近世の遺構は，調査区全域に分布し，建物跡・土坑や区画溝が大半を占める。今年度調査区内においても同様の分布状況が認められた。縄文時代の遺構は南端に集中するようである。小規模な集落を形成していたようである。当時，数条の旧河川が流路を変えながら蛇行していたことが，旧河川内堆積土中から縄文土器が出土していることでわかる。

これまでの調査でも明らかなように，本遺跡では基盤整備や圃場整備，用水路建設に伴う掘削によって改変が著しい区域があり，遺構が少なからず削平されていることが認められた。

今回の調査において出土した遺物は，縄文土器片18点，陶磁器類31点，石器5点，鉄製品1点，羽口2点，鉄滓2点である。出土した縄文土器は，中期末葉の大木10式土器であるが，器面の摩滅が著しく図示できなかった。縄文土器片は主に10号溝跡堆積土中からの出土である。陶磁器類は散在して出土したが，小破片のため図示できなかった。

基本土層（図3，写真3）

2次調査において基本土層は大分して6層に区分し，ＬⅡ・Ⅳ・Ⅴについてはさらに細分を行っている。今回の調査では継続性の観点から2次調査においての基本土層を踏襲している。ただし，3次調査において確認された土層は，ＬⅠ・ＬⅡb・ＬⅢ・ＬⅤb・ＬⅥaのみである。以下，堆積土の特徴，遺構・遺物の関係について概略する。

ＬⅠ　：表土・水田耕作土。今年度調査区では，道路部分の盛土である。

ＬⅡa：水田改修前の旧表土で黒褐色土である。3次調査では，認められなかった。

ＬⅡb：褐色砂質土である。縄文時代中期の遺物が混入する層で，3次調査区の農道部分南半の遺構検出面である。

ＬⅡc：褐色砂質土で，3次調査では，認められなかった。

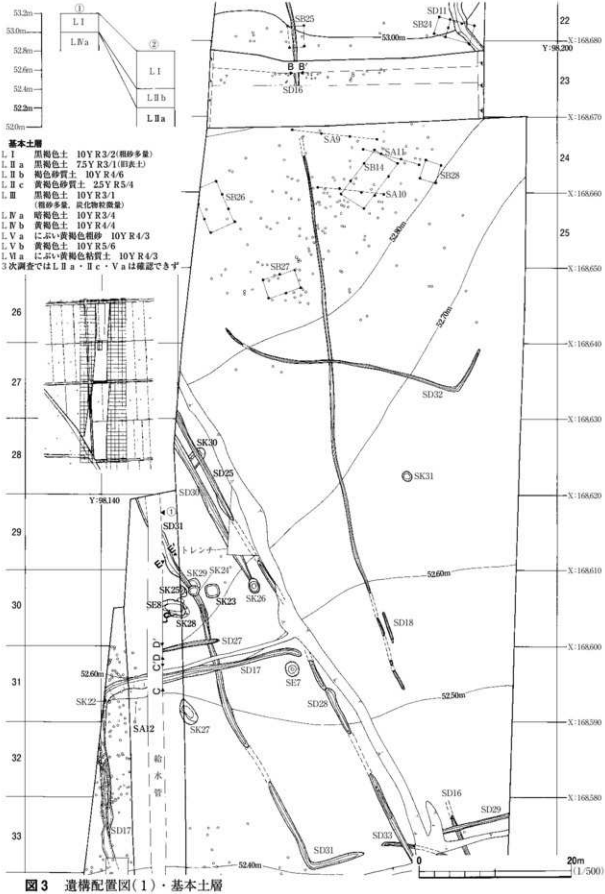


図３　遺構配置図（１）・基本土層

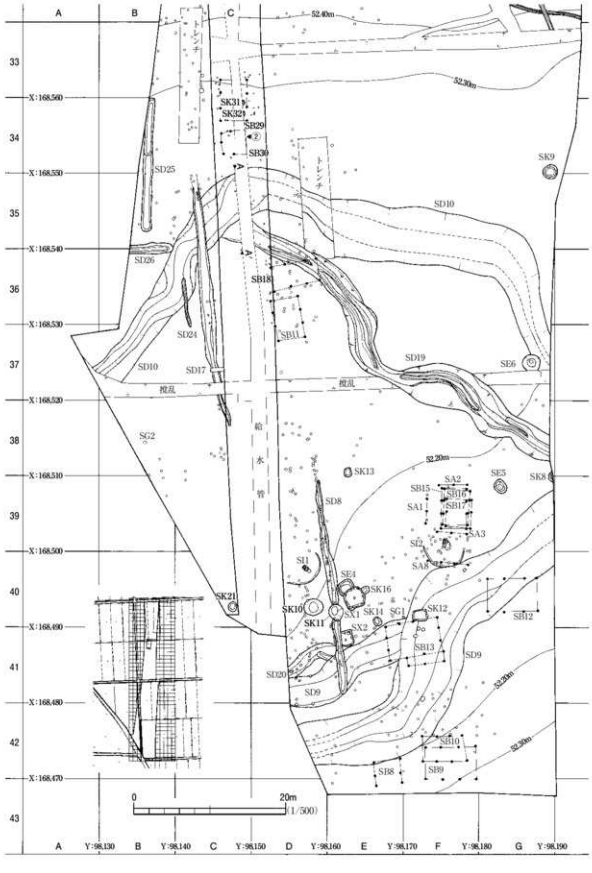

A
B
C
52.40m
52.30m
SK31
SK32
SD29
SB30
SD25
SK9
SD10
SD26
SB18
SB31
SD24
SD10
SD17
SD19
SE6
撹乱
撹乱
給水管
SG2
52.20m
SK13
SE3
SK8
SB15
SA2
SB16
SB17
SA1
SD8
SA3
SA4
SI1
SE4
SK16
SK21
SK10
SK11
SK1
SK14
SG1
SK12
SB12
SX2
SB13
SD9
SD20
SD9
52.20m
52.30m
SB10
SB8
SB9
0
20m
(1/500)
A　Y:98.130
B　Y:98.140
C　Y:98.150
D　Y:98.160
E　Y:98.170
F　Y:98.180
G　Y:98.190
X:168.560
X:168.550
X:168.540
X:168.530
X:168.520
X:168.510
X:168.500
X:168.490
X:168.480
X:168.470
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43

図４　遺構配置図（２）

ＬⅢ　：黒褐色土で粘土質である。調査区南側の遺構検出面である。
ＬⅣａ：暗褐色土で，１・２次調査区北側での基底面である。３次調査では，認められなかった。
ＬⅣｂ：褐色土で，遺跡の南側に認められる層。３次調査では，認められなかった。
ＬＶａ：にぶい黄褐色粗砂で，遺跡の北側に広がる。３次調査では，認められなかった。
ＬＶｂ：黄褐色土で，ＬⅡａと分布域が似通う。３次調査では，認められなかった。
ＬⅥａ：にぶい黄褐色粘質土で，本遺跡の基底面である。３次調査区の農道部分北半及び町道部分では，本層上面が遺構検出面となっている。

第２節　掘立柱建物跡・柵列跡

今回の３次調査では，２棟の新しい建物跡を確認した。これらの建物跡は３次調査区の農道部中央付近から検出した。出土遺物が乏しく，時期の特定は難しいが，１・２次調査との関連から中世から近世頃と推測できる。規模と柱間距離は柱痕が確認できなかったため，掘形底面の中心を結んだ数値を示している。遺構番号は，１・２次調査からの継続番号を付している。２次調査で一部のみ確認できた11・18号建物跡については，３次調査においても２次調査で確認し得なかった一部を検出したので，本文にて再報告をする。

柵列跡は１列確認した。２次調査までの数と合わせて12列である。掘立柱建物跡の可能性も残るが，大部分が２次調査区へのび，組み合わせて確認できなかったため，柵列として扱うこととした。

11号建物跡　ＳＢ11（図５）

本遺構は調査区南側D36・37グリッドに位置する。検出面はＰ５・７・８がＬＶｂ上面，それ以外はＬⅢ上面である。直接重複する小穴はない。すぐ北には18号建物跡を確認している。

本遺構は南北３間，東西１間の南北が長い建物跡である。長軸方向はＮ11°Ｗである。規模は南北5.8m，東西4.1mを測り，平面積は23.7㎡を測る。

本建物跡を構成すると考えられる柱穴を８個確認した。北東隅の柱穴をＰ１とし，時計回りにＰ８まで呼称した。本調査においてはＰ７・８を検出した。東桁行きは，Ｐ１～４で構成され，総長は5.7mである。各柱間距離は1.8～1.95mである。掘形底面の標高は，51.84～51.94mである。西桁行きは，Ｐ５～８で構成され，総長は5.8mである。各柱間距離は1.85～2.05mの範囲内である。掘形底面の標高は，51.43～51.82mである。北梁行きはＰ１・８で構成され，柱間距離は4.1mを測る。掘形底面の標高は，51.59mと51.84mで，25㎝の差がある。南梁行きはＰ４・５で構成され，柱間距離は3.45mを測る。掘形底面の標高は，51.82と51.87mで，５㎝差がある。西桁行きが東桁行きの柱穴に比べて深い。

柱穴の平面形は，すべて円形を基調としている。規模は直径28～33㎝を測る。検出面から底面までの深さは26～77㎝である。柱痕は確認できなかった。掘形内堆積土はすべて黒褐色土１層である。

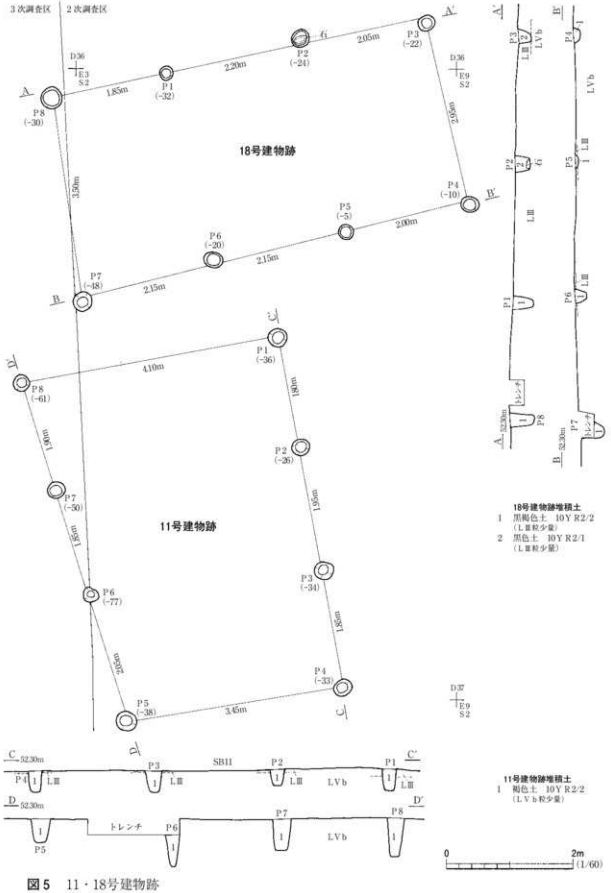

3次調査区
2次調査区
18号建物跡
11号建物跡
P1 (-32)
P2 (-24)
P3 (-22)
P4 (-10)
P5 (-5)
P6 (-20)
P7 (-48)
P8 (-30)
P1 (-36)
P2 (-26)
P3 (-34)
P4 (-33)
P5 (-38)
P6 (-77)
P7 (-50)
P8 (-61)
1.85m
2.20m
2.05m
2.95m
3.50m
2.00m
2.15m
2.15m
4.10m
1.80m
1.90m
1.95m
1.85m
1.85m
2.05m
3.45m
18号建物跡堆積土
1　黒褐色土　10Y R2/2
（L Ⅲ粒少量）
2　黒色土　10Y R2/1
（L Ⅲ粒少量）
11号建物跡堆積土
1　褐色土　10Y R2/2
（L V b 粒少量）
SB11
トレンチ
0
2m
(1/60)

図５　11・18号建物跡

本遺構は３間×１間の南北棟の建物跡である。近接する18号建物跡とは柱穴規模が近似する点や軸線方向が直行する点から，同時併存の可能性を考えている。遺物は２次調査において，Ｐ１から14～16世紀の陶器片１点が出土している。時期を推察する資料が少ないため明確にはできないが，柱間距離から近世頃の可能性が高いと考えている。

18号建物跡　ＳＢ18（図５）

本遺構は調査区南側，Ｄ36グリッドに位置している。検出面はＬⅢ上面である。19号溝跡と重複し，本遺構が新しい。直接重複する小穴はない。すぐ南には11号建物跡がある。

本遺構は東西３間，南北１間の東西が長い建物跡である。長軸方向はＮ78°Ｅである。規模は東西6.3m，南北3.5mを測り，平面積は22.0㎡を測る。

本建物跡を構成すると考えられる柱穴を８個確認した。２次調査時において北西隅であった柱穴をＰ１とし，時計回りにＰ８まで呼称した。本調査においてはＰ８を検出した。北桁行きは，Ｐ１～３・８で構成され，総長は6.1mである。各柱間距離は1.85～2.05mの範囲内である。掘形底面の標高は，51.88～51.98mである。南桁行きは，Ｐ４～７で構成され，総長は6.3mである。各柱間距離は2.00～2.15mの範囲内である。掘形底面の標高は，51.72～52.10mである。東梁行きはＰ３・４で構成され，柱間距離は2.95mを測る。掘形底面の標高は，51.98mと52.10mで，12cm差がある。西梁行きはＰ７・８で構成され，柱間距離は3.5mを測る。掘形底面の標高は，51.72mと51.90mで，18cm差がある。柱穴掘形底面は，西梁行きに向かって深くなるようである。

柱穴の平面形は，すべて円形を基調としている。規模は直径20～33cmを測る。検出面から底面までの深さは，５～48cmである。柱痕は確認できなかった。掘形内堆積土はＰ１・４・７・８が黒褐色土１層，Ｐ２・３が黒色土１層である。

本遺構は３間×１間の東西棟の建物跡である。近接する11号建物跡とは柱穴規模が近似する点や軸線方向が直行する点から，同時併存の可能性を考えている。出土遺物はなく時期は明確にはできないが，柱間距離から近世頃の可能性が高いと考えている。

29号建物跡　ＳＢ29（図６，写真４）

本遺構は調査区南側，Ｃ33・34グリッドに位置している。検出面はＬⅢ上面である。建物跡の中央を貫くように諸戸川農水給水管が埋設してあり，調査時点において使用していたため，残して調査を行った。建物のほぼ中央には32・33号土坑が位置する。直接重複する小穴はない。すぐ南には30号建物跡がある。小穴同士での重複関係はないものの，32・33号土坑が平面的に重なる。層位的にはＬⅡｂから掘り込まれているため，本建物跡の施設である可能性も残るが明確にできなかった。

確認できた時点において本遺構は南北３間，東西１間の南北が長い建物跡である。長軸方向はほぼ真北を向く。規模は東西5.55m，南北3.75mを測り，平面積は20.8㎡を測る。

本建物跡を構成すると考えられる柱穴を８個確認した。北東隅の柱穴をＰ１とし，時計回りにＰ

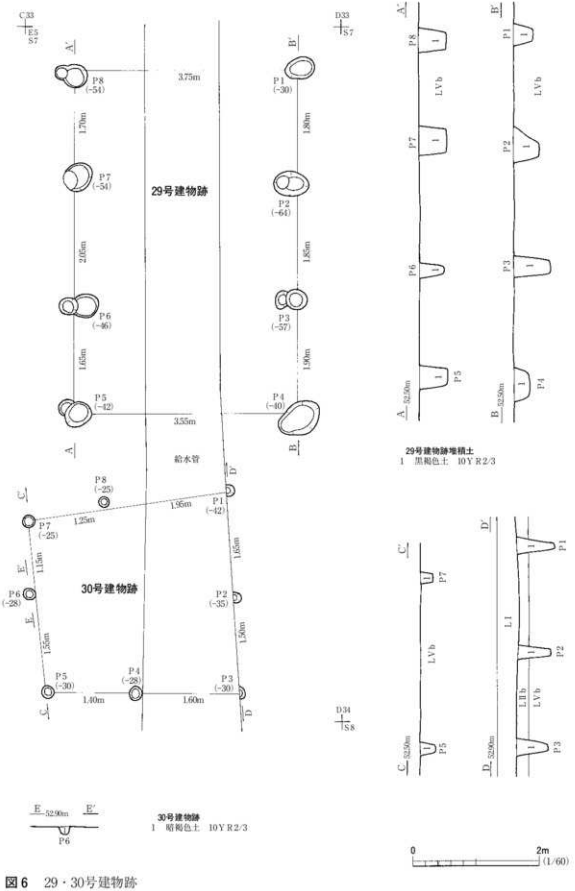

29号建物跡
30号建物跡
給水管
3.75m
3.55m
1.70m
2.05m
1.65m
1.80m
1.85m
1.90m
1.95m
1.25m
1.15m
1.55m
1.40m
1.60m
1.65m
1.50m
P1 (-42)
P2 (-64)
P3 (-57)
P4 (-40)
P5 (-42)
P6 (-46)
P7 (-54)
P8 (-54)
P1 (-30)
P2 (-35)
P3 (-30)
P4 (-28)
P5 (-30)
P6 (-28)
P7 (-25)
P8 (-25)
LVb
L1
L1b
29号建物跡堆積土
1　黒褐色土　10Y R2/3
30号建物跡
1　暗褐色土　10Y R2/3
0
2m
(1/60)

図6　29・30号建物跡

８まで呼称した。東桁行きは，Ｐ１～４で構成され，総長は5.55mである。各柱間距離は1.8～1.9mである。掘形底面の標高は，51.66～52.00mである。西桁行きは，Ｐ４～８で構成され，総長は5.4mである。各柱間距離は1.65～2.05mの範囲内である。掘形底面の標高は，51.76～52.00mである。北梁行きはＰ１・８で構成され，柱間距離は3.75mを測る。掘形底面の標高は，51.76mと52.00mで，24cmの差がある。南梁行きはＰ４・５で構成され，柱間距離は3.55mを測る。掘形底面の標高は，51.88mと51.90mでほぼ同じである。

柱穴はすべてにおいて柱の抜き取り痕が確認できた。柱穴掘形は抜き取り痕もすべて，同一の堆積土で埋まっていた。柱穴抜き取り痕は，検出面からの深さ18～45cmであり，すべて新しい柱穴掘形のほうが深くなる。柱穴の平面形は，重複により判然としない柱穴掘形もあるが，おおむね円形を基調としている。規模は直径30～50cmの間であろう。検出面から底面までの深さは，30～64cmである。柱痕は確認できなかった。掘形内堆積土は黒褐色土１層である。

本遺構は確認できた平面形から，３間×１間の南北棟の建物跡である。柱痕の抜き取り痕が確認でき，建て替えを行った建物跡であることが分かる。新旧の柱穴の堆積土に差異が認められないことから，古い柱を抜き取った後，すぐに新しい建物を建てたと考えられる。近接する30号建物跡とは軸線方向が平行する点から，同時併存の可能性を考えている。出土遺物はなく明確にはできないが，柱間距離から近世頃の可能性が高いと考えている。

30号建物跡　ＳＢ30（図６，写真４）

本遺構は調査区南側，Ｃ34グリッドに位置している。検出面はＬⅢ上面である。建物跡の中央を貫くように請戸川農水給水管が埋設してあり，調査時点において使用していたため，そのまま残して調査を行った。直接重複する小穴はない。すぐ北には30号建物跡がある。

確認できた時点において本遺構は東西２間，南北２間の方形の建物跡である。規模は東西3.2m，南北3.15mを測り，平面積は10.0㎡を測る。

本建物跡を構成すると考えられる柱穴を８個確認した。北東隅の柱穴をＰ１とし，時計回りにＰ８まで呼称した。東辺は，Ｐ１～３で構成され，総長は3.15mである。掘形底面の標高は，51.80～52.00mである。南辺は，Ｐ３～５で構成され，総長は3.0mである。掘形底面の標高は，51.95～52.02mである。西辺はＰ５～７で構成され，総長は2.7mを測る。掘形底面の標高は，51.95～52.17mである。北辺はＰ１・７・８で構成され，総長は3.2mを測る。掘形底面の標高は，51.88～52.10mである。Ｐ６・８は他の柱穴に比べて，深さが浅い。

柱穴の平面形は，円形を基調としている。全体の柱穴の平面が不明な小穴もあるが，規模は直径17～24cmの間である。検出面から底面までの深さは，13～42cmである。柱痕は確認できなかった。掘形内堆積土は暗褐色土１層である。

本遺構は確認できた平面形から，２間×２間の建物跡である。近接する29号建物跡とは軸線方向が平行する点から，同時併存の可能性を考えている。柱跡の平面形は小さく，また建物跡も小規模

であり，簡素な倉庫などとして使用されていたと推定できる。出土遺物はなく明確にはできないが，柱間距離から近世頃の可能性が高いと考えている。

12号柵列跡　ＳＡ12（図７）

本遺構は調査区中央やや西よりのＣ30グリッドに位置する。検出面はＬⅥａ上面である。今回調査した柱穴では，重複関係は認められない。

南北に並ぶ２個の柱穴からなる柵列である。北にある柱穴をＰ１，南にある柱穴をＰ２と呼称した。いずれも柱痕が認められ，柱痕の芯々間の距離は2.55ｍを測る。掘形底面の標高は，51.75ｍと51.77ｍである。柱穴の平面形は，いずれも円形を基調としている。規模は直径30cmを測る。検出面から底面までの深さは，75cmである。２個とも柱痕は確認できた。柱痕は直径15cmの円形で，掘形底面まで達している。堆積土は２層に分層した。ℓ１は柱痕である。ℓ２は褐色粘土で，掘形埋土である。

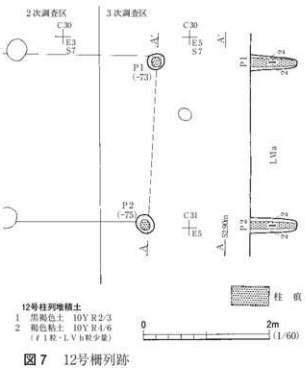


図７　12号柵列跡

本遺構は柵列として報告したが，建物跡の可能性が高い遺構である。調査区の東には類似する小穴が認められなかったことから，調査区の西に展開する遺構であると考えている。掘形底面まで深く，柱痕をもつ点が特徴的である。出土遺物がなく時期は不明であるが，柱穴掘形の平面形が小さく深いことから，近世初頭の遺構であると考えている。

第３節　土坑・井戸跡

今回の３次調査で新たに確認できた土坑は32・33号土坑の2基である。１・２次調査と合わせ，計33基になる。詳細な時期や性格は，出土遺物がなく，遺構の一部が確認できなかったことなどから不明である。また，３次調査で新たに井戸跡１基を確認した。１・２次調査と合わせ，計８基になる。２次調査において部分的に確認して調査し，３次調査においてその続きが認められた25・27土坑についても，２次調査の報告と合わせ，再報告をする。

25号土坑　ＳＫ25（図８，写真５）

本遺構は調査区中央付近やや西よりのＣ・Ｄ29グリッドに位置する。検出面はＬⅥａ上面である。本遺構南西底面に８号井戸跡が認められる。本遺構と同時期に機能していたと推測している。近接

して，北には28号土坑が認められる。

平面形は南西端が外側へ張り出す不整な楕円形で，西端は一部確認できなかった。２次調査とあわせて確認できた規模は，長軸3.4m，短軸2.2mを測る。張り出している箇所では3.2mを測る。底面は丸みを帯びて，一定でない。壁面は丸みを加えながら，緩やかに立ち上がる。検出面から底面までの深さは，最深部で40cmである。遺構内堆積土は４層に分けた。ℓ１～３は自然堆積，ℓ４は人為堆積の可能性を考えている。本遺構からの出土遺物はない。２次調査において本遺構に伴わない土錘が１点出土しているのみである。

本遺構は８号井戸跡に伴う付属施設である。大きく掘り込んだ足場状の施設であったと考えられる。類似する遺構として，沢東Ｂ遺跡内の２・３号井戸跡に伴う７号土坑との関係性が上げられる。左記の遺構は館跡内の付属施設の可能性が高いと考えられ，中世～近世代の遺構と考えられている。本遺構についても平面形が類似する点や井戸と土坑との関連性がある点から，同様の年代が与えられると考えている。

27号土坑　ＳＫ27（図８，写真５）

本遺構は調査区中央付近やや西よりのD30・31グリッドに位置する。検出面はＬⅥａ上面である。２次調査において調査した本遺構の西端を確認した。

平面形は北西－南東に長軸をもつ楕円形である。規模は２次調査と合わせて，開口部長軸3.32m，短軸1.74mを測る。底面長軸２m，短軸0.85mである。壁面は底面から緩やかに立ち上がり，断面形は皿状になる。底面はやや凹凸があるがほぼ平坦である。検出面から底面までの深さは最深部で，22cmである。

遺構内堆積土は２層に分けられる。黒褐色土と黄褐色土の混土であり，２次調査ではいずれも人為堆積土と判断している。

出土遺物は鉄滓が３点出土した。２次調査においても炉壁が１点出土している。流れ込みによる可能性も高いが，本遺構の近くに製鉄関連遺構があった可能性も考えられる。

本遺構は時期・性格等は不明である。近接する他遺構との関連から，中世から近世初頭頃と考えられる。

32号土坑　ＳＫ32（図８，写真５）

本遺構は調査区中央付近やや西よりのC34グリッドに位置する。検出面はＬⅤｂ上面であるが，土層断面の観察では，ＬⅠ直下より掘り込まれている。西半分は請戸川農水給水管があり，確認できなかった。平面的には29号建物跡のほぼ中央に位置する。直接的な重複関係はない。すぐ南に33号土坑が位置する。

平面形は円形を基調とすると考えられる。規模は直径66cmを測る。検出面から底面までの深さは，30cmである。壁面は底面から緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦に造られている。堆積土は１層

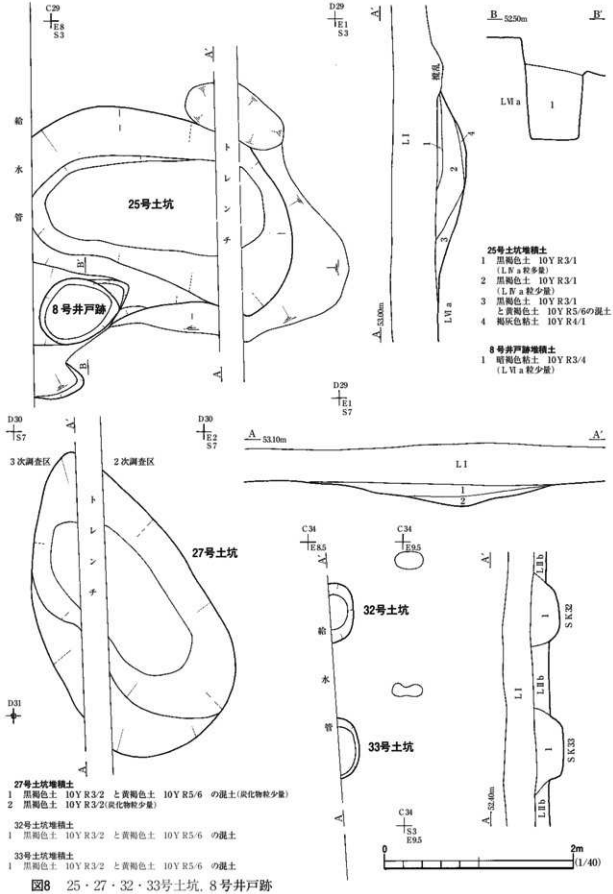


図8　25・27・32・33号土坑，8号井戸跡

のみ確認できた。黒褐色土と黄褐色土との混土であることから，人為堆積土と考えている。出土遺物は認められなかった。

本遺構の時期・性格等は不明である。29号建物跡の中央に位置していることから，建物跡の付属施設である可能性も考慮できる。遺構内堆積土が33号土坑と同一であることから，同時に機能していた可能性が高い。他遺構との関連から，中世から近世初頭頃と考えられる。

33号土坑　ＳＫ33（図８，写真５）

本遺構は調査区中央付近やや西よりのＣ34グリッドに位置する。検出面はＬＶｂ上面であるが，土層断面の観察では，ＬＩ直下より掘り込まれている。西半分は請戸川農水給水管があり，確認できなかった。平面的には29号建物跡のほぼ中央に位置する。直接的な重複関係はない。すぐ北に32号土坑が位置する。

平面形は円形を基調とすると考えられる。規模は直径55cmを測る。検出面から底面までの深さは，28cmである。壁面は底面から緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦に造られている。堆積土は１層のみ確認できた。黒褐色土と黄褐色土との混土であることから，人為堆積土と考えている。出土遺物は認められなかった。

本遺構の時期・性格等は不明である。29号建物跡の中央に位置していることから，建物跡との関連も考慮できる。遺構内堆積土が32号土坑と同一であることから，同時に機能していた可能性が高い。他遺構との関連から，中世から近世初頭頃と考えられる。

８号井戸跡　ＳＥ８（図８，写真５）

本遺構は調査区中央付近やや西よりのＣ29グリッドに位置する。本遺構と同時期に機能していたと推測している25号土坑の底面から検出した。近接して，北には28号土坑が認められる。

平面形は東西がわずかに長い楕円形である。規模は長軸84cm，短軸68cmである。検出面から底面までの深さは，80cmを測る。底面は平坦で，ＬⅥａを掘り込んで造られている。壁面は垂直に立ち上がる。掘削中から湧水し，作業は困難した。木または竹による井戸枠や礫による石組などは出土していない。

遺構内堆積土は暗褐色粘土１層である。湧水により，人為堆積か自然堆積か判断できなかった。本遺構からの出土遺物はない。

本遺構は楕円形状の素掘りの井戸跡である。底面が近くなるにつれて湧水し，調査に困難をきたした。25号土坑は本井戸跡に伴う足場状施設であったと考えられる。類似する遺構として，沢東Ｂ遺跡内の２・３号井戸跡に伴う７号土坑との関係性が上げられる。２・３号井戸跡・７号土坑は中世から近世代の遺構と考えられている。本遺構についても平面形が類似する点や井戸と土坑との関連性から，同様の年代が与えられる。

第４節　溝　　跡

今回の調査で新しく検出できた溝跡はなかった。調査した溝跡は，すべて２次調査からの連続する溝跡である。今回の調査区で確認した溝跡は10・16・17・19・27・31号溝跡の一部である。大部分は２次調査において検出し，報告されている。３次調査において検出できた溝跡についてのみ，簡便に報告する。

10号溝跡　ＳＤ10（図４・９，写真６）

本遺構は調査区南側のＡ・Ｂ37，Ｂ・Ｃ・Ｅ・Ｆ36，Ｃ～Ｆ35，Ｄ34グリッドに位置し，調査区を横断するように認められた。検出面はＬⅤｂ上面である。西側へ向かって蛇行しながらのびる旧河川跡である。17・24・26号溝跡，６号井戸跡と重複し本遺構が古い。19号溝跡と重複し，本遺構が新しい。

本調査区において確認した溝幅は約９ｍを測る。検出面から底面までの深さは１ｍである。底面の大半は平坦であるが，一部ＬⅥａを抉るように砂礫が混入している箇所が不規則に見られた。北壁は比較的急に立ち上がり，南壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は２次調査区においては９層確認できたが，３次調査においてはℓ１を除く８層のみ確認できた。

遺物はℓ５より縄文土器片が12点出土した。器表面が摩滅している資料や，小破片ばかりで，図示できなかった。縄文時代中期末葉の土器片である。本遺構の検出面上には小穴が確認できることから，中世頃までには埋没していたことが分かる。

16号溝跡　ＳＤ16（図３・９，写真６）

本遺構は調査区中央，Ｅ20～26，Ｆ25～30，Ｇ32・33グリッドに位置する。ＬⅥａ上面で検出した。調査区を南北に走る溝跡で，３次調査の北端の町道部分の調査区から検出した。確認した溝幅は60cm，検出面から底面までの深さ29cmを測る。底面は平坦である。壁面は垂直に近く立ち上がる。２次調査において堆積土は２層確認したが，３次調査においてはℓ１のみ確認できた。自然堆積である。中世から近世の区画溝である。

17号溝跡　ＳＤ17（図３・４・９，写真６）

本遺構は調査区南西側，Ｂ30・31，Ｃ30～32・35～38，Ｄ・Ｅ30グリッドに位置する。ＬⅥａ上面で検出された。10・31号溝跡と重複し，本遺構が新しい。平面形がＬ字になる区画溝で，今回の調査では２次調査区間の北側の一部と南端を確認した。確認した溝幅は97cm，検出面から底面までの深さは18cmを測る。底面は平坦である。壁面は緩やかに立ち上がり，断面形は逆台形となる。２次調査において堆積土は２層確認したが，３次調査においてはℓ１のみ確認できた。

出土遺物はなく，時期は特定できない。Ｌ字に屈曲する形から，中世から近世の区画溝であると考えている。

19号溝跡　ＳＤ19（図４・９，写真６）

本遺構は調査区南側Ｄ35・36，Ｅ36・37，Ｆ・Ｇ37・38グリッドに位置する。ＬⅡｂおよびＬⅢ上面で検出された。18号建物跡・10号溝跡と重複し，本遺構が古い。北西に向かって蛇行して走る旧河道跡である。確認した溝幅は34cm，検出面から底面までの深さは47cmを測る。底面はわずかに窪みが認められるが，ほぼ平坦である。壁面は緩やかに立ち上がる。２次調査において堆積土は５層確認したが，３次調査においてはℓ３～５のみ確認できた。すべて自然堆積と考えている。

堆積土中から縄文土器片３点が出土した。すべて器表面は摩滅している。縄文時代中期末葉頃の土器片である。縄文時代頃の自然流路であり，土層断面の観察より，10号溝跡よりも早く埋没していることが確認できた。

27号溝跡　ＳＤ27（図３・９）

本遺構は調査区中央やや西よりのＣ・Ｄ29・30グリッドに位置する。ＬⅥａ上面で検出された。10・31号溝跡と重複し，本遺構が新しい。東西方向に直線的にのびる区画溝で，今回の調査では溝跡の西半分を確認した。西端は清戸川農水給水管があり不明であるが，給水管の西側には認められない。調査区で確認した溝幅は38cm，検出面から底面までの深さは13cmを測る。確認できた溝跡全長は，7.7mである。底面は平坦である。壁面は緩やかに立ち上がり，断面形は逆台形となる。堆積土はℓ１のみ確認できた。

２次調査において，堆積土から切断された煙管の吸口１点が出土している。出土遺物から近世頃の区画溝であると考えている。

31号溝跡　ＳＤ31（図３・９，写真５）

本遺構は調査区中央やや西よりのＣ28，Ｄ29～31，Ｅ31・32，Ｆ32グリッドに位置する。ＬⅥａ上面で検出された。24・29号土坑，17・27号溝跡と重複し，いずれよりも本遺構が古い。平面形がＬ字になる区画溝で，今回の調査では北西部分を確認した。さらに北西の調査区外にのびる。調査区で確認した溝幅は110cm，検出面から底面までの深さは43cmを測る。底面は平坦である。壁面は急に立ち上がり，断面形は逆台形となる。堆積土はℓ１のみ確認できた。自然堆積である。

平面形がＬ字に屈曲することや壁面がよく形成されていることなどから区画溝と考えられる。２次調査において縄文土器片，石器が出土しているが，３次調査では認められなかった。時期を決定できる明確な遺物は出土していないが，重複する全ての遺構よりも古いことから，中世頃の溝跡である可能性が高い。

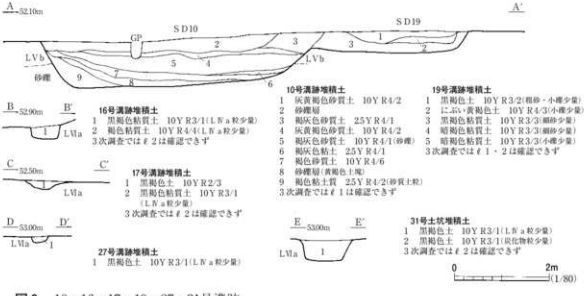


図９　10・16・17・19・27・31号溝跡

第５節　小　　穴

グリッドピット　ＧＰ（図３・４）

今回の調査では98個の小穴を確認した。検出面はＣ・Ｄ33～36ではＬⅡｂ上面，それ以外はＬⅥａ上面で検出している。分布状況を見るとＣ・Ｄ33～36付近に集中して認められた。周囲には建物跡も検出し，それに関連する小穴であると考えられる。また，３次調査区北端の町道部分であるＥ・Ｆ22グリッドにも集中的に認められたが，今年度の調査範囲が狭く，建物跡や柵列と判断するには至らなかった。

小穴の平面形は円形や楕円形を基調とするものがほとんどであるが，Ｄ36，Ｅ・Ｆ22グリッドでは平面形が方形の小穴も散見された。径12～48cm，検出面からの深さ12～66cmを測る。堆積土は黒色土や黒褐色土１層のみが大部分である。

小穴の堆積土中からの出土遺物はなく特定できないが，多くは中世から近世の範疇に納まると考えている。　（三　浦）

第３章　ま　と　め

３次調査は800㎡の小範囲であり，新たに検出した遺構は，２棟の建物跡，２基の土坑，１基の井戸跡，柵列１列，小穴98個である。いずれも中世から近世の遺構と考えられ，縄文時代の遺構は検出できなかった。縄文時代の出土遺物も溝内堆積土から出土した縄文土器片のみであり，縄文時代の生活の痕跡は本調査においては非常に希薄であった。

今回の３次調査により，常磐自動車道建設に関わる発掘調査は終了した。平成15年度に１次調査，平成18年度に２次調査が行われた。調査区は基盤整備や圃場整備により，改変が著しく遺存状況が悪い遺構が見受けられたが，縄文時代，中世から近世の遺構・遺物が認められた。以下３次にわたる調査成果についてまとめてみる。

本遺跡で最初に人間の痕跡が認められるのは縄文時代中期末葉である。この時代には立野の台地上には自然の流路が縦横に存在し，その流路沿いに小規模な集落が営まれていたようである。２軒の複式炉を持つ竪穴住居跡を検出している。自然流路である９・10・19号溝跡から，本時期の土器片が出土している。本遺跡から500m南西には縄文時代中期末葉～後期にかけての順礼堂遺跡が位置することから，本遺跡が縄文時代中期末葉期の集落の東端である可能性が考えられる。

それ以後遺構・遺物は認められず，13世紀代に入るとわずかであるが遺構・遺物認められるようになる。14世紀代には豪農層と考えられる屋敷跡が造られ始める。15世紀代には堀が巡る館が構築され，遺物の出土量が前時期に比べ増加する。該期の遺構は，小領主の館跡であったと想定される。

小領主とは立野氏と想定され，岡田安房守の三男が立野氏を称する16世紀中頃から，本館跡に移り住んだと考えられる。２次調査では，地籍図や古地図において館跡の位置が，出土遺物から時期が合致するという所見が得られた。発掘調査においては，門跡や柵列などの付属施設を有する土橋状遺構が構築するなど，堀を改築し防御性能を高め，周辺にも建物跡が造られて集落として発展する状況が看取できた。立野氏が本地で居住した時期が，本遺跡における最盛期である。立野氏の居住はおよそ１世紀続いたと考えられ，寛文八年（1688）に立野氏の断絶が『奥相誌』に記されている。立野氏の断絶とともに本館も廃棄されたと考えられる。発掘調査の結果からも17世紀の中頃には，本遺跡の遺構・遺物は希薄となる。その後現代に至るまで田畑となっている。　（三　浦）

参考文献

浪江町史編纂委員会編　1974　『浪江町史』
福島県教育委員会　2003　『福島県内遺跡分布調査報告９』
福島県教育委員会　2006　『福島県内遺跡分布調査報告12』
福島県教育委員会　2005　『常磐自動車道遺跡調査報告39』沢東Ｂ遺跡
福島県教育委員会　2005　『常磐自動車道遺跡調査報告49』沢東Ｂ遺跡（２次調査）

第５編　古堤（ふるつつみ）遺跡

遺跡記号　ＮＥ－ＨＴ
所在地　浪江町大字立野字古堤
時代・種類　縄文時代－散布地
調査期間　平成20年10月６日～11月14日
調査員　佐藤　啓・水野一夫

第１章　周辺地形と調査経過

第１節　遺跡の位置と周辺地形

古堤遺跡は，浪江町大字立野字古堤に所在する。遺跡はＪＲ常磐線浪江駅から北西へ約5.5㎞の地点に位置し，海岸線からは約８㎞内陸に入っている。遺跡の南東300ｍに「古堤溜池」が所在し，西方約700ｍに県道原町・浪江線が通っている。

遺跡周辺の地形は，阿武隈高地東縁の段丘地形が，東流する河川とその支流によって開析された谷に挟まれた形で海岸に向かって高度を下げながらのびる浜通り地方特有な地形である。

地質的には，遺跡は仙台層群を基盤とする丘陵部とそれを開析した谷底部に立地している。仙台層群は，新生代第三紀鮮新世に形成された凝灰岩・シルトからなる層群で，双葉断層の東側に分布し，浪江町周辺に所在する段丘の基盤層になっている。

遺跡は請戸川支流の小河川に開析された谷地形の最奥部に位置する。標高は76～66ｍあり，丘陵部で76～70ｍ，谷部で70～66ｍである。丘陵部と水田部との比高差はおおむね４ｍ程度を測る。遺跡の現況は，丘陵部が山林で，丘陵部はかつて畑地にも利用されていた。

今回の調査は，遺跡東端の丘陵平坦面と肩部にかけての1,000㎡を対象として実施した。

第２節　調 査 経 過

古堤遺跡は，常磐自動車道の建設に伴い平成８年度に実施された表面調査により，遺跡推定地に登録された。平成18年度に路線内を対象として行われた試掘調査により，遺構・遺物が発見されたことから保存が確定し，遺跡名が付されている。

発掘調査は，平成20年10月６日に開始し，11月14日に終了した。のべ調査日数は30日である。調査区までの進入路がなかったため，工事が調査区前まで進展する10月以降に発掘調査を実施することで協議されていた。

当初は，調査員１名で駐車場整備，仮設トイレの設置・器材搬入などの調査準備を行い，10月７日から重機による表土除去を開始した。15日には調査員１名を増員し，調査員２名体制で調査を進め，作業員14名を雇用して，人力による調査を開始している。

10月21日には測量基準杭を打設し，遺構精査および記録作業が本格化した。遺構は土坑12基が検出された。土坑は調査区の南半に散在しており，多くは木炭焼成土坑と落し穴状土坑であった。また，調査区北半には畝状の攪乱が多数存在した。攪乱の掘り起こしと落し穴状土坑の精査・記録にやや手間取ったものの，11月12日には作業員による作業が終了し，13日に全景写真撮影と地形図を作成し，14日にトイレ汲み取りおよび仮設トイレの撤去，そして器材運搬を行って現地作業を終了

した。21日には東日本高速道路株式会社東北支社いわき工事事務所・福島県教育庁文化財課・当事業団遺跡調査部の三者による終了確認を行った。　（佐　藤）

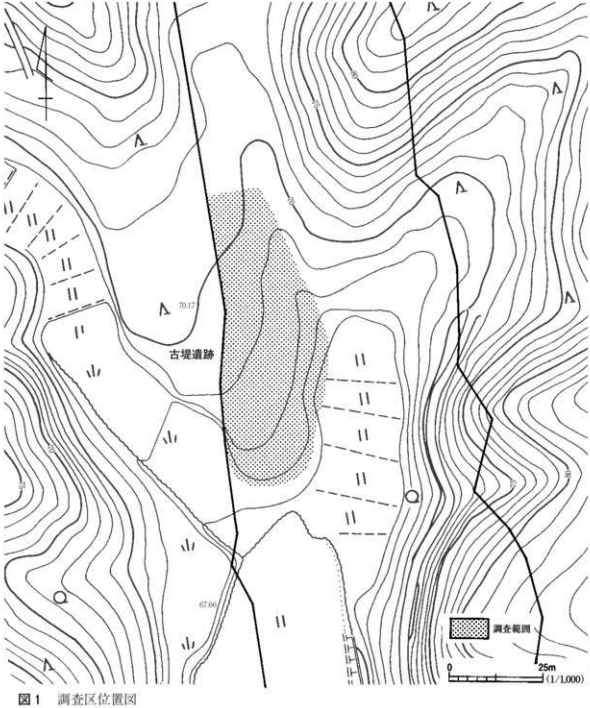


図1　調査区位置図

第3節　調査の方法

古堤遺跡の調査にあたっては，現場周辺に打設された工事の範囲を示す幅杭と，数カ所に基準杭があり，その座標および標高値情報を利用して，発掘範囲とグリッドの設定をした。

グリッドはX：169,340・Y：98,360を原点として，一辺を10mとした正方形を1グリッドとしている。グリッドの表記方法はアルファベットと算用数字を組み合わせたもので，西から東にアルファベット順，北から南へ算用数字順に移行する。これらのグリッドは遺構位置表示や遺物の取り上げに使用し，必要に応じてグリッド内に1m方眼を設定して遺構の平面図を作成した。調査区の標高は東日本高速道路株式会社が設置した標高基準点を原点とした。

調査区内の土層については，基本土層はアルファベット大文字「L」とローマ数字を用いた。遺構内堆積土については，アルファベット小文字筆記体「ℓ」とアラビア数字を用いて表記した。遺構内から出土した遺物については，土層観察用帯で観察した遺構内堆積土を基準に取り上げた。遺構外出土遺物については，出土位置であるグリッドと出土層位を基準に取り上げた。土色に関しては，日本色研事業株式会社の新版標準土色帖に準拠した。

各種遺構の掘り込みは，表土を重機で除去し，それ以下の土層については人力により堆積層ごとに掘り下げた。遺構の番号は，各遺構において通し番号を付与した。写真撮影および実測用に土層観察帯を設定して行った。

調査の記録は原則として縮尺1/20とし，各図に明記している。地形図は縮尺1/200，遺物の実測は等倍で作図した。写真は35㎜判のモノクローム・カラーリバーサルフィルムの両方を用いて撮影した。また，編集・仮割付およびメモ写真として，デジタルカメラでの撮影も行った。

発掘調査で得られた出土遺物および諸記録は，財団法人福島県文化振興事業団遺跡調査部において，屋内整理作業を実施した。出土遺物と調査記録は，福島県文化財センター白河館に収蔵・保管する予定である。　（水　野）

第２章　遺構と遺物

第１節　遺構の分布と基本土層

遺構と遺物の概要（図２）

古堤遺跡から，土坑12基が検出されている。これらの土坑は，落し穴状土坑と木炭焼成に関係する土坑とに区分され，前者５基，後者６基が該当する。その分布は，落し穴状土坑が南半部の丘陵肩部近く，木炭焼成に関係する土坑が調査区の中央部に集中する傾向があり，まとまりをもって分布することが分かる。調査区北部から検出された遺構はない。出土遺物は，縄文土器10点・石器片18点・金属製品１点の計29点を数えるのみで，極めて少ない。遺構内からの出土もあるが，遺構の埋没過程で流入したものとみられ，直接遺構に伴う資料ではない。　（佐　藤）

基本土層（図２，写真３）

平成18年度に実施した，試掘調査により設定されているＬⅠ～ＬⅢまでの記録と，対応を確認しながら調査した。試掘時に設定されたＬⅡは，本調査区より広範囲に実施した試掘トレンチのうち，休耕田内にのみ確認されている。本調査区は休耕田部分を範囲に含まないため，基本的に違う土層をＬⅡとした。

各層の概要は，以下のとおりである。

ＬⅠ　：にぶい黄褐色（10ＹＲ3/4）を呈する表土である。砂と腐食質土の混合土である。調査区内は細身の木が並ぶ新しい植林がなされており，下位の土層が表土化する要因の一つであったと考えられる。

ＬⅡ　：黒褐色（10ＹＲ2/3）を呈する腐食質土である。局所的に見られる土壌で，畑の畝に沿う溝の残土に類似すると考えられる。試掘時の休耕田内土とは異なる土層を指す。畑地として利用されていた耕作土である。極少量，遺物を含んでいる。

ＬⅢａ：褐色（10ＹＲ4/6）を呈する，細かい砂を主体とする層である。現場における遺構・遺物検出面である。

ＬⅢｂ：にぶい黄褐色（10ＹＲ5/4）を呈する砂主体層である。ＬⅢａよりやや浅い色調を呈する。

ＬⅢｃ：にぶい黄褐色（10ＹＲ5/3）を呈する砂主体層である。ＬⅢｂに比し変色が均一化している。

ＬⅢ以下，土坑の壁面では粘土質の灰・黄み・青みのグライ化した層が確認できた。深い土坑の覆土上位に，腐食質の土壌が入るものが多いが，多量ではなく，砂混じりである。　（水　野）

第２節　土　　坑

第１節で述べたように，本遺跡で検出された土坑は12基である。その性格は，１・６・９～11号

土坑が落し穴，２～５・７・８号土坑が木炭焼成に関する土坑で，ある程度まとまった分布が認められる。また，出土した木炭について放射性炭素年代測定を行った結果，落し穴状土坑が縄文時代，木炭焼成土坑が古代の所産と推定されている。

１号土坑　ＳＫ１（図３，写真３）

本遺構は平成18年度の試掘調査で検出された土坑で，調査区南西部のＣ９グリッドに位置し，丘陵肩部に立地している。遺構検出面はＬⅢａである。他遺構との重複はないが，北方および東方約10mの範囲には類似する土坑が近接している。

本遺構は，平面形が隅丸長方形を呈し，検出面では崩落により，形状が乱れている。規模は長辺141cm，短辺81cmであり，遺構検出面からの深さは126cmを測る。底面は白色粘土層まで達し，全体的に南東方向にわずかに傾斜をもつ。周壁の立ち上がりは垂直に近く，開口部の傾斜は緩い。

遺構内堆積土は，８層に分けられた。いずれも明るい色調の砂質土を基調とし，黒色土はみられない。ℓ１～４は主に西方から流入したことが読み取れる。ℓ６は中央部深くに堆積している層で，本遺跡の類似する土坑に特徴的な土層である。ℓ７・８は，周壁崩落に関する土層と理解できる。

遺物は，縄文土器８点を数え，層位的にはすべてℓ６から出土している。いずれも小片で，器面の摩滅が著しく，文様や時期は不明である。

本遺構は，その形状から落し穴状土坑とみられ，出土土器から縄文時代の所産と考

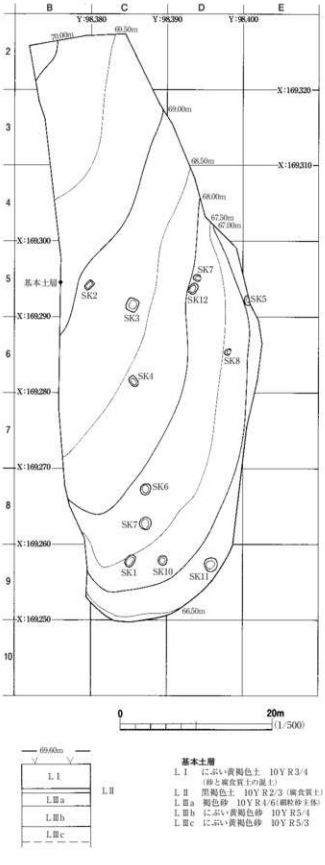


図２　遺構配置図・基本土層

えられる。逆茂木はない。周辺には落し穴状土坑が集中しているので，それらとともに機能していたと推定される。（佐　藤）

2号土坑　SK2（図3，写真3）

本遺構は，調査区中央部のB5・C5グリッドにまたがって位置し，丘陵平坦面に立地している。遺構検出面は，表土直下のLⅢ上面である。他遺構との重複はない。

本遺構は，平面形が比較的整った隅丸長方形を呈し，規模は長辺122cm，短辺78cm，遺構検出面からの深さ10～16cmを測る，浅い土坑である。底面は凹凸があり水平でなく，周壁の立ち上がりも地点によって異っており，整っていない。周壁北部で焼土化範囲が認められている。

遺構内堆積土は，焼土や炭化物を多く含む層で，ℓ1～6に分けられた。ℓ1～3が流入土，ℓ5・6は崩落土とみられる。本遺構からは，木炭を除き遺物は出土していない。

本遺構は，標準的な大きさの木炭焼成土坑である。出土した炭化物の放射性炭素年代測定を実施し，1,294±32yrBPの結果を得ていることから，古代の所産と考えられる。（佐　藤）

3号土坑　SK3（図3，写真3）

本遺構は，調査区中央のC5グリッドに位置し，丘陵平坦面に立地する。遺構検出面はLⅢaで，重複する遺構はない。

本遺構は，南北がわずかに長い隅丸方形を呈し，規模は上端で長辺191cm，短辺167cm，検出面からの深さ39cmを測る，比較的大型の土坑である。壁面や底面が焼土化した，いわゆる木炭焼成土坑である。遺構の主軸が若干東に振れているが，これは周辺の等高線におおむね平行している。

特筆すべきは，本遺構に複数回使用の痕跡が確認された点である。つまり掘形をそのまま利用した古段階と，底面を底上げした新段階の2時期が区別されたことになる。掘形を利用した古段階は，底面の規模が長辺159cm，短辺136cmあり，底面と壁面の広い範囲で焼土化範囲が確認されている。新段階は，ℓ7・8の立ち上がりを周壁とした段階で，ℓ7～10を除去してℓ11・12など古段階の炭化物層が確認されている。底面の規模は長辺117cm，短辺107cmと，古段階より小さい。ℓ7～10は焼土やLⅢを主体とすることから，周壁の崩落土に由来する土層と判断される。しかしℓ7・8は，その上面が極めて硬くしまっており，部分的に青灰色に熱変化した部分も認められた。したがって，崩落土を底面および壁面として火が焚かれたのは間違いない。再使用されるまでにℓ7～10が堆積する期間があったことになり，両段階に若干の時間差が生じたことが分かる。

出土遺物は，石器砕片7点が出土したのみである。層位としてはℓ2からの出土であり，周辺から流入したものと考えられる。被熱によりはぜている土器片も認められた。

本遺構は，今回検出された木炭焼成土坑のなかで最も大きく，これまで浜通り地方で検出された同種の遺構と比較しても大型の部類である。古段階の底面から採取した炭化物2点を用いた放射性炭素年代測定の結果，1,254±31yrBPと1,117±33yrBPの年代が得られたことから，本遺構は古代の

所産と考えられる。また，底面を底上げして複数回使用した痕跡が確認されるなど，興味深い調査所見が得られている。　（佐　藤）

４号土坑　ＳＫ４（図３，写真４）

本遺構は，調査区中央のＣ６グリッドに位置し，ＬⅢａ上面で検出された。中央部から検出された土坑群のなかで最も南に位置することになる。

平面形は比較的整った隅丸長方形で，規模は長辺123cm，短辺90cm，遺構検出面からの深さ19cmを測る。底面は平坦でなく，南西方向に緩やかに傾斜する。周壁の立ち上がりは東辺と南辺で急峻であるため，斜面上方で崩落が顕著であったことが分かる。また底面の中央部と周壁に，焼土化範囲が観察されている。遺構内堆積土は４層あり，ℓ１・２が流入土，ℓ３が崩落土，ℓ４が使用時の堆積土と考えられる。出土遺物はない。

本遺構は，各種の特徴から木炭焼成土坑と考えられる。浜通り地方で一般的にみられる形態である。近接する木炭焼成土坑と同時期である古代の所産とみられる。　（佐　藤）

５号土坑　ＳＫ５（図３，写真４）

本遺構は，調査区中央東端のＤ５グリッドに位置し，南東へ開く谷に面した丘陵肩部に立地している。遺構検出面はＬⅢ上面である。他遺構との重複はない。

本遺構は東半が斜面の崩落のため遺存しておらず，南辺と西辺の一部が検出されたのみの土坑で，その遺存状態は悪い。遺存部から推定すれば，平面形は隅丸方形を基調とするようで，規模は最も残りの良い部分で74cmが確認されている。遺構検出面からの深さは15cmである。周壁は南辺と西辺の一部のみの検出で，特に西辺では壁面上部が堆積土に乗るような状態で倒れていた。これは表土除去時に，重機の加重によって壁面が押し倒されたためである。したがって，本来壁高は30cm程度が遺存していたことになる。倒れた壁面には焼土化範囲が確認されている。

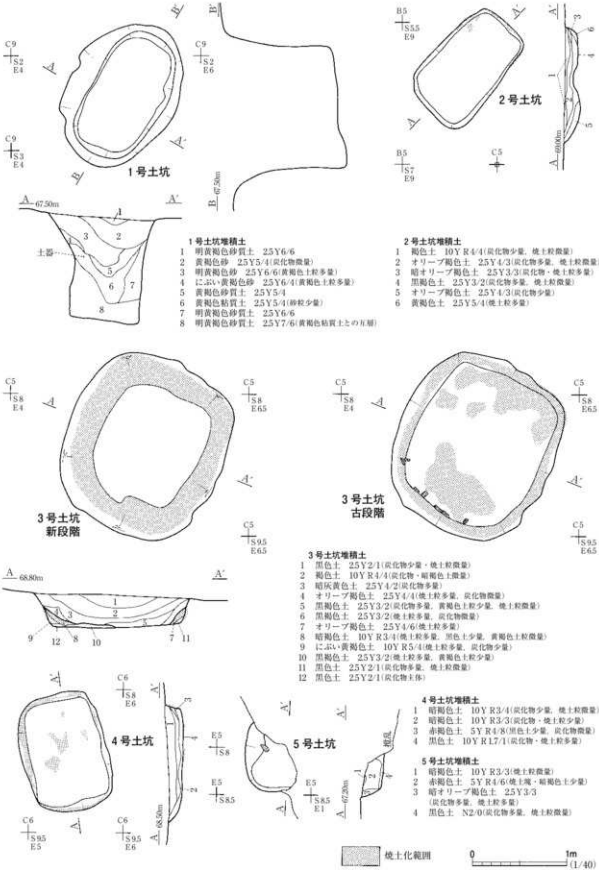
遺構内堆積土は４層に分けられ，ℓ１・２が崩落土ないし流入土，ℓ３・４が使用時堆積土の残土と思われる。なお，木炭を除き遺物は出土していない。

本遺構は，その特徴から木炭焼成土坑とみられるが，遺存状態が悪く，詳細は不明である。出土した木炭２点について放射性炭素年代測定を実施しており，1,315yrBPと1,328yrBPの結果を得ている。分析結果もふまえ，本遺構は古代の所産と考えられる。　（佐　藤）

６号土坑　ＳＫ６（図４，写真４）

本遺構は，調査区の南部のＣ８グリッドに位置する。重複する遺構はない。南へ５mに９号土坑が，南へ10mに10号土坑が近接する。いずれも形状より，落し穴状土坑であると考えている。

本遺構は長軸155cm，短軸135cm，残存深さ114cmの楕円形を推定する形状であるが，底面は円形に近い。壁面は底面から急に立ち上がり，検出面では崩落によりわずかに緩い傾斜で広がる。形態



1号土坑堆積土
1　明黄褐色砂質土　2.5Y6/6
2　黄褐色砂　2.5Y5/4(炭化物微量)
3　明黄褐色砂　2.5Y6/6(黄褐色土粒多量)
4　にぶい黄褐色砂　2.5Y6/4(黄褐色土粒多量)
5　黄褐色砂質土　2.5Y5/4
6　黄褐色粘質土　2.5Y5/4(砂粒少量)
7　明黄褐色砂質土　2.5Y6/6
8　明黄褐色砂質土　2.5Y7/6(黄褐色粘質土との互層)

2号土坑堆積土
1　褐色土　10Y R4/4(炭化物少量、焼土粒微量)
2　オリーブ褐色土　2.5Y4/3(炭化物多量、焼土粒微量)
3　暗オリーブ褐色土　2.5Y3/3(炭化物・焼土粒多量)
4　黒褐色土　2.5Y3/2(炭化物多量、焼土粒微量)
5　オリーブ褐色土　2.5Y4/3(炭化物少量)
6　黄褐色土　2.5Y5/4(焼土粒多量)

3号土坑堆積土
1　黒色土　2.5Y2/1(炭化物少量・焼土粒微量)
2　褐色土　10Y R4/4(炭化物・暗褐色土微量)
3　暗灰黄色土　2.5Y4/2(炭化物多量)
4　オリーブ褐色土　2.5Y4/4(焼土粒多量、炭化物微量)
5　黒褐色土　2.5Y3/2(炭化物多量、黄褐色土粒少量、焼土粒微量)
6　黒褐色土　2.5Y3/2(焼土粒多量、炭化物微量)
7　オリーブ褐色土　2.5Y4/6(焼土粒多量)
8　暗褐色土　10Y R3/4(焼土粒多量、黒色土少量、黄褐色土粒微量)
9　にぶい黄褐色土　10Y R5/4(焼土粒多量、炭化物少量)
10　黒褐色土　2.5Y3/2(焼土粒多量、黄褐色土粒少量)
11　黒色土　2.5Y2/1(炭化物多量、焼土粒微量)
12　黒色土　2.5Y2/1(炭化物主体)

4号土坑堆積土
1　暗褐色土　10Y R3/4(炭化物少量、焼土粒微量)
2　暗褐色土　10Y R3/3(炭化物・焼土粒少量)
3　赤褐色土　5Y R4/8(黒色土少量、炭化物微量)
4　黒色土　10Y R1.7/1(炭化物・焼土粒多量)

5号土坑堆積土
1　暗褐色土　10Y R3/3(焼土粒微量)
2　赤褐色土　5Y R4/6(焼土塊・暗褐色土少量)
3　暗オリーブ褐色土　2.5Y3/3
(炭化物多量、焼土粒多量)
4　黒色土　N2/0(炭化物多量、焼土粒微量)

図3　1～5号土坑

より落し穴状土坑である可能性が高いが，底面には逆茂木などの痕跡は認められなかった。

遺構内堆積土は11層に分けられたが，すべて自然堆積である。ℓ１～４・７は黒色土層で流入土である。ℓ６・８～11は，壁面崩落土を主体としている。ℓ10・11は，互層状に硬くしまった様子が確認できた。底面・壁面との境界は比較的明瞭であった。遺物は出土しなかった。

ℓ10・11の土壌に微細な炭化物が含まれており，年代測定分析を試みた。5,640±40yrBPの値が得られ，縄文時代早期～前期頃との結果が得られた。（水　野）

７号土坑　ＳＫ７（図４，写真４）

本遺構は，調査区の中央部東のＤ５グリッドに位置する。他との重複関係はないが，12号土坑と近接する。上面は，畑の耕作により撹乱されている。検出面で覆土中に多量の炭化物の分布が認められることから，周辺の木炭焼成土坑に類するものとして調査した。

本遺構は一辺110cm程度の不整な隅丸方形を呈する。検出面からの深さは，４cmである。底面は平坦に造られ，地面の傾斜に沿って東に傾く。壁面から底面までが浅く，緩やかな立ち上がり部分が確認できるのみである。遺構内堆積土は２層確認した。中央部では炭化物が少なく，壁に近いほど多く含まれている。遺物は木炭以外出土しなかった。

炭化物や形態から木炭焼成土坑または類する土坑である可能性が高い。遺存する壁面がわずかであるため，焼土化範囲は認められなかった。堆積土中の炭化物１点について，年代測定分析を試みた。1,290±30yrBPの結果が得られ，７世紀中頃との値が出ている。明瞭な木炭焼成遺構である２号土坑と，ほぼ同時期の値が得られた。木炭以外の出土遺物はなく，考古学的所見からも古代と考えられ，分析結果と相違しない。（水　野）

８号土坑　ＳＫ８（図４，写真４）

本遺構は，調査区の中央部東Ｄ６グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。東壁の一部は，畑の耕作により破壊されている。検出面で覆土中に多量の炭化物の分布が認められたことから，周辺の木炭焼成土坑として調査した。

本遺構は長軸73cm，短軸53cmの長円形を呈する。検出面から底面までの深さは７cmを測る。底面は平坦であるが，地面の傾斜に沿って東に傾く。遺存する壁面は浅く，緩やかな立ち上がり部分が確認できるのみである。

遺構内堆積土は，砂質の強い土層の１層のみ確認した。炭化物・焼土粒を多量に含んでいる。木炭以外の遺物は出土しなかった。

多量の炭化物が出土することから木炭焼成土坑または類する土坑である可能性が高い。遺存する壁面が浅く，焼土化範囲は認められなかった。堆積土中の炭化物の年代測定分析を試みたところ，1,300±30yrBPの結果を得た。明瞭な木炭焼成遺構である２号土坑とほぼ同時期の古代との結果が得られた。（水　野）

９号土坑　ＳＫ９（図４，写真５）

本遺構は，調査区南側のＣ８グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。近接して６号土坑は北へ５ｍ，10号土坑は南へ５ｍの距離にある。堆積土の状況や，底面が円形に近い形状である点で，本遺構に共通する。

本遺構は長軸141cm，短軸137cmで円形を呈する。検出面からの深さは120cmを測る。壁面は平坦な底面から急に立ち上がり，中位は壁面崩落による抉れが認められる。検出面では崩落により若干緩い傾斜で広がる。形態より落し穴状土坑である可能性があるが，逆茂木などは認められなかった。

遺構内堆積土は，すべて自然堆積である。ℓ１～６は黒色土が主体であり，以下の堆積とは異なる。ℓ７以下はおおむね壁の崩落土を主体としている。ℓ８～10は，崩落土が互層状に硬くしまった様子が確認できる。底面・壁面との境界は比較的明瞭であった。遺物は出土しなかった。

堆積状況や形態，周囲の土坑との状況から，落し穴状土坑と考えられる。ℓ５・６の微細な炭化物より，年代測定分析を試みたところ，6,060±40yrBPの結果を得た。６号土坑よりも古い値であるが，配列状況や形態的に同時存在と考えられる。分析結果より，推定時期は縄文時代早期～前期程度と考えられる。（水　野）

10号土坑　ＳＫ10（図４，写真５）

本遺構は，調査区中央南側のＣ９グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はない。６号土坑は北へ10m，９号土坑は北へ５ｍの距離にある。いずれも堆積土の状況や，底面が円形に近い形状になる点で共通する。

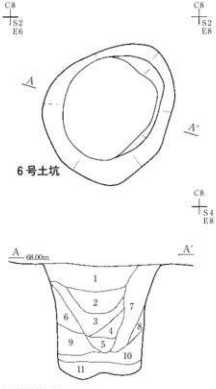
本遺構は径110cmの円形を基調としている。検出面から底面まで深さは82cmを測る。壁面は崩落により，一部にオーバーハングが認められるが，使用時では断面形が円筒状の土坑であったと考えられる。壁面は底面から急に立ち上がり，検出面では崩落により若干緩い傾斜で広がる。形態から落し穴状土坑に類する可能性があるが，逆茂木痕は認められなかった。

遺構内堆積土は，ℓ１～６は黒色土が主体となる層で，ℓ７以下の堆積土とは異なる。ℓ７～９はおおむね壁面の崩落土を主体としている。ℓ８～９は，崩落土が互層状に硬くしまった様子が認められる。ℓ９はより黒色であり，底面・壁面との境界は比較的明瞭であった。遺物は出土しなかった。

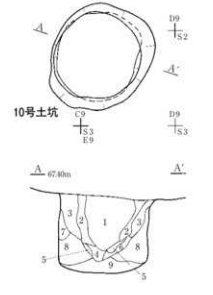
掘削時に底面近くから湧水が認められることから，貯蔵穴としては使用しがたいと考えている。６・９号土坑と堆積状況が似ていることなどから，遺構の時期は縄文時代と考えられる。（水　野）

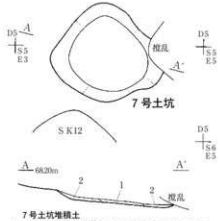
11号土坑　ＳＫ11（図５，写真４）

本遺構は調査区南東端のＤ９グリッドに位置し，丘陵末端の肩部に近い緩斜面に立地している。遺構検出面はＬⅢ上面で，重複する遺構はない。

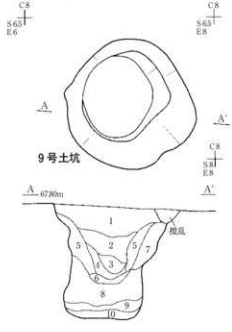


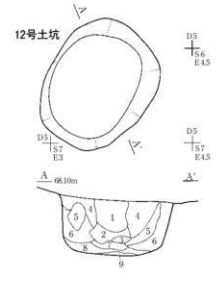
6号土坑堆積土
1　黒色土　25Y2/1(黄褐色土粒多量)
2　黒色土　25Y2/1(黄褐色土粒微量)
3　黒褐色土　25Y3/1(黄褐色土粒多量)
4　黒色土　25Y2/1
5　暗オリーブ褐色粘質土　25Y3/3
6　オリーブ褐色粘質土　25Y4/4(黒褐色土粒多量)
7　黒褐色粘質土　25Y3/2(黄褐色土粒多量)
8　オリーブ褐色粘質土　25Y4/4(黒褐色土粒多量)
9　にぶい黄褐色粘質土　25Y6/4(黒褐色土粒多量)
10　黒褐色砂質土　10Y R2/3(炭化物微量、ℓ 11との互層)
11　暗灰黄色砂質土　2.5Y4/2

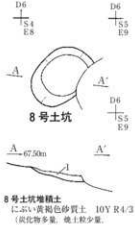




7号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色砂質土　10Y R3/4(炭化物粒少量)
2　黒色砂質土　10Y R1.7/1
(炭化物粒多量、焼土粒少量)







8号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色砂質土　10Y R4/3
(炭化物多量、焼土粒少量、
上塩・魂少量)

9号土坑堆積土
1　黒褐色土　10Y R2/3
(黄褐色土粒多量)
2　黒色粘質土　10Y R1.7/1
(黄褐色土粒少量)
3　黒色粘質土　10Y R1.7/1
(黄褐色土粒微量)
4　黒色粘質土　10Y R2/1
(黄褐色土粒多量)
5　褐色粘質土　10Y R4/4
(黒褐色土粒多量、炭化物微量)
6　黒褐色砂質土　25Y3/2
(黄褐色土粒多量、炭化物微量)
7　にぶい黄褐色砂　25Y6/4
(暗褐色土少量)
8　黄褐色砂　25Y5/3
(暗灰黄色砂との互層)
9　黒褐色砂　10Y R3/2
(黄褐色砂との互層)
10　暗灰黄褐色砂　25Y5/2
(黄褐色砂多量)

10号土坑堆積土
1　黒褐色土　10Y R2/3
2　にぶい黄褐色砂質土　10Y R3/4
3　黄褐色砂質土　10Y R5/8
(黒褐色土少量)
4　灰黄褐色砂質土　10Y R4/2
(黄褐色砂少量)
5　黒色土　10Y R3/1
6　褐色砂　10Y R4/4
(灰黄褐色砂・黄褐色砂多量)
7　明黄褐色砂質土　10Y R6/6
8　黄褐色砂　10Y R5/8
(黄褐色砂・にぶい黄橙色砂多量)
9　黒褐色砂　10Y R5/3

12号土坑堆積土
1　黒褐色土　7.5Y R2/2
2　暗褐色砂質土　10Y R3/4
(黒褐色土との混土)
3　黒色土　10Y R2/1
4　暗褐色砂質土　10Y R3/4
(褐色土を斑状に混入)
5　浅黄色砂質土　25Y7/4
(暗褐色砂少量)
6　黄褐色砂　10Y R5/6
(明黄褐色砂少量)
7　黒色砂　10Y R2/1
8　黒褐色砂　10Y R3/2
(黄褐色砂少量)
9　暗褐色砂　10Y R3/4
(暗褐色土少量)

図4　6～10・12号土坑

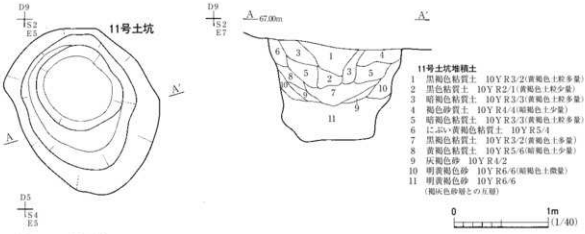


図５　11号土坑

本遺構は，北西－南東にやや長い不整な円形を呈し，上端の規模は長径179cm，短径144cm，遺構検出面から最深118cmを測る大型の土坑である。底面は灰白色粘土層に達しており，調査中は底面から湧水がみられた。径約110cmある底面は，北側でさらに５cm程度階段状に低くなる特異な形状をなす。壁面は崩落の影響により，一定していない。

遺構内堆積土は11層に分けられ，ℓ９・10の層理面を境界にその上層と下層に区分される。つまり，ℓ１～８はおおむね黒褐色や黄褐色の粘質土で構成されるのに対し，ℓ９～11は明黄褐色砂が主体を占めるなど，色調・土質とも大きく異なり，このような堆積状況は６・９・10号土坑などに似通っている。上部の土層のうち，ℓ４・６・８などはＬⅢａに類似し，ℓ１～３・５・７は腐食質土が主体を占める。下層のℓ９～11は，主に壁面の土層と土質や土色が同じことから，崩落土と理解される。上層と下層の境界は，色調だけでなくしまりの違いでも明瞭に区別できた。ℓ11は粘土層と砂層が重畳しながら底面を厚く覆う土層である。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は，円形を基調とする落し穴状土坑で，周辺に分布する落し穴状土坑と同時期に機能していたと考えられる。縄文時代の所産と推定している。　（佐　藤）

12号土坑　ＳＫ12（図４，写真５）

本遺構は，調査区中央部東のＤ５グリッドに位置する。他遺構との重複関係はないが，７号土坑と近接する。畑の耕作による撹乱の下位から，試掘調査で半裁されて埋め戻された状態で検出した。

本遺構は長軸141cm，短軸111cm，残存深さ66cmの楕円形を呈する形状である。平坦な底面から緩やかに立ち上がり，壁は基本的に垂直に造られている。

遺構内堆積土は，ℓ１～６は黒色土主体，ℓ７～９は崩落土が主体となる層である。ℓ７～９は互層状に硬くしまったようすが認められた。ℓ９はより黒色に近く，底面・壁面との境界は比較的明瞭であった。遺物は出土しなかった。

平面形や断面形からでは，落し穴状土坑とは断定できない。ただ，堆積土の状況が他の落し穴状土坑に類似しているため，同様の時期である縄文時代の所産と想定できる。　（水　野）

第３節　遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物は，縄文土器２点・石器片11点・鉄滓１点のみで，非常に少ない。層位的にはＬⅠ～Ⅲからまばらに出土している。このうちＬⅢ出土の石器２点については，出土地点を記録している。図６には石器３点を図示した。掲載しなかった縄文土器のうち１点は，胎土に繊維混和痕が認められる縄文施文の小片で，前期前半の所産と考えられる。鉄滓は，時期不明の流出滓であった。

石　　器（図６，写真５）

図６－１は流紋岩製の石鏃で，上半部を欠損する。基部は平坦であることから，二等辺三角形に近い形状とみられ，縄文時代早・前期に属する可能性が高い。２は凝灰岩製の石錐である。比較的大きな基部に，細く短い身部が付く形態となる。裏面にはハジケが観察できるので，被熱していることが分かる。３は良質の珪質頁岩が用いられている。背面側に調整が加えられた欠損品で，器種の限定は難しい。片面にのみ調整が加えられることから，篦状石器や石匙の未成品とも考えられる。図示しなかった石器は，いずれも砕片である。石質には，頁岩・流紋岩などが用いられている。

（佐　藤）

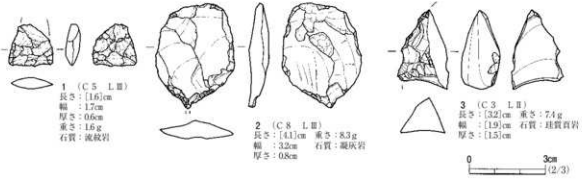


図６　遺構外出土遺物

第３章　ま　と　め

発掘調査の結果，土坑12基が検出された。このうち１・６・９～11号土坑の５基が落し穴状土坑，２～５・７・８号土坑の６基が木炭焼成に関する土坑であった。放射性炭素年代測定（ＡＭＳ法）の結果もふまえ，前者が縄文時代，後者が古代の所産と推定されている。また，性格不明の12号土坑も，堆積土の類似から縄文時代の遺構と考えられる。

落し穴状土坑は調査区の南部に分布する。ちょうど丘陵の平坦面から肩部にかけて立地することとなり，ここを通過する獲物を対象に造られたと考えられる。１基のみ離れた12号土坑も，丘陵肩部に面しているという点では共通性が見出せる。このうち，６・９・10・11号土坑は円形の平面形や，黒色土が上層に堆積するなど類似性が強く，これらが組み合って機能した可能性も指摘できる。１号土坑は，堆積土に黒色土を含まない点で異なるが，縄文土器が出土している。よって，これらの落し穴状土坑はすべて縄文時代の所産と考えられる。

木炭焼成土坑は，浜通り地方の製鉄関連遺跡で一般的にみられる遺構である。本遺跡の立地する丘陵では，調査区の西方で，かつて鉄滓が採取できたとの聞き取りを得ていることから，製鉄炉が予想される。現在までのところ，丘陵上での鉄滓の分布や製鉄炉の痕跡は未確認であるが，仮に存在するとすれば，本遺跡で生産された木炭が供給されていた可能性は十分に考えられる。

複数回使用した痕跡が認められた３号土坑は，浜通り地方でこれまで検出された木炭焼成坑の中でも最大級を誇る。また，その形状も，一般的な木炭焼成土坑が長方形を基調とするのに対し，方形を呈し，異なる。このように３号土坑は，これまで古代の木炭焼成土坑と報告されている土坑と比較して，相違点が多い。放射性炭素年代測定によれば，周辺の土坑より新しい年代が提示されており，所属年代に起因する可能性を指摘しておきたい。これまで製鉄関連遺跡で報告された木炭の年代は，遺構の想定年代より若干古く出される傾向があった。この点を勘案すれば木炭焼成土坑は奈良・平安時代，３号土坑は平安時代後半以降に位置付けて大過ないと考えられる。

（佐　藤）

付　章　自然科学分析

はじめに

古堤遺跡では，出土した炭化物について，放射性炭素年代測定と樹種同定を行った。遺跡は，福島県双葉郡浪江町立野字古堤に所在し，調査では縄文時代・古代の遺構・遺物が検出されている。以下，項目に沿って記述していくが，用語や表記については加速器分析研究所の報告にしたがった。なお，年代測定にあたり，分析の客観性を保つために，遺跡の位置や出土地点・層位・取り上げ月日以外の情報は知らせていない。また，炭化物の樹種同定は，パリノ・サーヴェイ株式会社にて実施した。

第１節　古堤遺跡の放射性炭素年代

株式会社　加速器分析研究所

１　測定対象資料

測定対象資料は，古堤遺跡の２号土坑底面から出土した炭化物（１：IAAA-82168），３号土坑底面から出土した炭化物２点（２：IAAA-82169，３：IAAA-82170），５号土坑底面から出土した炭化物（４：IAAA-82171），５号土坑 ℓ４から出土した炭化物（５：IAAA-82172），６号土坑 ℓ10から出土した炭化物（６：IAAA-82173），７号土坑 ℓ２から出土した炭化物（７：IAAA-82174），８号土坑 ℓ１から出土した炭化物（８：IAAA-82175），９号土坑 ℓ６から出土した炭化物（９：IAAA-82176），合計９点である。

２　化学処理工程

（１）メス・ピンセットを使い，根・土等の表面的な不純物を取り除く。

（２）酸処理，アルカリ処理，酸処理（AAA：Acid Alkali Acid）により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では１Ｎ塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では１Ｎの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。なお，AAA処理において，アルカリ濃度が１Ｎ未満の場合，表中にAaAと記載する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では１Ｎの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後，超純水で中性になるまで希釈し，90℃で乾燥する。希釈の際には，遠心分離機を使用する。

（３）資料を酸化銅と共に石英管に詰め，真空下で封じ切り，500℃で30分，850℃で２時間加熱する。

（４）液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し，真空ラインで二酸化炭素（CO_2）を

精製する。

（5）精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し，グラファイトを作製する。

（6）グラファイトを内径1㎜のカソードに詰め，それをホイールにはめ込み，加速器に装着する。

3　測定方法

測定機器は，3MVタンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準資料とする。この標準資料とバックグラウンド資料の測定も同時に実施する。

4　算出方法

（1）年代値の算出には，Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polash 1977）。

（2）^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は，過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され，1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。この値は，δ^{13}Cによって補正された値である。^{14}C年代と誤差は，1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また，^{14}C年代の誤差（$\pm 1\sigma$）は，資料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2％であることを意味する。

（3）δ^{13}Cは，資料炭素の^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し，基準資料からのずれを示した値である。同位体比は，いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰）で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により^{13}C/^{12}Cを測定した場合には表中に（AMS）と注記する。

（4）pMC（percent Modern Carbon）は，標準現代炭素に対する資料炭素の^{14}C濃度の割合である。

（5）暦年較正年代とは，年代が既知の資料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の^{14}C濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，1標準偏差（1σ＝68.2％）あるいは2標準偏差（2σ＝95.4％）で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は，下一桁を四捨五入しない^{14}C年代値である。なお，較正曲線および較正プログラムは，データの蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは，暦年較正年代の計算に，IntCal04データベース（Reimer et al 2004）を用い，OxCalv4.0較正プログラム（Bronk Ramsey 1995　Bronk Ramsey 2001　Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001）を使用した。

5　測定結果

^{14}C年代は，2号土坑底面から出土した炭化物が1,290±30yrBP，3号土坑底面から出土した炭化物2点が1,250±30yrBPと1,120±30yrBP，5号土坑底面から出土した炭化物が1,320±40yrBP，5号土坑　ℓ4から出土した炭化物が1,330±30yrBP，6号土坑　ℓ10から出土した炭化物が5,640±

40yrBP，７号土坑 ℓ２から出土した炭化物が1,290±30yrBP，８号土坑 ℓ１出土炭化物が1,300±30yrBP，９号土坑 ℓ６から出土した炭化物が6,060±40yrBPである。

資料の炭素含有率は，資料№６を除いて60％以上であり，十分な値であった。資料№６は土壌中にある厚さ１～２㎜の黒色の層であり，通常の炭化物とは異なるものであった。可能な限り黒色部分を回収したが，完全に他の土壌部分を分離できる状態ではなかった。この炭素含有率は15.5％であり，有機物であることは間違いないが，通常の炭化物や木炭ではないことも確かである。資料№１～３については，５㎝前後の炭化物であり，木質の年輪が複数確認できたため，年輪の最外部から資料を採取した。ただし，樹皮がみとめられないため，年代値が樹木の枯死年代を示すとは断定できない。その他の資料は小片であり，状態の良いものを選択した。

暦年較正年代(1σ)から判断すれば，２・３・５・７・８号土坑出土資料は厳密には時期差が認められるが，７世紀後半から８世紀前半を中心とする時期の所産と推定される。６号土坑出土資料は縄文時代前期前葉，９号土坑出土資料が縄文時代早期末～前期初頭に相当する。

表１　放射性炭素年代測定結果

測定番号	資料№	採取場所		資料形態	処理方法	δ ‰(‰)(AMS)	δ ‰補正あり	
		遺　構	層　位				Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-82168	1	２号土坑	底面	炭化物	AAA	-22.95 ± 0.8	1,290 ± 30	85.12 ± 0.34
IAAA-82169	2	３号土坑	底面	炭化物	AAA	-24.59 ± 0.78	1,250 ± 30	85.55 ± 0.33
IAAA-82170	3	３号土坑	底面	炭化物	AAA	-24.4 ± 0.68	1,120 ± 30	87.01 ± 0.36
IAAA-82171	4	５号土坑	底面	炭化物	AAA	-24.54 ± 0.83	1,320 ± 40	84.9 ± 0.37
IAAA-82172	5	５号土坑	ℓ４	炭化物	AAA	-21.4 ± 0.84	1,330 ± 30	84.76 ± 0.34
IAAA-82173	6	６号土坑	ℓ10	炭化物	AaA	-22.85 ± 0.66	5,640 ± 40	49.56 ± 0.22
IAAA-82174	7	７号土坑	ℓ２	炭化物	AAA	-25.45 ± 0.77	1,290 ± 30	85.12 ± 0.33
IAAA-82175	8	８号土坑	ℓ１	炭化物	AAA	-26.51 ± 0.42	1,300 ± 30	85.07 ± 0.34
IAAA-82176	9	９号土坑	ℓ６	炭化物	AAA	-23.7 ± 0.83	6,060 ± 40	47.02 ± 0.24

表２　暦年較正年代

測定番号	δ ‰補正なし		暦年較正用(yrBP)	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age(yrBP)	pMC(%)			
IAAA-82168	1,260 ± 30	85.47 ± 0.32	1,294 ± 32	670AD－715AD (44.2%) 744AD－768AD (24.0%)	660AD－775AD (95.4%)
IAAA-82169	1,250 ± 30	85.62 ± 0.3	1,254 ± 31	688AD－778AD (68.2%)	672AD－831AD (88.5%) 836AD－869AD (6.9%)
IAAA-82170	1,110 ± 30	87.12 ± 0.34	1,117 ± 33	894AD－972AD (68.2%)	784AD－787AD (0.4%) 825AD－842AD (1.8%) 862AD－1014AD (93.2%)
IAAA-82171	1,310 ± 30	84.98 ± 0.34	1,315 ± 34	660AD－695AD (43.6%) 700AD－708AD (6.4%) 748AD－766AD (18.1%)	653AD－773AD (95.4%)
IAAA-82172	1,270 ± 30	85.38 ± 0.31	1,328 ± 32	655AD－691AD (56.4%) 750AD－763AD (11.8%)	648AD－723AD (75.1%) 740AD－771AD (20.3%)
IAAA-82173	5,600 ± 30	49.78 ± 0.21	5,639 ± 35	4522BC－4448BC (62.1%) 4416BC－4405BC (6.1%)	4544BC－4436BC (73.5%) 4430BC－4368BC (21.9%)
IAAA-82174	1,300 ± 30	85.04 ± 0.3	1,294 ± 30	670AD－715AD (44.2%) 745AD－768AD (24.0%)	662AD－774AD (95.4%)
IAAA-82175	1,320 ± 30	84.81 ± 0.33	1,298 ± 32	668AD－713AD (45.4%) 745AD－767AD (22.8%)	660AD－774AD (95.4%)
IAAA-82176	6,040 ± 40	47.15 ± 0.22	6,061 ± 40	5026BC－4930BC (60.6%) 4924BC－4910BC (6.4%) 4862BC－4859BC (1.3%)	5196BC－5180BC (1.7%) 5062BC－4843BC (93.7%)

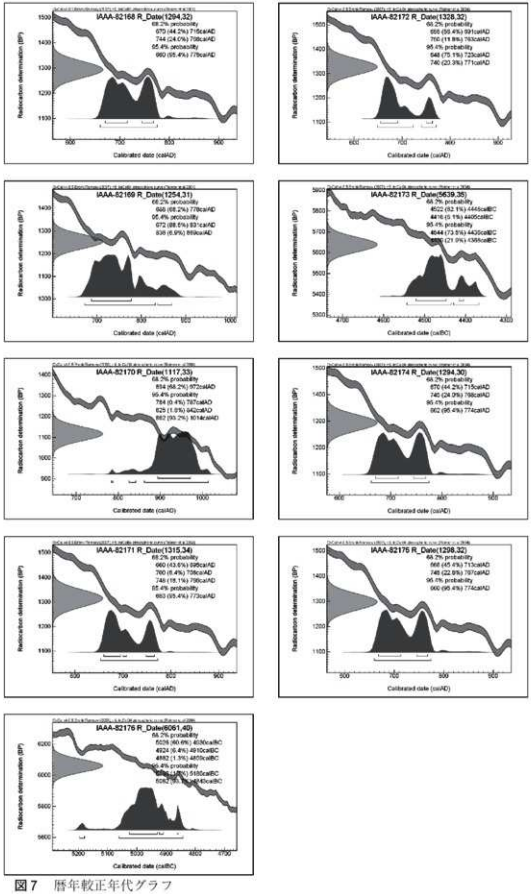


図7　暦年較正年代グラフ

参考文献

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, *Radiocarbon* 19, pp.355-363

Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon* 37 (2), pp.425-430

Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43(2A), pp.355-363

Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43(2A), pp.381-389

Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, pp.1029-1058

第２節　古堤遺跡出土炭化材の樹種同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

古堤遺跡（福島県双葉郡浪江町大字立野字古堤所在）は，請戸川左岸の丘陵上に立地する。今回の発掘調査により，古代の木炭焼成土坑と考えられる土坑などが検出されている。

今回の自然科学分析調査では，古代の木炭焼成坑と考えられる３・５号土坑および木炭焼成に関連する土坑とされる８号土坑から出土した炭化材について，木材利用に関する資料を得るために樹種同定を実施する。

１　資　　料

資料は３号土坑の底面から出土した炭化材２点（資料№２・３），５号土坑底面から出土した炭化材１点（資料№４），８号土坑から出土した炭化材１点（資料№８）の合計４点である。

２　分析方法

資料を自然乾燥させた後，木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の割断面を作製し，実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し，その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

木材組織の名称や特徴については，島地・伊東（1982）やWheeler他（1998）を参考にする。また，日本産木材の組織配列については，林（1991）や伊東（1995，1996，1997，1998，1999）を参考にする。

３　結　　果

樹種同定結果を表３に示す。炭化材は，広葉樹２分類群（アサダ・クリ）に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

アサダ　*Ostrya japonica* Sarg.　カバノキ科アサダ属

散孔材で，管孔は単独または放射方向に２～４個が複合して散在し，年輪界に向かって径を漸減

表3　樹種同定結果

測定番号	資料№	遺　構	位　置	樹　種
IAAA-82169	2	3 号土坑	底面	クリ
IAAA-82170	3	3 号土坑	底面	クリ
IAAA-82171	4	5 号土坑	底面	クリ
IAAA-82175	8	8 号土坑	ℓ 1	アサダ

＊測定番号は前節を参照

させる。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列，内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性，1-3細胞幅，1-30細胞高。

クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　ブナ科クリ属

環孔材で，孔圏部は2～3列，孔圏外でやや急激に管径を減じたのち，漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性，単列，1～15細胞高。

4　考　察

木炭焼成土坑の3号土坑は，長辺が約1.7mあり，本遺跡周辺の木炭焼成土坑の中では最大級とされる。発掘調査所見では，底面の底上げにより，最低2回の使用が確認されている。資料№2・3は，いずれも底部から出土しており，古い段階に焼かれた木炭とされており，年代測定の結果では資料№2が1,250±30yrBP，資料№3が1,120±30yrBPの値が得られている。炭化材は，2点ともクリに同定された。クリは，二次林などに生育する落葉広葉樹で，木材は重硬で強度・耐朽性が高い材質を有する。今回資料とした2点が同一種であることから，3号土坑においてクリが選択的に利用された可能性がある。

木炭焼成土坑の5号土坑は，発掘調査所見により3号土坑とは年代が異なる可能性が指摘されており，資料№4の炭化材を用いた年代測定の結果でも1,320±40yrBPの値が得られている。この炭化材の樹種もクリであり，3号土坑と同様の木材利用が認められる。年代測定の結果を考慮すれば，遺構の時期や規模に関わらず，木炭焼成土坑ではクリを製炭していた可能性がある。

一方，8号土坑は，小型の木炭焼成土坑の可能性もあるが，底面や壁面に酸化面が認められないため，木炭焼成に関連する土坑とされている。ℓ1から出土した資料№8の年代は1,300±30yrBPであり，5号土坑と同時期の遺構の可能性がある。炭化材は，広葉樹のアサダに同定された。アサダは，河畔林などを構成し，木材は重硬で強度が高い材質を有している。本遺跡の木炭焼成土坑の炭化材が全てクリである結果とは木材利用が異なっているため，8号土坑は木炭焼成土坑とは異なる遺構の可能性がある。

クリは，生木では重硬で強度が高い材質を有するが，製炭すると柔らかく燃焼性の高い木炭になり，民俗事例ではマツ炭と共に鍛冶用燃料材として利用される（岸本・杉浦1980）。古代の木炭焼成土坑については，これまでにもいわき市のタタラ山遺跡で樹種同定が行われているが，基本的にはクリ材を主体とした結果が得られており（パリノ・サーヴェイ株式会社1995），今回の結果とも調和

的である。同時期の製鉄炉ではコナラ節などを主体とし，クリの利用が少ないことを考慮すれば，木炭焼成土坑で焼かれたクリ炭は鍛冶などに利用された可能性がある。今後，鍛冶炉等の燃焼材について木材選択に関する資料を蓄積し，鍛冶用燃焼材の木材利用や木炭焼成土坑で焼かれた木炭の利用状況について検討することが望まれる。

引用文献

林　昭三　1991『日本産木材　顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所

伊東隆夫　1995「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究（資料31）』京都大学木質科学研究所，pp.81－181

伊東隆夫　1996「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」『木材研究（資料32）』京都大学木質科学研究所，pp.66－176

伊東隆夫　1997「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」『木材研究（資料33）』京都大学木質科学研究所，pp.83－201

伊東隆夫　1998「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」『木材研究（資料34）』京都大学木質科学研究所，pp.30－166

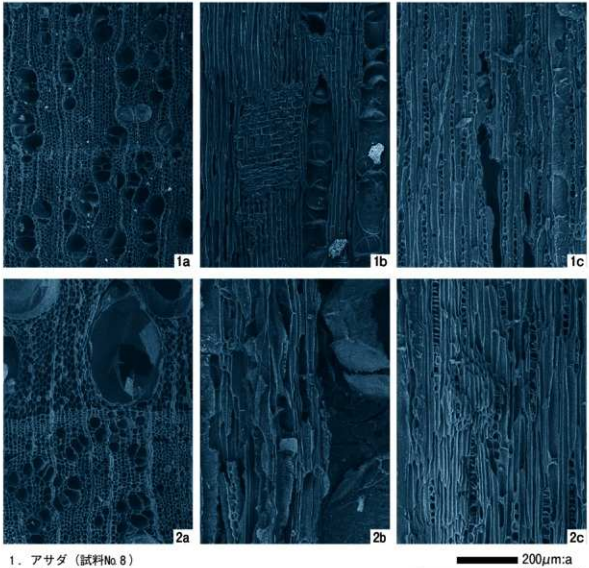
伊東隆夫　1999「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ」『木材研究（資料35）』京都大学木質科学研究所，pp.47－216

岸本定吉・杉浦銀治　1980『目曜炭やき師入門』総合科学出版，p.250

パリノ・サーヴェイ株式会社　1995「いわき市タタラ山遺跡・駒込遺跡・馬場Ａ遺跡出土炭化材の樹種」『福島県文化財調査報告書第316集　常磐自動車道遺跡調査報告4』福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター・日本道路公団仙台建設局いわき工事事務所，pp.196－206

島地謙・伊東隆夫　1982『図説木材組織』地球社，p.176

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）　1998『広葉樹材の識別　ＩＡＷＡによる光学顕微鏡的特徴リスト』伊東　隆夫・藤井　智之・佐伯　浩（日本語版監修）海青社，p.122［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（1989）*IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*］.



1．アサダ（試料№８）
2．クリ（試料№３）
　a：木口，b：柾目，c：板目

図８　炭化材の木材組織　顕微鏡写真